

## 現代語の語彙調査：総合雑誌の用語 後編

著者	国立国語研究所
発行年月日	1958-02
シリーズ	国立国語研究所報告 ; 13
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00001226">http://doi.org/10.15084/00001226</a>

国立国語研究所報告 13

現代語の語彙調査

# 総合雑誌の用語

後編

国立国語研究所

1958

国立国語研究所報告 13

現代語の語彙調査

# 総合雑誌の用語

後編

国立国語研究所

1958

## 刊行のことば

現代の書きことばに関する研究の一つとして、国立国語研究所では先年来、総合雑誌の用語・用字の調査を進めて来た。そして昨年度には、この調査の範囲で多く使われていた約四千二百語につき、使用率を示した語彙表をまとめて『総合雑誌の用語前編』を公刊した。その後日に譲った、用語の語彙論的分析・統計的分析に関する仕事が、最近一通り終わったので、その成果を『総合雑誌の用語後編』としてここに刊行する。

この調査研究は、第一研究部書きことば研究室が担当し、主任林大を中心として所員齋賀秀夫・水谷静夫・石綿敏雄が共同して事に当たった。

昭和33年2月

国立国語研究所長 西 尾 実

# 目 次

刊行のことば	i
この報告書の要旨	iv
1 調査の輪郭	1
1・1 この調査のねらい	1
1・2 計画	1
1・21 企画の際の諸条件	1
1・22 調査対象	3
1・23 調査研究項目	3
1・24 調査方式	3
1・3 実施	4
1・31 実施機関と担当者	4
1・32 実施の経過	4
2 方法	6
2・1 編集者調査	6
2・11 編集方針・読者層・執筆陣	6
2・12 表記法、表現のむずかしさとその対策	7
2・13 雑誌の分類についての意見	8
2・2 雑誌の部類分け	9
2・3 調査単位の句切り方	10
2・4 集計単位の定め方	19
2・5 作業手順	24
3 語彙構造の量的分析	26
3・1 語彙量の推定	26
3・11 問題	26
3・12 推定法のアイデア	26
3・13 推定法	29
3・14 推定結果	31
3・15 推定法の根拠	32
3・16 上記の推定法の反省	37
3・2 使用率の分布函数	38

3・21	分布函数を求める事の意義	38
3・22	今までに示された諸函数式	39
3・23	射影函数型による近似	41
3・24	結果の検討と問題点の反省	44
4	意味から見た語彙の構造	45
	分類語彙表	51
	分類項目一覧	74
5	語構成に関する分析	78
5・1	まえがき	78
5・11	分析の目標	78
5・12	対象の限定	79
5・13	分析の準備——語の品詞別分布——	79
5・2	語の結合力	83
5・3	語と語との結合関係	86
5・31	結合関係の分析	86
5・32	一字の漢語の結合形式	88
5・33	二字の漢語の結合形式	90
5・34	和語の結合形式	91
5・35	語の内部における結合形式	92
5・4	あとがき	93
付録Ⅰ	語彙調査の成立根拠と基本的諸概念の定義	94
付録Ⅱ	この調査で採った抽出・推定法	97
1	抽出・推定の方針	97
2	抽出三方式の比較	98
3	等大の集落抽出法による使用率の推定	99
4	実際の抽出	102
5	集計の方式	105
付録Ⅲ	同じ語か異なる語かの線型判別函数による決定	108
1	解決法のアイデア	108
2	この調査で使った判別函数	109
3	判別函数を作るまでの経過	113
4	付記	114
索引		116

## この報告書の要旨

報告書『総合雑誌の用語』は、前編（報告12）後編（同13）の二部から成る。これは、総合雑誌とそれに似寄りの雑誌との十三誌の、ある一年分の本文について行った語彙調査の結果をまとめたものである。

前編には、この調査対象で割合に多く使われていた約四千二百語について作った、五十音順と使用率順との語彙表が載せてある。なおこの語彙表の特色は、使用率の大きい方から約一千語に対して、推定精度および信頼度95パーセントのもとでの信頼区間が算出されていることである。これは恐らく世界でも最初の試みであろう。

後編では、この調査の方法と調査対象にした語彙に関する分析結果とを報告した。この種の調査では word count の基礎となる「単位量」の設定が、まず問題となる。その理論的な事は付録Ⅰに、実際上の扱いは §2・3 と §2・4 および付録Ⅲとに述べた。またこの調査は標本抽出法によっている。その技術的な事は付録Ⅱに記述した。更にわれわれは調査の企画に当って、対象の候補にあがった雑誌の出版社を訪問し、編集方針などの予備知識を得るための質問をした。これは §2・1 に述べてある。調査結果の分析については、次に述べる三つをこの報告13に取り上げた。

語彙構造の量的分析 (§3) ——二つの問題を扱った。一つは、調査対象が全体でどのくらいの異なる語を含むか、つまり語彙量の推定である。結果は、十三誌全体の範囲で約四万四千語（ほとんどの助詞・助動詞を含まず、固有名詞・数詞を含む）であった。また十三誌を雑誌の性格によって分けた三つの部類についても、同様の推定をした。またここで用いた推定法の理論的根拠をも明らかにした。もう一つの問題は、使用率の分布函数を求めることである。今までの諸説を簡単に紹介した上で、報告4の場合と同じく射影函数形による近似を試みたが、結果はまだ余り良くはない。

意味から見た語彙の構造 (§4) ——報告4に発表した婦人雑誌語彙の分類法を修正する方向において、総合雑誌語彙の意味分類を行った。前編の語彙表に見出しとして掲げたすべての語はもちろん、その語彙表からは、使用率が小さい（従って推定精度も高くはない）という理由で省かれた語のおもなものを、ここの分類語彙表にはあげてある。なおこの表は word count の集計単位となったものによって作ってあるので、それらが複合した形や慣用句などはあげてない。

語構成に関する分析 (§5) ——標本の前半部をなす延べ約十二万語のうちに現われた語で、かつその標本使用度数が10以上の語をおもな対象として、語の結合力、語と語との結合形式、語の内部における結合形式等について検討した。結合の意味的關係には触れられなかったが、総合雑誌に現われた漢語と和語との構造について一往の見通しをつけることが出来た。なお語構成に関する分析に付随して、標本の前半部で採集されたすべての語の、品詞別による分布について、一つの結果を示した。

# 1 調査の輪郭

## 1・1 この調査のねらい

この調査は、国立国語研究所が創立以来行って来た現代語の実態の調査、特に書きことばにおける語彙に関する調査の一段階をなすものであって、先に結果を公にした婦人雑誌の語彙調査にひきつづき、総合雑誌およびそれに近い内容を持つ雑誌十三種について、その用語の実態を記述しようとするものである。

われわれは、現代書きことばの実態調査の資料として、まず範囲をマスコミュニケーションメディアの特に印刷流布されるものの内に限り、さらに月刊雑誌の形をとるものを選んだのであるが、その雑誌の部門を、大体、

学術 実用・通俗科学 時局・国民 総合 文芸 人生・宗教 趣味・娯楽  
婦人・生活 学習・年少者読物

にわけるとして、先には婦人雑誌を選んで日常家庭生活的な面での用語を求めようとし、今回は総合雑誌を選んで、知的な思想的な面での普通用語を求めようとしたのである。

そのためには、まず調査対象でどんな語がどれくらい使われているかの実態を明らかにする必要がある。この目標を達成するためわれわれは、きわめて小さい比率をも相当の精度で推定出来るような標本抽出法をくふうし、それによって延べ二十三万余語の標本から、資料全体における約九百万語の使用状況を推定したわけである。ここでは、一々の語の使用率とその分布とが中心課題となるが、かような使用率に関する調査の結果は、基本的な用語の範囲を定めるのに直接に役立つ、従って国語教育と標準語確立とへの基礎的な資料となり、また表記法体系の改善への重要な資料となるものである。われわれは先に報告書前編において、この調査で得られた上位四千三百語の、五十音順ならびに使用率順の表を示した。この後編においては、総合雑誌の語彙における量的構造を分析すると共に、意味的構造と、語構成の一般的傾向とについての分析を行う。

なお、われわれは、この調査に平行して、「当用漢字の適用によって生ずる問題とその解決法の研究」について文部省科学試験研究費の交付を受け、同じ範囲における語の表記および漢字の用法を分析したが、これについては別に報告の機を待つことにする。また、この調査に関連して、「用言 30 語の用法」を国立国語研究所年報 8 に掲げた。

## 1・2 計画

### 1・21 企画の際の諸条件



## § 1・2

今回の調査は、取り上げる雑誌の範囲をいわゆる総合雑誌とその周辺の雑誌とに定めたほか、先に行った婦人雑誌の用語調査と同じねらいをもつ。この調査に使える人員・予算・設備などの条件も、前回と大差がない。従って前回での基本的な方針は今回にも承け継がれる。ただし同種の調査を既に一回行ったという経験は、初めてであった婦人雑誌調査の場合より有利に働く。その一つの現われは、標本抽出法・使用率推定法の改良である。その代り調査範囲が広くなったので、そこに新たな技術的問題も生じる。これらのためにわれわれは、小規模な準備調査を行って統計的推定法の検討をした（国立国語研究所年報 5, 19~20 ページ）。その結果、

使用率が相当大きい語に対してはその推定精度を算出して添えることが出来るとの確信を得、これを企画の際の一条件として課した。この事は今回の調査の一つの特色をなすものである。今までの語彙調査にも標本調査方式によったものはあるが、精度まで添えたものは見当たらない。それは数多くある個々の語に対して精度計算を一々する労力の負担に耐えなかったからであり、また従来普通に行われていた標本抽出法では語の使用率のようなきわめて小さい比率の推定に対して余り高い精度が期し難かったからでもあろう。以上の抽出法・推定法に関する詳しい条件は、別に付録Ⅱの1で再び取り上げる。

それ以外の点について言えば、まず調査単位の認め方が前回通りでよいか否かの検討を必要とした。これを判定する規準としては、1) 言語理論として妥当であること、2) 基本語彙を定める資料として有用な結果が得やすいものであること、3) 使用率の測定という計量的操作が意味をもつような単位であること、4) 共同作業を行う必要上その単位が扱いやすいこと、の四つが重要である。（語彙調査での単位に要請される論理的性質については付録Ⅰ参照。）前回の「 $\alpha$ 単位」は少なくとも上の2)と3)との点でまだ改める余地があると考えられた。 $\alpha$ 単位は言わば文節に当るもので、集計の際にはそこから助詞・助動詞を除いて扱った。しかしそのほか別表単位を設け二重の集計を行わなければならなかった事は、更に小さな下位単位も集計の単位として意味をもつ事を暗示している。言語理論として妥当な単位は、何も一通りとは限らない。そこで上記の四つを同時になるべく良く満たすような単位を求める努力が必要である。

すなわち  
言語事実に即して妥当・有用であり、測定単位として意味があり、かつ与えられた表現をそういう単位に句切り集計する操作が客観的に、またたやすく施せるように、言語単位の認め方を定め直すこと

が、この調査の大きな前提条件となった。§2・3、§2・4に述べる所は、これに対するわれわれの一つの解答である。

更に調査範囲の規定の仕方について、婦人雑誌調査の場合には付録の部分、主として技術上の制約から省いたが、これでは対象全般を押さえたとは言えまい。ゆえに今回は

本誌・付録・増刊の別を問わず、およそ本文と認められる部分はすべて調査の範囲に含めること、

ただし助詞・助動詞は一般に取り上げないこと

を条件として課した。これらの諸条件のもとに調査計画を立てた。

### 1・22 調査対象

調査対象は、『改造』『世界』『中央公論』を典型とする総合雑誌およびそれに似寄りの雑誌、すなわち下記の十三誌のある一年分の本文、詳しく言えば昭和28年7月号から昭和29年6月号までの本誌・付録およびこの期間に発行された増刊号の範囲につき、その本文に使われた(助詞・助動詞のほとんどすべてを除く)あらゆる $\beta$ 単位の集合である。さてその十三種の雑誌とは

改造 解放 学園評論 国民 心 人生手帖 世界 世潮 中央公論 日本及日本人  
ニューエイジ 文芸春秋 平和

であって、この時期に発売されていたこの類の雑誌を尽すと言えよう。中には途中で休廃刊になったものもあるが、そういう雑誌も発行された号はすべて含んでいる。

なおこの調査対象は約九百万の $\beta$ 単位から成ると推定される。またこれらの読者数が日本の読書人口の何割ぐらいかは、よるべき調査がないので分らないが、<sup>注)</sup>これらの雑誌が現代日本文化に持つ位置が一般に大きい事は言うまでもない。たゞしこの十三誌の中には様々の性格のものが混じっていて、均質ではない。だから集計では、更に § 2・2 に述べるような部類分けもして扱った。しかし一方、婦人雑誌とか文芸雑誌とか大衆娯楽雑誌とかいう類と比べれば、これら十三誌の取材内容に共通性が高い点で、一括しても扱える。

### 1・23 調査研究項目

調査項目および調査結果の分析項目として選ばれたのは次のものである。

- 1° 個々の語の調査対象における使用率の推定(使用順位の若い語については、推定精度をも算出する。)
- 2° それらの語の表記形式の分類記述およびそこに使われた漢字の度数の測定
- 3° 総合雑誌語彙の量的構造の分析
- 4° 総合雑誌語彙の意味的構造の分析
- 5° 調査対象で使用順位の若い語の意味用法の分類記述
- 6° 総合雑誌語彙における語構成の類型の分析

### 1・24 調査方式

この調査は標本抽出方式による。その抽出法は、本文の $\frac{1}{2}$ ページ分を単位としてこれを20個ランダムに組み合わせた等大の集落を作り、これに等しい抽出確率を与えて、約四十分の一の抽出比で抜く方法である。すなわちランダムに形成した等大の集落の層別等確率抽出法である。もちろん標本は各層に比例配分した。また使用率は比推定法で求めた。

上記の抽出法はこの調査のために新たに考案したものであり、詳しくは付録Ⅱにしるすが、その特色は(1)推定精度の算出が他の方法に比べ割合に手間取らないこと、(2)標本全体を調

---

注 世上の読書調査は、文化現象としての読書状態を調べる方向からでなく、個々の雑誌の読まれる度合の番付を作るという関心の持ち方から行われている。だからわれわれには余りよい資料にならない。

## § 1・3

べなくても一定水準の推定精度を満たすような語については、組織的な確かめによって途中で調査が打ち切れるようにしたことである。(2)の特色によって調査の労力は、この仕方を採らない場合に比べ、二割程度節約出来た。また従来の語彙調査で推定精度を添えなかった一つの原因は、その算出に非常な労力を要するからであった。(1)の特色はこの難点を著しく緩和する。今回の調査では、対象全般での使用率推定について約一千語、各層でのについて都合約九百語に対し精度計算を行った。このために費した期間は三箇月余にとどまった。すなわち電動計算器・電動加算器各1台と時に応じて手動計算器2台・そろばん・二乗平方根表とを使い、百五十人手間ぐらいで精度計算を終えたことになる。もし婦人雑誌調査で採用したのと同じ方式を使ったとすれば、これと同じ事をするのに約二十倍の労力を要したと思われる。

調査単位を採集するには、雑誌の  $\frac{1}{4}$  ページ程度の本文をあらかじめ孔版タイプライターで打って謄写複製したリプリント=カードを使った。つまり前回の調査で『婦人生活』に対して行った方式で、普通の謄写版を使う代りにタイプライターを用いたわけである。また採集カードは手集計により、整理して整理票に必要事項を記入し、使用度数の和を取って行った。

### 1・3 実施

#### 1・31 実施機関と担当者

この調査は、国立国語研究所第一研究部において、書きことば研究室の共同研究として行われたものである。その計画と実施とに直接従事した所員、ならびに各自の特に分担した項目は次の通りである。

- 林 大 (語の意味用法に関する問題)
- 永野 賢 (語の表記および漢字の用法に関する問題)
- 斎賀 秀夫 (語構成に関する問題)
- 水谷 静夫 (語彙の量的構造の問題、および全般的な統計的扱いの問題)
- 石綿 敏雄 (語の意味用法に関する問題)

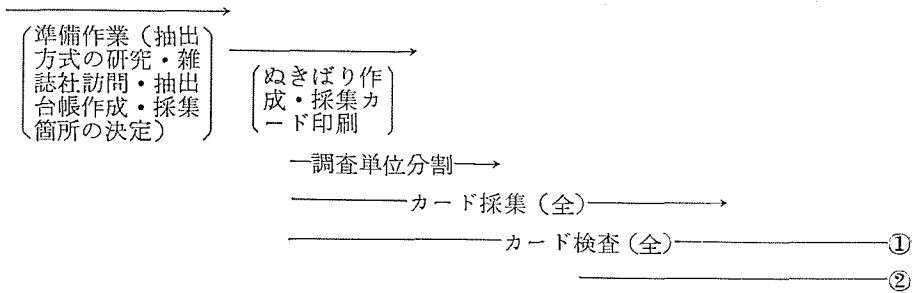
なお、永野賢は昭和30年度までこの研究室に属した。またこの調査に当って、臨時筆生岡本美奈子、黒木玲子、高木翠、西尾英美子、西山洋子、橋本圭子、広吉玲子、松垣玲子が、所内において採集・整理・集計・製表その他の作業に従事し、また十数名の補助者が所外にあって採集作業に加わった。

#### 1・32 実施の経過

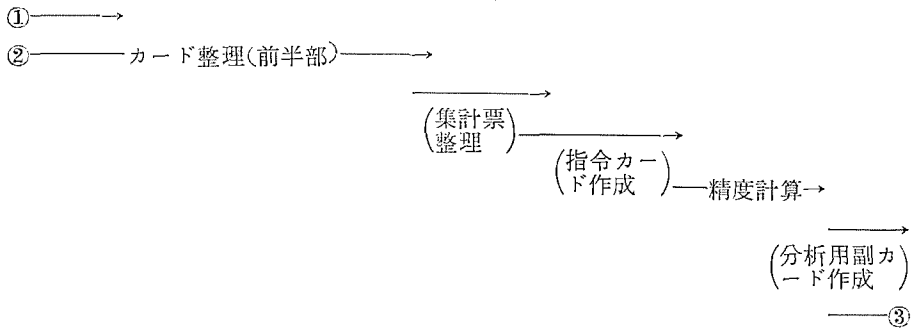
この調査は昭和29年4月に着手し、報告書作成を昭和32年12月に終えた。その間の経過は次の図に示す通りである。

§ 1・3

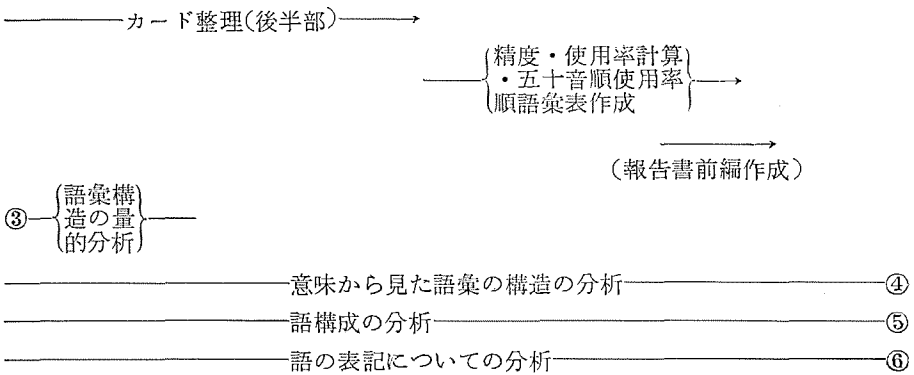
29年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	30年 1月	2月	3月
-----------	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----------	----	----



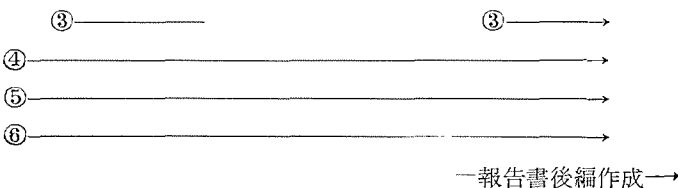
30年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	31年 1月	2月	3月
-----------	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----------	----	----



31年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	32年 1月	2月	3月
-----------	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----------	----	----



32年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
-----------	----	----	----	----	----	-----	-----	-----



## 2 方法

方法の概念を広く取れば、そのよって立つ原理論から個々の調査技術に至るまで、きわめて多様な内容を持つ事になる。作業上の細かい技術的な問題は、方法論としてゆるがせに出来ないものも少なくないが、それらの相当部分は既に国立国語研究所年報 5 (22 ページ以下), 7 (94 ページ以下) に述べたから、煩を避けて省く。また計量的研究の方法論的基礎はこの報告書の付録 I に譲る。調査方式の概要は先に § 1・24 で述べた。標本抽出法・利用率推定法については当然この章で扱うべきであるが、読者の便を考慮して別に付録 II にまとめて述べる。従ってこの章では、言わば field-work にはいる前に行うべき、そしてその結果が field-work の進め方を左右するような部分について述べ (§ 2・1~2・4), 最後に field-work に相当する作業の手順の大筋だけをしるす (§ 2・5)。

### 2・1 編集者調査

この調査の企画に役立つ情報を得る目的で、昭和29年5月下旬から6月上旬にかけて、結局われわれが調査範囲に定めることにした、『解放』<sup>(注)</sup>を除く12誌、および調査範囲からは除くことになった他の2誌の編集部を訪れ、編集上責任ある地位の人に面接し、調査を行った。以下は調査範囲となった雑誌につき、質問に対して編集者の応じた答をまとめたものである。調査事項は以下のものより詳しいが、簡単にまとめた。ここにしるしたところは調査時のものであって、必ずしも現在の状態と同様ではない。

#### 2・11 編集方針・読者層・執筆陣

読者層について得た答をまとめてみると、雑誌は次の二つのグループに大別される。すなわち「国民一般に広く」読まれることを予定するものと、何らかの意味で限られた対象を考えているものとのである。前者には『世界』『中央公論』『改造』『世潮』『文芸春秋』などが属する。

編集方針としては、この類の中に「日本人の代表意見を出し、また世界の状態を正確に日本に紹介したい」「大新聞が故意に避けたり孤立させて扱っている問題をじっくり取りあげていきたい」などのものがある。ただし『文芸春秋』は「現在の社会状態、政治などを含んだ話題を読者に与え、判断の資料を提供する。もっとも問題に対するまっこうからの論文の形でなく自然にわかりやすいような形で与え、解決を望んだりもしない」と言っており、その方針にやや異なるものがある。また『改造』は「『文芸春秋』的なものをもと考えて増刊号を出したが、本誌とは編集部が別である」と語った。

上に掲げたもの以外の雑誌も、それぞれなるべく広く読まれることを心がけてはいるが、読

---

注 『解放』は当時既に廃刊になっていたので、調査できなかった。

## § 2・1

者の層に何らかの限定がある。若い層を特にねらうという答も数誌から得た。大体『世界』の読者層より低く若い層を対象と考えているもの(平和), 更に若い層, たとえば『平凡』を読むような人々を考えているもの(人生手帖), 学生だけを対象とするもの(学園評論)がある。また『ニューエイジ』は若い層と同時に年齢にかかわらずクリスチャンに読まれていると答えた。このほかに有識層, インテリなどに読まれているもの(心, 日本及日本人), 特に労働組合員を主たる対象としているもの(国民)がある。

この類のものの編集方針は次に示すようにいろいろである。「右にも左にも片寄らない立場をとり, 同人の考えを述べ訴える」(心)のように同人の執筆になるもの, 「平和を願う人が集まって平和を守る運動を推進する手引となり指針となるように」(平和), 「労働運動が一般に理解され, 国民生活を救う中心を作ること」(国民)のように運動推進を目的とするもの, 「国民精神の回復発揚と人格の尊重向上を目指す」(日本及日本人)のようにある意味で上と似た立場にあるもの, 「学園の問題を中心に話し合い, 学生自身が作っていく雑誌」(学園評論)「若い人々の記録をもとに人生問題をみんなで考える」(人生手帖)のように若い人々が話し合うことを目的とするもの, 「キリスト教主義によって立つ一般総合雑誌」(ニューエイジ)のように背後に宗教のあるものなどである。

編集部から原稿を依頼する人の職業については, 『世界』『中央公論』『改造』『世潮』『文芸春秋』などでは, 学者・大学教授・評論家・ジャーナリストなどをおもなものとしてあげている。これらのほかに, 特に平和運動家を付け加えたもの(平和), 労組幹部を加えたもの(国民)キリスト教牧師を加えたもの(ニューエイジ)がある。執筆者が学生・教授だけに限定されていたのは『学園評論』である。

### 2・12 表記法, 表現のむずかしさとその対策

かなづかいは, 調査した12誌のうち9誌では現代かなづかいを建前とし, その7誌は執筆者から希望があれば歴史的かなづかいを認める。12誌のうち残る3誌(心, 中央公論, 日本及日本人)では原稿に使ってあるかなづかいを尊重し, 歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めることはしない。座談会もその発言者の平生のかなづかいによるという答(心), 執筆者の希望がなくても気持を編集部で考えて旧かなづかいにするという答(文芸春秋), 反対に歴史的かなづかいを希望する人はいないという答(平和, 国民)もあった。

当用漢字以外の字が多量に含まれている場合にはどうするか。この質問に対して, 同音同訓の当用漢字に置き換えたり言い換えたりすることがあると答えたものが3誌(平和, 国民, 学園評論)あった。読者の学力が低いのでルビを付けたり, 注釈をつけたりして表現をやさしくすることに熱心だとの答(人生手帖)もあった。ここでは表外字はつとめてかな書きにすることであった。しかし多くは, 表外字であるからということで漢字の置き換えなどすることではなく, 表外字はそのまま残しており(7誌), 当用漢字の制限を全く無視し, または意識していないと答えたところも少なくなかった。この問題については, 典型的な総合雑誌群や『心』『日本及日本人』は概してその配慮が少く, またはほとんどなく, 他の雑誌ではその逆の傾向

がある。

そこで次の問を試みた。他の部門の雑誌に比べてむずかしい漢字や外来語などが多いために、つかみたいと思う読者層を逃していることがあると考えているか。これに対してそうは考えないと答えたもの8誌、そのように考えるもの2誌、むずかしいとは認めるが内容上やむを得ないと答えたもの1誌、残る1誌では同時に後の二つの答に当るであろうと語った。この中には「悩みを共通にするものは、むずかしくてもついてくる」「読者によってむずかしいというものと、やさしいというものとある」「もっとやさしくしたらと思われなくてもないが、読者が広範なために決心がつかない」などの答があった。

表現をやさしくするためにどんな手を打っているかについては、執筆者にやさしくなるように書き改めてもらうもの2誌、執筆者に相談して改めるもの3誌、用語の解説を添えるもの1誌、初めから執筆者にやさしく書いてくれと頼むもの6誌があった。ここでは「むずかしい人はどうにもならない。むずかしい文章を書く人の場合は手を入れてみても仕方がないので、全般としてそのままにしている」、「外国語にはしかるべき訳語を付けるように頼む」「横文字が原稿に入っている場合は編集部で日本語にし、そのルビとして外国語を残している」、「書いてもらわず話してもらって、それを編集部でまとめたり、編集部でリライトしたりする」などという所もあった。

### 2・13 雑誌の分類についての意見

編集者が考えている総合雑誌とはどんなものかを知るため、次のような質問をした。(1)この雑誌を総合雑誌に分類してよいか。(2)入れないとすれば総合雑誌とどう違うか。(3)総合雑誌はどう定義できるか。

(1) 分類してよいと答えたのは次の6誌である。『世界』『中央公論』『改造』『世潮』『平和』『学園評論』

入れることをしいて主張しないが、条件つきでなら入れてよいと答えたのは『国民』と『人生手帖』である。『国民』は『『平和』は読者が一般的だが『国民』は限られている。そういう意味で特殊だという条件をつけるならば入れてもよい』と編集者自身が語ったが、これに関して『改造』の面接した編集者は『『国民』や『平和』はむしろ機関誌であろう』と言っていた。『人生手帖』の編集者は「どう生きるかについて学んだり考え合ったりするという、編集者の考える新しい意味のものでなら入れてもよい」と言ったが、『世潮』では『『ニューエイジ』や『人生手帖』などは生活面をとりあげているが、読者が限られているなどの条件をつければ入れてもよいと思う』とその見解を述べた。

(2) 総合雑誌に入れないと答えたものは次の4誌である。

『文芸春秋』——編集者自身は「総合雑誌というよりむしろ国民雑誌、大衆雑誌、または家庭雑誌というべきものである」と言っていた。他の雑誌の編集者も、たとえば、『改造』の編集者は『『中央公論』『世界』『世潮』『改造』は同類の雑誌だが、『文芸春秋』は別の性格の雑誌である』と答えた。もっとも『世潮』の編集者の意見は「典型的な総合雑誌は『世界』『中央

## § 2・2

公論』『改造』『世潮』などであるが、『文芸春秋』は自ら百万人の総合雑誌だといっているよ  
うだから総合雑誌に入れてよい」であった。

『心』——編集者自身は次のように言った。「雑誌の出発から特殊性があり、初めは文芸  
思想雑誌と銘打っていたが、積極的に時事問題を取りあげる方針になってきたから総合雑誌に  
近づいているであろう。」ただし『世潮』や『学園評論』では「『心』は趣味の雑誌ではない  
か」といっていた。

『日本及日本人』——編集者自身は「この雑誌は、思想雑誌、指導雑誌ともいうべきものであ  
る。現在のいわゆる総合雑誌には指導性が少ないと見る」と語った。

『ニューエイジ』——編集者自身は「『中央公論』や『改造』などとは性格が違う。現在の状態  
では文化教養誌ともいうべきものである」といった。これに関して『世潮』では「『人生手帖』  
を入れるのと同じ理由で、『ニューエイジ』を総合雑誌に入れてもよい」と言っていた。

(3) 総合雑誌の定義については、「文字通り総合だ」「一部門に限らず、文化現象に広くわ  
たるもの」「政治・経済・文学など文化上の諸問題を広く取りあげるもの」などの意見が一般  
的である。このなかには「指導性と取材の範囲で決まり」(改造)、「新聞に対する批判の声と  
して歴史的に形成されたもの」(改造、平和)で、しかも「商業雑誌であるもの」(改造)の答  
もあった。

### 2・2 雑誌の部類分け

編集者調査の結果や推定される発行高・読者層や雑誌の記事内容やを考え合わせて、対象と  
する十三誌を次の三つの層に分けた。

第Ⅰ層 『改造』の本誌と『解放』『世界』『世潮』『中央公論』と。

第Ⅱ層 『文芸春秋』と、その増刊号に性質の似ている『改造』増刊号の「日本を動  
かす一〇〇〇人」と。

第Ⅲ層 『学園評論』『国民』『心』『人生手帖』『日本及日本人』『ニューエイジ』『平  
和』

前回の婦人雑誌の場合は、調査範囲が二誌に限られていた事もあったが、記事別に層を分け  
た。今回記事別を採らなかったわけは、婦人雑誌の場合ほどそれがうまく行きそうもなかった  
事<sup>注</sup>、それを行おうとすれば層別抽出台帳を作るまでに非常な時間を要し、調査の遅れを来た  
す事、また雑誌数が多く様々な性質のものが混じっているので、雑誌を単位に層を立てても使  
用率推定のための層分けの効果はあがると考えられた事である。ただし雑誌単位とは言っても  
上記の『改造』増刊号だけは、その内容が『文芸春秋』人物読本とほとんど同じだと認められ  
たので、『改造』本誌から切り離して『文芸春秋』の層に入れた。

注 婦人雑誌は目次にその記事を掲げる時の体裁を手掛りとして、ある程度客観的な記事別が出来る。  
今回は雑誌の種類も多く、そういう形の上での手掛りがつかめなかった。



## 2・3 調査単位の句切り方

婦人雑誌の調査の際、われわれは、 $\alpha$ 単位<sup>注1)</sup>と称する言語単位を調査単位として用いた。

今回の総合雑誌の調査では、新たな規準による調査単位を採用して、これを $\beta$ 単位と名づけた。これは一般に言って $\alpha$ 単位よりも短いものである。 $\beta$ 単位の認定規準は以下に示す通りであるが、それを決めるに先立ってわれわれが考えた二三の事項につき、前もって述べておこう。

【語源単位の認定】われわれは、新しい調査単位を決めるにあたって、まず語源単位<sup>注2)</sup>の語形の結合の回数をもって、規準を立てる上の一往の目安にしようとした。語源単位の語形とは、語構成上、常識的に意味の分析に対応させることのできる、そしてそれ以上の小さい部分語形に分割できない語形をさす。ここで常識的と言ったのは、たとえば、《まど(窓)》《なべ(鍋)》《おしろい(白粉)》等を、それ以上に分割しない程度の常識である。さらに具体例について説明しよう。

和語の場合、たとえば《朝日》《母親》という語においては、《朝》《日》《母》《親》を、それぞれ一個の語源単位と考える。また、《思いあきらめる》《疑いぶかい》では、《思い》《あきらめる》《疑い》《ふかい》を、それぞれ一個の語源単位とする。

漢語の場合は、漢字一字にあたるものを、一語源単位とみなす。《社会》《運動》は、それぞれ《社》と《会》、《運》と《動》という二個の語源単位より成る語であり、《新国家》は《新》《国》《家》という三語源単位より成る語と考える。

漢語以外の外来語・外国語では、その原国語で単語と認められているものを、語源単位と見なす。たとえば、《アイスショウ》では、《アイス》と《ショウ》を、《ウォーミングアップ》では《ウォーミング》と《アップ》を、それぞれ一個の語源単位と考える。

このようにしてとらえた語源単位の結合の回数や、その結合の状態を一つの規準として、調査単位を決定したのである。

【助詞・助動詞に対する処置】この調査では、いわゆる助詞・助動詞の大部分を調査対象から除外した。従って、助詞・助動詞に対しては、語源単位としては考えないし、また以下に述べる「 $\beta$ 単位の規定」も適用しない。ただ、一般に助詞・助動詞と言われるものの中で、特に調査単位として取り上げた語例があって、それらは、後に〔別表〕として示す「 $\beta$ 単位とする付属要素」の中に掲げてある。(16～19 ページ参照)

【結合・単独ということ】以下の $\beta$ 単位についての規定中には、しばしば「結合」とか「単独」とかいう用語が出てくる。ここで結合というのは、相接する二つ以上の単位語が、文節の内部のものとして、なにかひとまとまりの意味および機能を持つ場合をさす。ただし、助詞・助動詞などのいわゆる付属語は除外する。従って、自立語と付属語との結合や付属語どうしの結合

注1  $\alpha$ 単位の規定及びその調査単位としての反省は、国立国語研究所報告4『婦人雑誌の用語』19ページ、316ページを参照。

注2 語源単位は、適切な命名ともいえないが、報告4『婦人雑誌の用語』316ページの注による。

## § 2・3

は問題にしない。つまり一個の語源単位より成る自立語に付属語が付いていても、それは結合でなく単独と考えるのである。また、自立語でも、用言の連体法、副詞法、中止法などや、副詞・連体詞・接続詞が、修飾・接続の関係で後に続き、一個の文節をなすことの明らかなものは、結合の中には含めない。それらの自立語が一個の語源単位から成っている限り、それは単独と見なす。

われわれは、以上の前提のもとに、次に説明するような規定を設けて調査単位を決定し、これをβ単位と呼ぶことにした。

(以下に引用する例は、すべて、われわれの調査対象に現われた実例である。引例のうち、| |でくぎられた各部分から、β単位の語が一つずつ採集される。そのうち下線を施したものは、その項の規定が適用される語であることを示す。)

### 【β単位の規定】

1 次の各項に該当するものを、一β単位とする。

11 他の語源単位と結合することなく、単独に用いられる一語源単位。

例： | この | 川に | 木の | 橋が | 架かって | いる。 | その | 橋を | わたった | と  
ころに	石の	門が	あり，	門の	奥に	村	役場が	ある。
しかし	必ずしも	常に	正しいとは	云え なかった。				
肉や	バター や	魚が	足り ない。					

12 別表「一β単位とする付属要素」に掲げられたもの。

例： | 選挙の | 時 | だけは | わざわざ | 家 | まで | き | やが って |  
| 私 | たちは | お | 互いが | お | 互いを | 監視 | し | あ って | いる | の | に |  
| 気が | ついた。 |

13 二つの語源単位が一回結合したもの。三つ以上の語源単位が二回以上結合したものは、第一次的に結合する二語源単位をもって一β単位とする。

例： 問題 主義 国民 経済， 人々 組合 青空 さや寄せ  
首切り それぞれ， 出会う 引越す 心細い， ラヴ・シーン  
ビヤ・ホール ノック・アウト Gメン， 職場 口絵 急ピッ  
チ ゲリラ戦 赤ランプ ゴム消し， 空母 安本 参院 早  
慶

公務 | 員 坑道 | 乱掘 給与 | 引上げ 賃上げ | スト， 破防 |  
法 団規 | 令 特審 | 局 全 | 炭労 日 | 教組

14 語源単位が四音節以上になるものは、結合のいかんにかかわらず、独立して一β単位とする。(この規定は、13に優先する。)

例： から | くれない うす | むらさき スター | システム サラリ  
ニ | マン

ただし、動詞の場合は連用形、形容詞の場合は語幹の音節数をその規準とする。

§ 2・3

例：《わらい顔》は一βであるが、《あざけり | 顔》は二βとする。また、《うすあかるい》《うらさびしい》は、それぞれ一βであるが、《うら | はずかしい》は二βとする。

15 結合の部分として用いられた一語源単位のうち、次の各項に該当するものは、三音節以下であっても独立して一β単位とする。(この規定も、13に優先する。)

15・1 12, 13および14の適用を受けるβ単位に、順次に結合したもののそれぞれ。

例 i) 12に結合したもの： 相 | 容れない お | かわり かあ | さん あ  
ち | ら | 風 合 | う | ようだ 争 | う | ばかり (。は一β単位とする付属要素)

ii) 13に結合したもの： 横 | 文字 疎開 | 跡 仕事 | 場 眉唾 | 物 | 視  
| する

不 | 可能 無 | 愛想 非 | 合法 | 的 速記 | 者 理工 | 科  
自然 | 科学 | 書 有名 | 無実 | 化 植民 | 地 | 化 理論 | 物理 | 学 |  
者 医師 | 会 | 長 材木 | 業 | 者 文学 | 部 | 長 (ただし、次のよう  
なものは13の規定に従う。 召集 | 令状 開拓 | 地区)

中 | 小 | 学校 二 | 大 | 低下

デフレ | 予算 入試 | コース 太 | ビヤ・ホール ラヴ・シーン | 賞  
オール・スター | キャスト バット・マン | レース

iii) 14に結合したもの： アチーブメント | テスト スタイズ | プレー

ただし、外国語の前置詞などで、国語の助詞と同様の機能をもつものは、その前のところをβ単位の切れ目とする。しかしその前置詞は、一語源単位としては数えない。(以下の引例で下点を施したもの)

例： ケース | バイ ケース バランス | オブ パワー メード | イン イングラン  
ド

15・2 次のような結合の型をもつもの。ただし、この場合は、カードの採集・整理に際して特別の扱いをする。

i) 《給 | 排水》の型 (《給{水}》と《排水》という二つのβ単位に分ける。)

例： 魚 | 獣肉 青 | 少年 男 | 女兒 陶 | 磁器 市 | 町 | 村長

ii) 《絹糸 | 布》の型 (《絹糸》と《{絹}布》という二つのβ単位に分ける。)

例： 祖父 | 母 養父 | 母 国内 | 外

15・3 個々に独立して用いられる可能性があり、かつそれらが三つ以上並列されたものは、その一つ一つを一β単位とする。

例： 市 | 町 | 村 衣 | 食 | 住 上 | 中 | 下 都 | 道 | 府 | 県 土 | 農 |  
工 | 商 仁 | 義 | 礼 | 智 | 信

ただし、並列でも23の条件をそなえたものは別の扱いをする。(次のページ参照)

2 次の各項に該当する結合形をもつものは、原則1の規定にかかわらず、その結合形

§ 2・3

全体を一β単位とする。

21 音転化のため、語源単位の切れ目の明らかでないもの。

例： くない うっちゃらかす かんがみる

22 助詞「の」「が」「つ」等を介して二つの語源単位が結合して一つの成語としての意味をもつもののうち、全体が五音節までのもの。

例： 板の間 菜の花 滝つ瀬 沖つ波 知らん顔 お手のもの ころごろ（「最近」の意）

23 次のような並列の条件をそなえたもの。

i) 個々に独立して用いられることのない語源単位の並列の場合

例： 雪月花 松竹梅 花鳥風月 東西南北 春夏秋冬（いずれも音読みの場合。訓読みにすべき場合は、14・3を適用する。）

ii) 独立、非独立に関係なく、二語源単位の並列の場合

例： 衣食 天地 上下 左右 上下|左右

iii) 略称の並列的結合の場合

例： 日英 早慶 京阪神 薩長土肥

iv) ローマ字を並べた略称

例： M. S. A. PTA Y. W. C. A. UNESCO

24 漢語で三語源単位以上の結合をもつもので、次の各項に該当するもの（漢語以外の場合もこれに準ずる。）

24・1 一つの物や事柄の名前になったもので、間に切れ目のおきがないもの。

例： 除虫菊 山茶花 雁来紅 馬鈴薯 厩炉裏 万年筆 赤十字  
未亡人 皇太子 大統領 浄瑠璃

24・2 三字以上がすでに一つの成語としての意味を有し、間に切れ目のおきがないもの。

例： 有頂天 人非人 雾困気 集大成 無一物 未曾有 不思議  
不可分 不可避 不可解 不可欠 殺風景 大丈夫（形容動詞の場合）

不可思議 不俱戴天 有耶無耶

24・3 梵語・洋語等を漢字に音訳したもの。

例： 阿弥陀 盂蘭盆 仏捨刀 天麩羅 倶楽部

3 固有名詞<sup>註</sup>に対する扱いは、原則1および2の規定にかかわらず、次のようにする。

（語源単位の結合数や音節数にかかわらない。）

31 人名に対しては、姓を一β、名を一βとする。また、通称もしくは号、官名などもそれぞれ一βとする。

例： 吉田|茂 周|恩来 ホー|チミン ハロルド・|E・|スタッセン

注 ここていう固有名詞とは、人名および地名を表わすものに限る。

§ 2・3

明智 | 左馬介 | 光秀

古今亭 | 志ん生 柳家 | 小さん 豊竹 | 山城 | 少掾

暗闇の | 丑松 鑄かけ | 松 切られ | 与三

ただし、次のものは全体で一β単位とする。

i) 徳球 エノケン シミキン F・K | 麩 (《伊藤 | 忠》《織田 | 作》の類は、それぞれ二β。)

ii) 千代の山 玉乃海 東富士

32 行政区画を表わす地名は、全体で一β単位とする。なお、《都、府、県、郡、市、区、町、村、丁目、番地》は、それぞれ一β単位とする。

例： 東京 | 都 | 目黒 | 区 | 上目黒 | 五 | 丁目 | 二 | 三 | 九 | 六 | 番地 都下 | 西多摩 | 郡 | 五日市 | 町 中央 | 区 | 日本橋<sup>注1)</sup> | 一 | 一 | 五

33 固有名詞において、種差を表わす部分と、名を表わす部分との結合したものは、その結合点をβ単位の切れ目とする。ただし種差を表わす部分の結合については、原則1および2を適用する。

例：〔国名〕 アメリカ | 合衆 | 国 南 | アフリカ | 連邦

ただし、次のものはそれぞれ一β単位とする： 北米 | 合衆 | 国 ソ連 西独 | 連邦 韓国

〔地域名〕 中部 | 地方 東海 | 道 東 | インド | 諸島 カリフォルニア | 州

ただし、次のものはそれぞれ一β単位とする： 本州 北海道 北満

〔地形名〕 富士 | 山 マウント | エヴェレスト 日高 | 川 楊子 | 江 十和田 | 湖 太平 | 洋 瀬戸 | 内海 東京 | 湾 九十九里 | 浜 アツ | 島

ただし、次のものはそれぞれ一β単位とする： <sup>だいせん</sup>大山 長江 黄河 紅海 大島

〔場所名〕 銀座 | 並木 | 通り キングス・クロス | 停車 | 場 東急 | 祐天寺 | 駅<sup>注2)</sup>

ただし、駅名で、地名の上に国名を冠してあるものは、それぞれ一β単位とする： 武蔵 | 小金井 | 駅 下総 | 中山 | 駅

〔建造物名〕 帝国 | ホテル 読売 | ホール ヤンキー | スタジアム 日劇 | ミュージック | ホール 聖 | バジル | 大 | 寺院 法隆 | 寺 修学 | 院

〔会社名〕 ナショナル | 金銭 | 登録 | 器 | 株式 | 会社 太平 | 洋 | 海運 石

注1 地名でなく、橋の名前としての場合は《日本 | 橋》とする。

注2 駅名でなく寺の名前をさす場合は、《祐天 | 寺》とする。

§ 2・3

川島 | 重工

〔団体・宗派名〕 相模 | カントリー | クラブ 草月 | 流 小笠原 | 流 花

柳 | 流 キリスト | 教 めしや | 教 天理 | 教

ただし、次のものはそれぞれ一β単位とする： 仏教 儒教 回教

〔学校名〕 東京 | 大学 日本 | 女子 | 体育 | 短期 | 大学 千代田 | 区 | 立 |

番町 | 第 | 一 | 中学 | 校

34 固有名詞と普通名詞との結合したものは、その結合点をβ単位の切れ目とする。

例： 吉田 | 社長 リ | 将軍 静岡 | 代表 李 | ライン 太平 | 洋 | 戦争

反 | ソヴェト | 論 ワシントン | 詣で

4 数詞に対する扱いは、1, 2および3の規定にかかわらず、次のようにする。

41 数そのものを表わす部分と、助数詞<sup>註</sup>の部分との結合形は、その結合点をもってβ単位の切れ目とする。

例： 第 | 一 | 等 三十 | 坪 十 | 五 | 箇国 五 | 時 | 二十 | 分

42 数を表わす部分は、表記のいかんにかかわらず、次のようにする。

42・1 一, 十, 百, 千のけたごとに、それぞれ一β単位とする。

例： 一 | 九 | 四〇 | ~ | 四 | 八 | 年 一 | メートル | 六 | 五 十 | 五 | 時間 |

半 3 | 6 | 5 | 日

42・2 《万, 億, 兆》は、助数詞なみに、それぞれ一β単位として独立させる。

例： 五 | 億 | 三千 | 二百 | 四十 | 三 | 万 | 八千 | 円

《億, 万》が表記されていない場合、次のように { } の中に補ってβ単位として採集する。

5 | 3 | 2 | 4 | 3 | 8 0 0 0 | 円 (\*のところに {億} を, \*\*のところに

{万} を補う。従って採集する単位の数は上の例と一致する。)

42・3 分数は次のようにする。

例： 五 | 分の | 一

《分の》が表記されていない場合、{ } の中に補って、β単位として採集する。

$\frac{1}{5}$ \* (\*のところに {分の} を補う。従って採集する単位の数は上の例と一

致する。)

42・4 小数は次のようにする。

例： 0. | 5 3 0. | 3 2 | 億

43 数詞もしくは助数詞に結合した《何, 幾, 数<sup>すう</sup>》は、数詞なみの取扱いをする。

例： 何 | 回 何 | 円 幾 | 度 幾 | 組 数 | 種 数 | 坪

何百 | 年 何 | 万 | 何千 | 何百

注 助数詞とは、数量的な表現と結合して、数量の単位を表わすもの。助数詞は別表の「一β単位とする付属要素」中に掲げられるので、それ自身一β単位として独立する。

§ 2・3

幾百 | 万 十 | 数 | 回

ただし、《再 両》は、数詞としての扱いをしない。

例： 再度 再拜 再三 | 再四 再三 | 回 両氏 両隣 衆参 | 両院  
賛否 | 両論 一刀 | 両断

44 数を表わす部分と、それ以外のものとの結合形は、その結合点をもってβ単位の切れ目とする。

例： 日本 | 一 ひと | 粒 | 種 三 | 者 | 凡退 第 | 五 | 列 第 | 六 | 惑  
B | 2 | 9 D | 5 | 1 ヘンリー | 八 | 世

45 一部に数字を含んでも、それが数量をば表わさず、全体で一つの決まった内容を表わすと認められるものは、41から44までの規定に従わない。

例： 福田 | 一門 清水 | 一家 一言 | 居士 裸 | 一貫 一国 | 一城の |  
主

一種 一角 一隅 一端 一瞬  
一切 一芥 一層 一挙 一番 一応 一段(と) 一連  
画一 統一 唯一 均一  
ひととき ひとつころ ふたたび  
二枚目 三枚目  
三界 三振 三位 | 一体 三寒 | 四温  
三拝 | 九拜 三三九度 三十六計 三度笠 三番叟

〔別表〕一β単位とする付属要素

以下に掲げるものは、普通に接頭語や接尾語とよばれるもののうち比較的自由に広い範囲の語につくと考えられるもの、および形式名詞・補助用言の類である。これらは独立して用いられることはないけれども、われわれの表現の単位として重要な役割をつとめるものである。従ってこれらを特に一β単位として取り出して、調査対象に加えることにした。なお、前述のように、助詞・助動詞は一往調査対象から除外したが、一般に助詞・助動詞とされるもののうち、形式名詞などと語性のよく似た種類のものについても、特に一βとして数えることにした。

1 接頭的要素

お おん おみ み ご

ただし、次のようなものは例外として、それぞれ全体で一β単位とする。

おかげ おとぎ | 話 お払い | 箱 おしゃれ おひたし おもちゃ  
おだぶつ、 御殿 御覧 御神火、 み子 み<sup>ゆき</sup>幸 み興 みくじ  
ミス ミスター サー

第 No.

あい [～ナル] まかり [～アリ]

2 接尾的要素

§ 2・3

(準体) の<sup>註</sup>

(敬称) さま(さん はん ちゃん) どの(どん) 君<sup>くん</sup> うえ[ハハ〜]  
 ぎみ[チチ〜]

氏 師 子 嬢 丈 翁 伯 博<sup>は</sup>女

ただし《両氏 両嬢 同氏 同嬢》の類は例外として、それぞれ全体で一  
 β 単位とする。

(複数) たち かた(がた) ども ら 等 連

(助数) 1) 等 級 組 種 類 型 式 流

2) 件 条 箇条 項 目 款 綱 門 通り

3) 番 目 番|目 回|目 号 月|号 丁目 番地

4) 度 遍 回 次

5) 箇所 ところ

6) 箇 枚 ページ 面 冊 流 本 台 脚 軒 階  
 輪 ふり 腰 かさね 具

7) 国 箇国 村 箇村 人<sup>にん</sup> 口 ところ はしら 頭  
 羽 匹 尾

8) 里 町 間 メートル アール 坪 畳 抱え 囲り  
 升 合 リットル 斤 トン グラム

9) 度 時 分 秒 時間 分間 秒間

10) とせ 歳 年 箇年 つき 月 箇月 日 箇日 週  
 週間 旬 晩<sup>よ</sup>夜 代 世 学期 期|生 年|生

11) 円 銭 元 ドル リラ ルーブル

12) 段 折 角 滴 目<sup>め</sup> 層 山 かたまり

13) びん 杯 把 箱 折 叭 袋 俵 樽

14) 言 句 首 章 篇 題 筆 図 表

15) 社[三〜合同] 校[六〜選抜]

16) 倍 割 パーセント

部 区

(関係) 分[一人〜] 過ぎ[五分〜] 前[五分〜]

どち(どし どうし)

間 内 外 じゅう[ウチ〜] ちゅう[カンガエ〜]

面 辺

注 報告3『現代語の助詞・助動詞』における準体助詞《の》の①の用法(171~172ページ)のみ。従  
 って、同書で終助詞もしくは接続助詞としたもの、および準体助詞の②の用法《のだ のです ので  
 ある のか等》は除く。



§ 2・3

(状態) 的 風 様 状 体 級 型 式 流

そう よう みたい ふう だらけ がち、  
 ごとき・く、 らしい めかしい がましい くさい [ラシイの意]  
 ばい、 がたい づらい にくい やすい よい (いい)  
 できる 得る あたう かねる [ヨミ〜] すぎる [アソビ〜]

(変化) めく じみる

だす<sup>注1)</sup> かける はじめる きる ぬく、 とおす つづける  
 おわる おおせる つくす はたす そこなり 損じる  
 つける [習慣の意], あう  
 かけ しな はじめ きり とおし じまい おさめ つけ  
 ついで、 あい  
 てある てない、 ている (てる) ておる (とる) ていっちゃうる  
 (てらっちゃうる) てやがる てしまう (ちまう ちゃう じゃう)  
 ていく (てく), てまいる てくる

(行為) めかす ぶる がる

する<sup>注2)</sup>  
 いたす なさる たまう  
 ておく (とく) てあるく てみる  
 てやる (たる) てあげる (たげる) てさしあげる  
 てくれる てくださる てもらう ていただく

(その他) という (ちふ てふ)

ずつ あて ごと ぐるみ ずく  
 きり だけ (たけ) ばかり のみ  
 まで くらい (ぐらい) ほど (程度の意。従って《後ほど 先ほど》  
 は別) ばかり など (なぞ なんぞ なんか) なんて等  
 かたがた がてら ながら [女〜 昔〜の意] だてら  
 くせに ことごと ところ ところが ところて  
 どころか ものて ものなら もの ものを [以上, 接続助詞]  
 こと もの ものを [以上, 終助詞]

注1 1) 「だす」以下は、例えば《やりだす やりかける やりはじめる》のように、動詞《やる》の後に続く場合の意味を考えればよい。

2) 上のそれぞれの語と自動他動の関係にあるものも、同じく一βとする。

例： かかる はじまる きれる おえる そこねる等

3) 上の語の名詞形も同じく一βとする。

注2 ただし一字の漢語に《する》のついたもので、係助詞の介入しえないものは、その全体を一βとする。

例： 欲する 証する 信ずる

## § 2・4

〔付〕 1) 次のようなものは一語源単位と認めず、結合した形をβ単位とする。

れる られる せる させる  
さ み け げ  
り〔フタ～〕 たり〔ヨッ～〕<sup>注</sup> か〔ヨッ～〕 つ〔ヒト～〕  
ひっ〔～カキマワス〕 とっ〔～ピョウシ〕  
く〔ネガワ～ハ〕

2) 陳述の意を表わす、動詞《ある》の類および形容詞《ない》は、助動詞と同じ取扱いにして、β単位の中には含めない。

例： ～である ～でもありません ～でございます ～にて候ふ ～に侍り  
～でない (～く)ない ～となく ～とはなしに

これらは、いずれも～または( )の部分だけをβ単位としてとりあげ、以下は除外する。

ただし、次のように用いられる《ある》《ない》は、上のような扱いをしない。

どこを|探しても|ありません  
～の問題は|どう|あるべきか  
いつ|までも|美しく|あり|たい  
二つに|一つしか|ない  
とんでも|ない よんどころ|ない

β単位の規定は以上の通りである。なお、以上の原則に従うと著しく不自然・不合理の感を免れない場合は、個別的に考えて、例外を設ける。(この例外は、すべて、カードに記録を取っておく。)最後に、この規定に従って実際の文章を切った例を示しておく。次の文章で、

| | で囲み、かつ、下線を施したものが、β単位の語として採集された。

| 藤原|あき|は、|まるで、|一|場|の|恋| (長い|一|場|ではあったが)  
の|ため|に|だけ、|こ|の|世|に|生|を|享|け|た|よう|な|女|である。  
|彼女|の|恋|は、|一|艘|の|出船|に|は|じ|ま|り、|そ|して、|一|艘|の|  
|入船|に|よ|っ|て|幕|を|閉|じ|た。|昭|和|三|年|八|月|十|八|日|  
正午、|門|司|港|を|船|出|し|た|欧州|航路|鹿島|丸|の|後|を|一|艘  
|の|快速|船|で|港外|まで|追っ|て、|

### 2・4 集計単位の定め方

調査単位が確定すれば、次は、どの単位語とどの単位語とが同じ語かを定める段取りとなる。なぜなら word count の性質上「同じ語」を集めその使用率を測ることが求められるからで

注 ただし《イチ|ニ》《ヨ|ニ》と読むべき場合は、(助数)の7に従う。

## § 2・4

ある。すなわち論理的には、ある単位語  $x$  を他の単位語  $a$  と比べて、もし同じ語と認めればこれらに共通の見出し語  $A$  を立てる；もし別の語と認めれば更に第三の単位語  $b$  と比べ、 $x$  と  $b$  とに共通の見出し語  $B$  を立てるか、そうせず第四の単位語  $c$  との比較に移るかする；この操作を繰り返して  $x$  がどの単位語かと共通の見出し語をもてばそれでよし、どの単位語とも見出し語を共有しなければ他のどの見出し語とも異なる  $X$  を立てる；この操作を尽した時に単位語の整理が終るという事になる。この事からして語彙調査での集計単位は、上に見出し語と呼んだもの選ばれる。

さて見出し語は、同じ語の範囲にある単位語から抽象したものと言える。従って、もしその範囲の一つの単位語だけからでもそれが属する見出し語を定める仕方があるとすれば、個々の単位語についてそれぞれ見出し語を立て、同じ見出し語をもつものをまとめて行くという操作は、上記の操作と等価である。実際の整理作業は大部分がこの方法で行われる。ただしある単位語を一つ取り上げただけではその見出し語が決めにくい場合もあるから、その時は上記の根本的な操作に帰らなくてはならない。

なお根本的な操作と等価な後者の方法は、権威ある辞書に従って完全に行えると言われるかも知れないが、そうではない。たとい理想的な辞書が既にあるとしても、(1) その見出しとして、語彙調査の調査時に使われているすべての語をあらかじめ立てているとは期待出来ず、(2) 集計単位の観点から見て、辞書の見出しが等質的かつ排反的であるとも期待出来ないからである。

ゆえに、この調査での集計単位の定め方は、次のような原則による。

- 1° ある単位語一つを取り上げて、その見出し語を立てる一般的な仕方を規定する。この際その単位語が活用する語の一活用形となっているか否かが明らかなら、活用の有無という情報を使ってさしつかえない。また資料となった表現でその単位語と関係する他の単位語との、形式上・意味上の相互関係の情報も、これが明らかな限り使ってさしつかえない。
- 2° 「同じ語」と認める範囲の規定が一般的規則の形か個々のケースの完全枚挙の形かで行えるものは、その範囲を規定することによって、一つの単位語だけから直ちに見出し形が立てられるようにする。
- 3° いわゆる同音異義語か同じ語の意味の差にとどまるかのように、2°の形で規定しにくいものは、個々の場合にこれを決する手続きを定め、その手続きを踏んで得た結果によって見出し語を立てる。
- 4° 掛けことば、漢字にルビをつけ「菊五郎」とした類の二重表記の場合の、扱いかたを決める。

さて以上の所では、「同じ語」の範囲を決めることを取り上げたが、「同じ語」という概念自身には触れないで来た。この点について一言する。最も明らかな場合としてわれわれは、意味も形式も同じ単位語どうしを同じ語と意識し、意味も形式も異なる単位語を互に異なる語と意

識する。ここで、形式よりも客観的に扱いにくい意味を持ち出したのは、本来 word count が意味の問題と強く結びついているからであり、意味の排除を代償としてかちえた客観性は調査目的に照らして必ずしも適応しないからである。特に基本語彙選定の資料になるという事を考えれば、この点は重大である。仮に形式だけから攻めて結果的には意味と高い相関を得ても、それが集計単位間の等質性をどの程度まで保ち得るか疑わしい。「ミギ総代何野何平」が「君のミギにある」と別の集計単位となるのでは、他の集計単位との対比上バランスを失い、word count としては困る。また「イカない」と「いった」とを《イキ・》の活用形としてまとめることも、純粹に形式だけからは決め難い。語彙調査の結果がもともと意味を振り切っては役に立たないのだから、たとい主観による浮動性はあるても、操作にも意味を入れる方がよい。(ただその浮動性をなるべく制御する手は打つべきである。)そこで意味と形式とに目をつけるとして、二つの単位語がその一方では同じと認められても他方では差がある場合が問題である。この場合の態度を明らかにしないと、「同じ語」の概念も明らかににはならない。ところで普通に「同じ語」という時の「同じ」は「全く差がない」ではなく、「大差がない、すなわち、ある程度の差を捨象してもよい」ということである。従ってその捨象してもよいという程度を明らかにする(操作的には同じ語と認める範囲を決める)手続きを示すことによって、「同じ語」の概念は決まる。(これは循環論法ではない。)だからわれわれは整理作業での手続きを通してこれを明らかにする方法を選んだ。ただしその操作自体、何らかの方針に立っている。その方針は、調査結果を利用する時の便利さ、特に基本語彙選定の資料としてまず役に立つことに依存する。その点では小差に目を着けて余り細分するより、ある程度大まかに分けた方がよい。(使用率の安定性まで考慮すると、ますますそう言える。)もしもっと細かい差も必要なら、それは集計単位となった見出し語の内部の問題として、見出し語の意味用法などの分析を重ねて行えばよい。以上がわれわれの立場である。

次に、われわれの採った操作法を述べる。(それには、立てた見出し語の書き表わし方が関係して来るが、これは報告書前編 2～4 ページに既に述べたから参照せられたい。)

- 1 一般に、単位語が無活用ならそのまま、活用語なら代表形に直したものを、見出し語とする。

これは先の原則1°に対応する。なお副詞語末の「と」や「に」をどうするかは、単位語認定の問題であってこの問題ではない。

- 2 次にあげる種類の語形の違いをもつものは、一つの語源から発している限り同じ語の範囲にあるものと認める。

- i) 臨時の発音を示す促音・長音の類と普通の形との差。

例： 給仕ッ 人殺シィ トトとんでもない

- ii) 意味の区別に関係しない清濁の差。(連濁を含む。)

例： センダク／センタク (三)カシヨ／ガシヨ レンチュウ／レンジウ シンパン／シンパン ナンピト／ナンピト

§ 2・4

iii) 語またはその構成要素の末尾が短くなった形ともとの形との差。

例： ホント／ホントウ センセ／センセイ モ／モウ コオヒ／コオヒイ サヨ  
ナラ／サヨウナラ

iv) ワ, ユ, ヨの音が弱まった形ともとの形との差。

例： アタクシ／ワタクシ プルジョア／プルジョワ イキ・ク／ユキ・ク イイ／  
ヨイ サイナラ／サヨナラ

v) 他の音をはねる音に転じた形ともとの形との差。

例： アンタ／アナタ ソンなら／ソレなら ナンで、の、etc.／ナニ ナンピト、  
ナンピト／ナニピト ナンダ／ナミダ

ただし《サン／サマ》は例外とする。

vi) 他の音が詰まる音に転じた形ともとの形との差。

例： アッタカ／アタタカ カッテ／カツテ ～なコッタ／～なコトだ サッピキ  
／サンヒキ テッカク／テキカク カッコたる／カクコたる

《おトッフあん／おトウさん》もこれに準ずる。

ただし《ワッソ／ワタン》は例外とする。

vii) 詰まる音の有無の差。

例： トテモ／トッテモ タダ／タッタ ニホン／ニッポン ケッシテ／ケシテ  
ミッツ／ミツ

viii) はねる音の有無の差。

例： アマリ／アンマリ ミナ／ミンナ ヒガシ／ヒンガシ マダ／マンダ

ix) 連声によって生じた形ともとの形との差。(連濁は先の ii。)

例： ゼンナク／ゼンアク バヤイ、バワイ／バアイ

x) サ行音とチ, チャ, チュ, チョ, ツァ等とが交替する時の, その差。

例： マッシロ／マッチロ ワッシ／ワッチ おカシ／おカチ  
キッサ／キッチャ チイサイ, な／チイチャい, な  
ツァン／サン

ただし《サン／チャン》《サマ／チャマ》は例外とする。

xi) 外来語・外国語のかな表記で, 原語が同じ場合の写し方の差。

3 別人, 別の場所などをさす固有名詞であっても語形とその表記形とが同じ場合は, 同じ語と認める。

同一人・同一場所をさす固有名詞の語形を表わす表記形だけが異なる場合は, 同じ語と認める。

4・1 他語との関係において次にあげる性質をもつものは, 一つの語源から発している限り, 同じ語の範囲にあると認める。

i) 共に動詞であって, 活用の型が違っていても連用形がそのまま中止法に立つ時の

§ 2・4

形が同じであり、かつ活用の型の違いが意味の識別の手掛りとならない単位語どうし。

例： タル／タリル ナギル／ナグ ホロブ／ホロビル

ii) 「～い」系と「～な」系の両様の語尾を取り得る単位語どうし。

例： アタタカイ／アタタカナ キイロイ／キイロナ

iii) 「～に／～なる」「～と／～たる」の形だけを普通には取る単位語どうし。

例： タンニ／タンナル オオイニ／オオイナル セイゼント／セイゼンタル

iv) しざま・方法を表わす《カタ》,《ヨウ》に接する動詞連用形とそうでない用法の動詞と。

例： タベかたが悪い／御飯をタベル

v) 下記の vi) に該当しない「動詞連用形」+「テ」の形の連用形と、他の活用形と。

4・2 次にあげるものは異なる語と認める。

vi) 「動詞連用形」+「テ」に由来し、またそれと密接な関係があるような形の単位語で、

(a) 接続詞の働きをする語と、そのもとになった動詞と。

例： シタガッテ, シタガイマシテ←→師にシタガッテ進む

(b) 副詞の働きをする下記のものと、そのもとになった動詞と。

アエテ イタッテ カエッテ カネテ カロウジテ キワメテ ケッシテ,  
ケンテ サダメテ, サダメシ スベテ ダンジテ ハジメテ ハタシテ マ  
シテ

(c) 助詞に似た働きをする下記のものと、そのもとになった動詞と。

オキ.ッ (於いて, 於きまして, 於ける) ツキ.ッ モチ.ッ

(d) 接尾語的に使われる《キッテ》と《切り.ル》と。

vii) いわゆる延言およびそれに類推して出来た形と、そのもとになった語と。(例は前者だけをあげる。)

例： オイラク オソラク オモワク スベカラク ウタゴウラクは コイネガワ  
クは ネガワクは モシクは

viii) 文語動詞「あり」「いふ」に由来する次のそれぞれと、そのもとになった動詞と。

アル(或) アルは, アルいは アラユル イワバ イワンヤ イワク イワ  
ユル イエども

5 文語形・方言形で、それに形の上で対応する口語共通語形と意味がつながるものは、その口語共通語形と同じ語の範囲にあると認める。

以上の2～5が先の原則2°を具体化したものである。もちろん上述の規定に加えて、そういう風にまとめられるべき個々の単位語から立てる見出し語の形を規定して置かなければならないが、今は煩をいって略した。以上の1～5でもなお決し難い場合の処置として、原則3°, 4°に対応する規定を設ける。3°については、今回の調査で初めて線型判別函数の利用を試みた。それは付録Ⅲに述べる。また4°についても付録Ⅰで述べる方が便利だから、そちら(96ペー

ジ)に譲る。

## 2・5 作業手順

作業は集落を単位に進められる。前回は採集を完了してから整理に移るという手順を踏んだが、これよりも流れ作業にした方が、作業過程の管理さえうまく行けば有利な事が分かったので今回はそう改めた。

一集落は四十種前後のリプリント=カードに複製してある。このカードの一枚ずつを使って調査単位の句切りその他採集作業に必要な指定、また語のよみ等整理作業を助ける指定を入れる。この「指定カード」を作る事から field-work が始まる。指定カードにのっって採集とその検査とが行われ、更に整理作業の時もこれが参照される。採集は所外のアルバイトに指定カードとリプリント=カード用紙とを渡して進めさせる。大体二十組ぐらいの採集を終えた時、採集済のカードを持って来させ、次の分を渡す。受け入れた採集カードは直ちに検査し、その結果を管理図に描いて作業の質を管理する。一つの集落について採集カードがそろえば、五十音順排列に移り整理を加える。その結果を、集計単位である見出し語ごとに一枚ずつの「整理票」に記入して行く。これが済めば記入結果を検査する。以上の各段階で、指定カードの一枚ごとに採集予定枚数・採集カード枚数・採集検査後枚数を、また一集落ごとにその集落までの整理で作られた整理票の数・その検査後枚数を記録し、食い違いが起った時はその原因を突きとめてどちらの枚数が正しいかを確かめる。これらの過程が幾つかずつの集落に対して同時に進められるのである。

集計は二回に分けて行う。第一回目は集落の半数について整理票検査を完了した時、第二回目は当然すべての範囲の整理票検査を完了した時に行う。各回とも集計着手前に、もう一度採集カードと整理票とを突き合わせ再検査する。これは採集検査後集計着手までの期間がやや長く、その間に採集カードの出し入れも行われ、また検査漏れも絶無とは言えないので、最終確認を行うためである。この検査でも概して少数の食い違いが出る。その食い違いの起った原因も種々の方法で突きとめて修正する。しかしごく少ない程度ながら、原因不明の食い違いは残る。この場合は現存枚数の方を正しい値と認めるのである(年報7の96ページ参照)。さてこの検査・修正が終わってから集計に移る。その手順は詳しくは付録Ⅱの5に述べるが、大筋は次の通りである。第一回集計は、三層を通じての標本度数が40以上の語につき精度計算をする。この結果一定水準に達していれば、各層についてもそれぞれ精度を算出する。それらの結果によって、後半の調査を全く打切るか、一部の層だけ続けるか、すべてにわたって後半まで調べるかを決定する。前半で標本度数が39以下の語は皆、後半部の調査を続ける。従って後半の整理作業は前半より複雑になる。これを誤りなく語に応じて処置するため、第一回集計と同時に各語に対し一枚ずつの「指令カード」を作った。このカードは整理票の内容の要約を含み、かつ精度に関する情報、後半での処置に関する指令、最終推定結果などが盛り込めるようにしてある。ある語の第一回精度計算が済み次第このカードに、後半の整理作業に必要な指令がしる

## § 2・5

されるから、直ちにその語の整理票にその指令を写す。こういう方法で後半部整理に混乱やむだや落ちが生じないようにした。

なお第二回目の集計結果も指令カードに転写する。指令カードは整理票より小型に作ったから、語彙表作成にはこれを使った。そうすると整理票があくから、整理票を使って分析用のデータを作り始めることが出来る。たとい整理票から指令カードへの転写とその検査とに労力をさくとしても、製表と分析用データとの作成が同時に進められる方が有利だと考えたからである。更に指令カードは語彙構造の量的分析のデータにも転用される。

最後に、調査単位の句切り方や集計単位のまとめ方で迷いやすく、しかもしばしば出て来ると予想されるものについては、その処置を個々の場合に即して指示した辞書体の指図書を作って使ったことを、言い添えて置く。



### 3 語彙構造の量的分析

#### 3・1 語彙量の推定

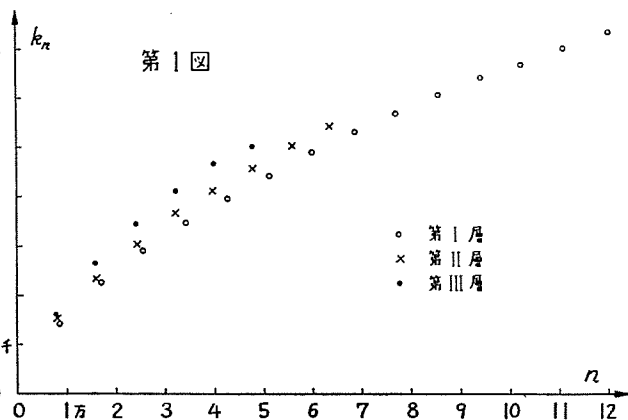
##### 3・11 問題

総合雑誌の一年間の本文には、異なる語がどれほど使っているか。その推定がここでの問題である。われわれは調査対象十三誌の全範囲から、その約四十分の一の分量に当る標本を抜いた。その結果 22926 個の異なる語が数えられた。しかしこれはこの標本に関する限りの値であるから、対象全体についての異なり語数すなわち語彙量については、それが 22926 語を下回らないという事しか言えない。一方、延べ語数の場合を考えると、標本値を基にして対象全体の延べ語数を推定する方法は、既に確立している。では異なり語数の方も、標本値を利用して推定する方法がないものか。延べ語数の場合ほど簡単にはいかないが、手掛りがない訳ではない。今までにもたとえば P. GUIRAUD, *Les Caractères statistiques du vocabulaire*, 1954, に同様な問題が扱ってある。ただしその推定法は全く経験的なものらしく、推定結果の信頼度が保証されない。われわれは彼とは別の方法を考え、それによって推定を行った。

以下、われわれの使ったアイデア、推定法、推定結果、その推定法の理論的根拠の順に述べる。

##### 3・12 推定法のアイデア

用語の使用状況を巨視的立場から見た時、そこに統計的な秩序のある事は、つとに内外の幾つかの研究によって予想されている。われわれの問題も、そういう統計的法則を仲立ちとして解いて行こう。次のような考え方を取る。調査対象からまずランダムに延べ  $n_1$  語の標本を抜き、それを調べた結果  $k_1$  個の異なる語が認められたとする。続いてランダムに延べ  $(n_2 - n_1)$  語の標本を抜き、これを前の標本に合わせた都合  $n_2$  語の標本に対して、再び異なり語数  $k_2$  を数える。同様の事を繰り返して  $(n_3, k_3)$ ,  $(n_4, k_4)$ , …… という観測値の組を記録して行くと、第 1 図に見る通り、異なり語数  $k$  のふえる勢いは延べ語数  $n$  がふえるに連れて次第に鈍る傾向が認めら



§ 3・1

れる。この勢い、すなわち異なり語数  $k$  の増加率が  $n$  と密接に関係すれば〔事実、後に示す通りそう認めてよいが〕、言い換えると  $k=f(n)$  であるような  $f(n)$  が見つかれば、これを使って調査対象全体での語彙量が推定出来る。この事は調査対象の延べ語数が無限大の場合にも言えるのであって、特に  $(n_i, k_i)$  をプロットしたグラフが第1図のように上方に凸なら、 $k_i$  が一定の値  $L$  を越えないという限界値  $L$  が必ず存在し、すなわち  $\lim_{n \rightarrow \infty} f(n)$  が必ず有限の値として定まる。この  $L$  は言語理論上次の意味をもつ：ある言語表現の全体は多種多様の語を含むが、しかしその異なり語数には〔延べ語数が有限の場合はもちろんの事、無限大の場合であっても〕一定の限界があり、その限界値が  $L$  である。〔もし函数  $f(n)$  が  $n \rightarrow \infty$  で無限大に発散すれば、語彙量もまた無限大である。しかし言語現象の事実問題としては、この事は起るまい。たとい起ったとしても、上述の方法でやはり  $L=\infty$  が推論出来るのである。〕

そこで問題はまず函数  $f(n)$  の形を発見する事に転ずる。われわれは第1図のようなグラフに立って、プロットした各観測点〔の近く〕を通るような曲線を経験的に捜した。その結果次の型の式がかなり良く近似する事を知った：

$$(1) \quad k = L(1 - e^{-a(n+b)}),$$

ここに  $L, a, b$  は調査対象の語彙的性質によって統計的に決まる定数、 $e$  は自然対数の底である。もちろん  $L$  は上述の限界値にほかならない。

さて先の式がわれわれのデータの有様を一往近似する事は、次のようにして知られる。今改めて、 $n$  を特定の値に取った時の異なり語数を〔 $n$  を添え字として〕 $k_n$  と書こう。また  $e^{-a}$  は定数であるから  $c$  と置こう。そうすれば式 (1) は書き換えられて

$$(2) \quad k_n = L(1 - c^{n+b})$$

となる。ここで  $h$  を任意の実数〔実際には整数〕とすれば、延べ語数が  $(n+h)$  の時の異なり語数  $k_{n+h} = L(1 - c^{(n+h)+b})$  は、代数的な変形によって

$$k_{n+h} = c^h k_n + L(1 - c^h)$$

となる。もし  $h$  を常に一定の値に固定すれば、 $c^h$  は定数  $C_1$  となり、従って  $L(1 - c^h)$  も定数  $C_2$  となる。この時上の式は

$$k_{n+h} = C_1 k_n + C_2$$

であり、この方程式は直線を表わす。ゆえに点  $(k_n, k_{n+h})$  を順々にプロットして行けば、その点は次のページの第2図の小さい図に示すようなある直線 PQ に載る。われわれのデータをこういう定差図に描いてみると、延べ語数の小さい辺を除いては、観測点が直線にかなり近く並んでいる。そこで直線 PQ をデータに当てはめる事を試みたとすれば、 $L$  の推定値はグラフからも次の方法で求められる：第2図で、原点 O を通り横軸と  $45^\circ$  をなす直線 OQ を引き、これと先の PQ との交点を Q とすれば、QH [ただし H は Q から横軸に下した垂線の足] または全く同じ事ながら OH の座標が、 $L$  の推定値を与える。

ただしここに、なお考えるべき重大な事柄がある。それは、たとい式 (1) が観測データを良く表示していても、ただその限りでは実験式に過ぎないという事である。従ってもしその函数

型がなぜ得られるかの理論づけが行えないとしたら、観測した延べ語数の範囲で成り立つからと言って、その実験式から外挿して  $n \rightarrow \infty$  の時の異なり語数、すなわち語彙量  $L$  を算定する事には、十分慎重でなければならない。<sup>(註)</sup> その事をなお考えよう。

もし仮に式 (1) が理論式だとすれば、当然  $n=0$  の時  $k=0$ 、 $n=1$  の時  $k=1$  でなくてはならない。そこで  $n=0$  を、式 (1) と論理上等価な式 (2) に代入すれば、次の式が成り立つ：

$$L(1-c^b)=0.$$

これが成り立つから  $c^b=1$  従って  $b=0$  となる。〔実際には式 (1) は近似式だから  $b \neq 0$ .〕

次に  $n=1$  を式 (2) に代入し、また  $b=0$  とすれば、

$$L(1-c)=1$$

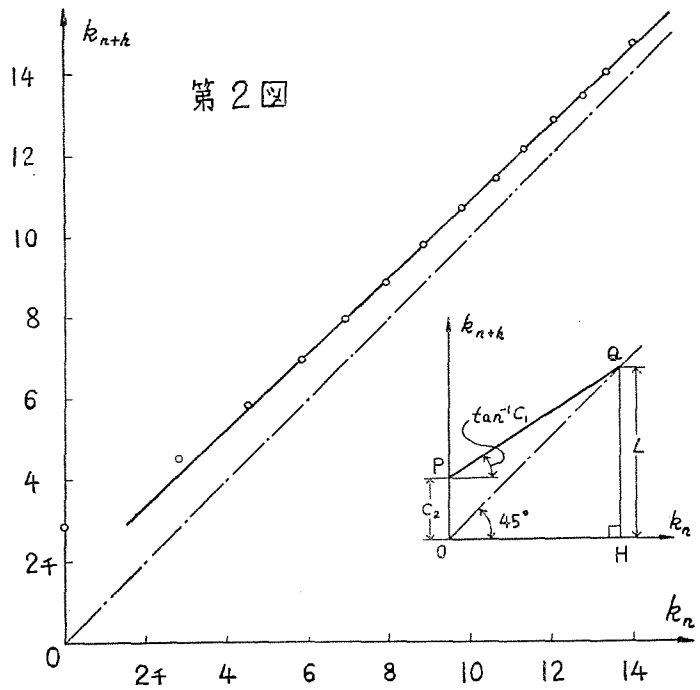
が得られる。この式からして  $c=1-1/L$  となる。以上の考察によって次の事が分った：

$L$  語の語彙量をもつ言語表現の集合で、もし各語の使用率が全く等しければ、すなわち  $1/L$  であれば、式 (2) の  $c$  の代りに  $1-1/L$  とし、また  $b$  を  $0$  とした式は、 $n$  と  $k$  との関係を示す理論式となる。この場合  $k$  は、 $n$  に対する一つの観測値ではなく、そういう観測値の期待値である。

一方実際には、各語の使用率はかなりまちまちである。だから式 (2) は、現実には近似式に過ぎない。にもかかわらず、延べ語数  $n$  が大きい所では観測された異なり語数  $k$  が式 (2) で相当良く近似出来るのは、なぜか。それは次の理由に基づくと思われる。 $n$  を大きな値に取れば、使用率の大きい語はあらかじめその延べ  $n$  語の標本中に現われると期待される。十分に大きな  $n$  を取ってもまだ標本に現われないような語は、その使用率が一般に小さいものである。その意味で、まだ現われない語の使用率に大差がない。つまりほぼ等しいと見なせよう。この理由で式 (2) が、大きな  $n$  に対する  $k$  の近似を与えるのであろう。

ところで先の定差図〔第2図〕を見ると、プロットした点の列は下方に凸な曲線を成すよう

注 国立語研究所年報6に中間報告をした際も、この事は考慮に入れたが、今見るとまだ考え方が甘かった。今回はもっときびしく追及する。



### § 3・1

にも思える。こゝでもし「 $n$ の大きい所では式(2)が良く当てはまるから」と簡単に考えて、適合が余り思わしくない $n$ の小さいあたりのデータを捨ててしまうとすれば、危険である。なぜかと言えば、どのくらいの大きさまでの $(n, h)$ を捨てるかによって、 $L$ の推定値がかなり動くと予想されるからである。そして $n$ がどの辺までのデータを無視するのが適当か、これをわれわれは見定める事が出来ないからである。——とすれば、データの一部を無視するような推定法ではなく、別の仕方を考えなくてはならない。

われわれは先に式(2)が、異なる $L$ 語の使用率が等しければ理論式となる事を見て来た。そこで次に、データ全体を一まとめのものとして扱わず、使用率が等しいような語の群に分け、各群ごとにそれぞれのデータを作る場合を考えてみる。この場合には、群ごとのデータに基づいて求めたそれぞれの群の語彙量の総和が、調査対象全体での語彙量となる事は明らかである。かつ各群での理論式は上述の所から既に知られている。従って $n$ の小さいあたりのデータも利用出来、また理論式による外挿を行うのだから安全でもある。ただ問題は、そういう「等しい使用率をもつ語の群」がどうしたら作れるかにある。この問題は実際には次の方針で解決されよう。観測した最大の延べ語数をもつ標本、つまり観測の最終回に得られた標本での標本使用率に目をつけ、これが等しいまたは大差ない語をまとめて群に組み分けするのである。——以上のアイデアに基づいて、次の節に述べる推定法を使った。

#### 3・13 推定法

延べ $N$ 語から成る言語表現のある集合が $L$ 個の異なる見出し語<sup>註</sup>を含み、その各見出し語の使用率が $P_1, P_2, \dots, P_L$ だとする。この $N$ 個の単位語<sup>註</sup>に等しい抽出確率を与えて母集団を構成する。ここから全くランダムに1語ずつの抽出を〔同じ単位語が反覆して抜かれる事をも許して〕 $n$ 回続ければ、こうして得られる延べ $n$ 語中に現われる異なる語の期待値 $K$ は、§3・15に証明する通り

$$\begin{aligned} K &= L - \sum_{i=1}^L (1 - P_i)^n \\ (3) \quad &= L - \sum_{i=1}^L e^{-A_i n} \quad \text{ただし } -A_i = \log_e(1 - P_i) \end{aligned}$$

である。もし $L$ 個の見出し語がすべて等しい使用率 $P=1/L$ をもてば、この式は更に簡単となり、

$$(4) \quad K = L\{1 - (1 - P)^n\} = L(1 - e^{-An}), \quad \text{ただし } -A = \log_e(1 - P).$$

さて式(3)の $\sum_i e^{-A_i n}$ の項はこれ以上簡単な形に書けないから、この式を使って $L$ を推定するには、普通 $P_1, P_2, \dots, P_L$ の値を知っている必要があり、それを知っているなら $L$ も既知のはずである。従ってこの式をそのままデータに当てはめて $L$ を推定する事は望めない。そこで次の方法をくふうした。

実際に観測した最大の延べ語数をもつ標本での各語の使用率に目をつけて、標本使用率が大

注 これらの用語については付録Iを見よ。

§ 3・1

差のないように、かつ定差図にプロットした点がほぼ直線を成すように、見出し語を  $M$  組に組み分けした。この各組の語彙量を  $L_i$  で表わせば、全体の語彙量  $L$  は当然

$$L = \sum_{i=1}^M L_i$$

である。次に  $L_i$  の推定は下記の方法によった。(i) 標本使用率が一番大きい組では、標本使用率が大きすぎるとその組に属する標本異なり語数はきわめて少なくなり、推定作業の能率がよくない。これをかなりの個数になるようにすると、今度は標本使用率が相当まちまちとなり大差がないとは言えなくなる。そういう組では幸いにも、延べ語数を  $n_1, n_2, n_3, \dots$  と増して行った時、新たな見出し語はもう観測の途中から出なくなった。従って使用率の大きな語はわれわれのデータでは出尽したものと見られる。〔実際に、この組に属すべき語がわれわれの標本に現われていない確率は、きわめて小さい。〕そこでこの組に関する限り、標本異なり語数をそのまま  $L_i$  と見なしてさしつかえあるまい。(ii) i 以外の組では、そこに属する語の使用率は〔抽出誤差も考慮すると〕大差がないものと認められる。従って前記の式(4)を当てはめる条件はほぼそろっているが、それでも使用率が全く等しくはないから、この食い違いに対する修正項として  $b_i$  を入れ、 $e$  の指数を  $-a_i(n_i + b_i)$  とする。すなわち次の式を当てはめる事にする。

$$(5) \quad K_i = L_i \{1 - e^{-a_i(n_i + b_i)}\}$$

〔推定を行った結果から判断すれば、この  $a_i$  の値はその区間の平均使用率から算出した値に近く、また  $a_i b_i$  も 0 に近かったので、上記のような組分けおよび修正項の入れ方は適当だったと思われる。〕さて、データにこの式を当てはめ最小二乗解を求めることによって、 $L_i$  が推定される。

ただ(ii)の場合に問題となるのは、各観測値に対する重みの評価である。まず異なり語数に対しては、抽出誤差の分散と語数勘定の誤差の分散に分けて考えなければならない。抽出誤差分散の一般的な形は § 3・15 に示すが、そのままの形では数値計算がしかねる。ただし今は各語の使用率がほぼ等しいように組み分けがしてあるから、その組を取り上げる限りでは一往その使用率が等しく  $P_i = 1/L_i$  と仮定する。この時の抽出誤差分散は〔簡便のため添え字  $i$  を落して書くと〕

$$\sigma^2(k) = L \left(1 - \frac{1}{L}\right)^n - L^2 \left(1 - \frac{1}{L}\right)^{2n} + L(L-1) \left(1 - \frac{2}{L}\right)^n$$

となる。<sup>註)</sup> この式で評価を行った。次に測定誤差の分散は、従来の経験から、異なり語数 1000 当り 4 (語<sup>2</sup>) 程度だという事が分っている。従ってこの二種の分散の和の逆数が、異なり語数観測値の重みに比例する。次に延べ語数に対しては、まず同様に測定誤差分散を考えなければならない。これも今までの経験から延べ 1000 語当り 2 (語<sup>2</sup>) 程度と見積れる。更にわれわれの場合、 $n$  に対してもう一つの誤差がはいった。それは、データの記録を取る時、使用率の組み分けは考えず全体をくくるめた標本延べ語数だけを出して置いたので、組み分けしたそれぞれ

注 この式は § 3・15 の式(6)で  $P_i = P_j = 1/L$  と置けば得られる。

§ 3・1

の組についての第  $h$  回目の観測で  $n_i^{(h)}$  が幾らになるか分っていない。[もちろんこの値は、最終標本値による組み分けが済んだ後でなければ、知るすべがない。] 採集カードから作った整理票をもう一度整理し直してこの値を確かめる労力の余裕が、今回は得られなかった。そこで  $n_i^{(h)}$  を次のように推定した。最終回観測での全標本の延べ語数を  $n_0$ 、その結果第  $i$  組にはいった見出し語の延べ語数を  $n_i$ 、また第  $h$  回観測での全標本の延べ語数を  $n^{(h)}$  とすれば、

$$n_i^{(h)} \sim n_i \times \frac{n^{(h)}}{n_0} = n_i p^{(h)},$$

$$\sigma^2(n_i^{(h)}) \doteq \left( \frac{\partial n_i^{(h)}}{\partial n_i} \right)^2 \sigma^2(n_i) + \left( \frac{\partial n_i^{(h)}}{\partial p^{(h)}} \right)^2 \sigma^2(p^{(h)})$$

$$= \left( \frac{n_i n^{(h)}}{n_0} \right)^2 \left( \frac{s^2}{n_i} + \frac{1}{n^{(h)}} - \frac{1}{n_0} \right), \quad \text{ただし } s^2 \text{ は } n_i \text{ の測定誤差。}$$

従って  $n_i^{(h)}$  の推定誤差は上の第二式で評価した。この誤差は最終観測に関する限りもちろん 0 である。さて延べ語数観測値に対する重みは、上記二種の分散の和の逆数に比例する。

こうして、各観測点の重みの比が算定され、推定法の具体的な手続きがすべて決まった。実際の推定に当て施した組み分けの数は、対象とした十三誌全体では 4 個、その三つの雑誌層については各 3 個となった。

最後に、DEMING 流の最小二乗法を施す場合、標本が十分大きいので  $L_i$  の推定量は正規分布に従うと見なせよう。その分散を  $V_i$  と置けば、 $L = \sum_{i=1}^k L_i$  の推定量の分散は  $\sum_{i=1}^k V_i$  と見積られる。ただし先に述べた (i) の組では  $L_i$  の推定量に誤差がないものとして扱った。[この組の推定誤差は他の組のそれに比べ桁違いに小さいから、これを無視しても  $V$  にはほとんど影響が及ばない。]

3・14 推定結果

上に述べて来た方法を使って、第 I 層、第 II 層、第 III 層および十三誌全部の範囲について語彙量を推定した。その結果は第 1 表の通りである。

この結果からはまた次のような事が導き出せる。

(i) われわれは調査対象の約四分の一の分量を抽出したが、この標本に現われなかった語が、大体下記の程度あったと推定される。

第 I 層で 12600~15100 語  
 第 II 層で 4400~7900 語  
 第 III 層で 6200~8700 語

第 1 表 語彙量の推定結果

推定範囲	$\hat{L}$	$\hat{L}$ の標準誤差	95% の信頼限界		標本異なり語数
			下限	上限	
第 I 層	28563	652.1	27284	29842	14713
第 II 層	16551	896.9	14793	18309	10437
第 III 層	18306	643.9	17044	19568	10889
全体	43669	1616	40502	46836	22926

全体で 17600~23900 語

今、これら標本に現われなかった語が、調査対象の語彙量の何パーセントほどに当るかを求めると、第 I 層では 48 パーセント、第 II 層では 37 パーセント、第 III 層では 41 パーセント、全体十三誌の範囲では 48 パーセントと推定される。ただしこれらの語はどれもこの調査対象では使用率が

一般にごく小さいものと言える。

(ii) 第1表の結果からすると、各層の語彙量の多少は  $I > III > II$  となっていて、延べ語数の多少の順と一致する。第1図で標本延べ語数が〔ほぼ〕等しい所の標本異なり語数を比べると、逆に  $II > III > I$  であった。単に標本値だけから対象全体の有様を推断することの危さが、この例では特によく分ろう。

さて語彙量の多少の順が延べ語数の多少の順と一致した事は、特別な事情がない限り当然だと言えよう。と言うのは、一般に多くの延べ語数を要したような表現では、異なる語も多く使われるはずだからである。この関係が破れるのは、語彙の豊かさに差が著しい場合である。ところでこの「語彙の豊かさ」とは、操作的に定義することがなかなかむずかしい概念である。語彙量  $L$  そのままでは豊かさの尺度とはならない。なぜかなら、 $L$  には  $N$  の影響があって、単純に  $L$  と  $N$  との比を取るような事では、 $L$  に及ぼす  $N$  の影響が消せないからである。〔比で  $N$  の影響が消せない事は、特殊な場合として  $N = \infty$  の時を考えれば明らかであろう。〕従って今は、語彙の絶対的な量が上記の順と推定された事だけを述べ、語彙の豊かさの問題には立ち入らない。注1)

このほか語彙の総量ではなく、層の間に共通な語彙の量——言わば語彙共通量の推定も、第1表に若干の推定結果を付け加えれば、原理的に可能である。ただしその推定法は精度の点でも手間の点でもまだ能率が悪いので、この調査では結果を報ずるまでには至らない。注2)

### 3・15 推定法の根拠

§ 3・13 に式(3)として掲げた理論式がどのようにして導かれるか、またその式から外挿して語彙量  $L$  を推定する根拠は何かを、以下に述べよう。まず初めに理論的考察の見通しをよくするため、導くことが出来た結果の大筋をしるしておく。調査対象を形作っている単位語につき基本的なランダム抽出を  $n$  回繰り返した時、その延べ  $k$  語の標本に認められる異なり語数  $k_n$  の期待値  $K_n$  は、前記の式(3)

$$K_n = E k_n = L - \sum_{i=1}^L (1 - P_i)^n$$

で表わされる。次に  $k_n$  の分散を  $V_n$  と書けば

$$(6) \quad V_n = E(k_n - K_n)^2 = \sum_{i=1}^L (1 - P_i)^n - \left\{ \sum_{i=1}^L (1 - P_i)^n \right\}^2 + \sum_{i=1}^L \sum_{j \neq i} (1 - P_i - P_j)^n$$

となる。更に  $K_n$  および  $V_n$  については次の事が成り立つ：

注1 しかしこの問題が解けない訳ではない。われわれも「語彙の豊かさ」に操作的に迫る一二のアイデアを考えているし、P. GUIRAUD や G.U. YULE にも試みがある。特に YULE の  $K$ -特性値は注目すべきものかと思うが、これに対しては G. HERDAN が Language as Choice and Chance, 1956, § 3・5~§ 3・6 で、それが豊かさの尺度とならずまた欠点のある事を述べ、別様の解釈をしている。われわれとしては、 $K$ -特性値には解釈のいかんにかかわらず数理的な疑いなお残るので、この「語彙の豊かさ」の問題は別の機会に改めて取り上げたい。

注2 水谷静夫：異なる分野に共通な語彙の量の推定法，計量国語学会第1回研究発表会，昭和32年10月；要旨『計量国語学』第3号所載。

§ 3・1

(7)  $n \rightarrow \infty$  のとき  $K_n \rightarrow L$

(8)  $n \rightarrow \infty$  のとき  $V_n \rightarrow 0$ .

そしてこれらの結果から

(9) 数列  $\{k_n\}$  は  $L$  に確率収束する。

この最後の結果 (9) が外挿法による推定の妥当さを保証するより所となる。さて以下に、これらの命題を証明しよう。

まず式 (3) について。ある言語表現がすべてで  $N$  個の単位語 [ $N$  は有限でも可付番無限でもよい] から成り、その任意の単位語は必ず  $L$  個の見出し語のどれかに属するものとする。その第  $i$  見出し語の使用率を  $P_i$  [ただし  $0 < P_i < 1$ ,  $\sum_{i=1}^L P_i = 1$ ] で表わす。従って各単位語に等しい抽出確率を与えて構成した大きさ  $N$  の母集団からランダムに一つの単位語を抜けば、その単位語が第  $i$  見出し語に属する確率は  $P_i$  に等しい。

こういう独立試行を  $n$  回続けたとし、各回の抽出に変量  $k'_i$  を対応させる。その時、もし第  $t$  回目に抜かれた単位語が、第  $(t-1)$  回までに抜かれたどの単位語とも異なる見出し語に属すれば  $k'_i = 1$  とし、どの単位語かと同じ見出し語に属すれば  $k'_i = 0$  とする。こうして得られる  $n$  個の数値  $k'_1, k'_2, \dots, k'_n$  の和を  $k_n$  で表わせば、この  $k_n$  は、上記の試行を続けて延べ  $n$  語に達した時の異なり語数にほかならない。なお  $k_n$  が取り得る値の範囲は  $1, 2, \dots, \min(n, L)$ , 特に  $k_1 = 1$  である。

上述の定め方からして  $k_n = \sum_{i=1}^n k'_i$  だから、 $k_n$  の期待値  $K_n$  は

$$K_n \equiv E k_n = E \sum_{i=1}^n k'_i = \sum_{i=1}^n E k'_i.$$

この  $k'_i$  は 0 か 1 かを取る変量である。それが 1 を取るという事は、それに先立つ  $(t-1)$  回の試行では得られなかった見出し語を第  $t$  回目に初めて得る事である。今その見出し語の使用率を  $P_i$  とすれば、第  $t$  回目の試行で初めて特定の第  $i$  見出し語を得る確率は  $(1-P_i)^{t-1} P_i$  である。そこで  $i$  を特定のものに限らず、一般に第  $t$  回目に新たな見出し語を得る確率を考えると、

$$\Pr(k'_i = 1) = \sum_{i=1}^L P_i (1-P_i)^{t-1}.$$

従って第  $t$  回目に、既出のどの見出し語かと同じものを得る確率は

$$\Pr(k'_i = 0) = 1 - \Pr(k'_i = 1).$$

ゆえに、 $E k'_i$  を  $K'_i$  と置いて

(10)  $K'_i = 0 \times \Pr(k'_i = 0) + 1 \times \Pr(k'_i = 1) = \sum_{i=1}^L P_i (1-P_i)^{t-1}.$

$$\begin{aligned} \therefore K_n &= \sum_{i=1}^n K'_i = \sum_{i=1}^L P_i (1-P_i)^{t-1} \\ &= \sum_{i=1}^L P_i \frac{1-(1-P_i)^n}{1-(1-P_i)} = \sum_{i=1}^L \{1-(1-P_i)^n\} \end{aligned}$$



$$= L - \sum_{i=1}^L (1 - P_i)^n. \quad (3)$$

前の節で理論式として示した  $K = L - \sum_{i=1}^L (1 - P_i)^n$  は、この式 (3) の  $K_n$  を  $K$  と書いたものにはかならない。註

以上で  $K_n$  を  $n$  の函数として表わす事が出来た。さて次に式 (6) として掲げた  $k_n$  の分散の問題に取り組もう。求める分散は

$$V_n \equiv E(k_n - K_n)^2 = E k_n^2 - K_n^2.$$

ここに

$$k_n^2 = \left( \sum_{i=1}^n k_i' \right)^2 = \sum_{i=1}^n k_i'^2 + \sum_{i=1}^n \sum_{s \neq i} k_i' k_s' = \sum_{i=1}^n k_i'^2 + 2 \sum_{t=1}^{n-1} \sum_{h=1}^{n-t} k_t' k_{t+h}'.$$

最後の辺への変形は下に掲げる図によって明らかであろう。

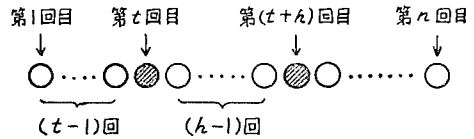
$$\therefore V_n = \sum_{i=1}^n E k_i'^2 + 2 \sum_{t=1}^{n-1} \sum_{h=1}^{n-t} E k_t' k_{t+h}' - K_n^2. \quad (7)$$

さて  $k_i'^2$  は  $k_i'=1$  の時 1,  $k_i'=0$  の時 0 だから,  $\Pr(k_i'^2=1)$  は  $\Pr(k_i'=1)$  に等しく,  $\sum_{i=1}^L P_i (1 - P_i)^{t-1}$ . 従って式 (7) の右辺第一項については

$$E k_i'^2 = 1 \times \Pr(k_i'^2=1) + 0 \times \Pr(k_i'^2=0) = \sum_{i=1}^L P_i (1 - P_i)^{t-1} = K_t'$$

$$\therefore \sum_{i=1}^n E k_i'^2 = \sum_{i=1}^n K_i' = K_n. \quad (1)$$

次にまず  $t$  と  $h$  との値を固定した上で  $E k_t' k_{t+h}'$  を求めよう。第  $t$  回目の試行で初めて第  $i$  見出し語が得られ、それから  $h$  回後の第  $(t+h)$  回目に初めて第  $j$  見出し語が得られたとする。この事は右の図を参照すれば分る通り、次の四つの事の複合事象である：最初の  $(t-1)$  回に  $i$  も  $j$  も得られない事、第  $t$  回目に  $i$  が得られる事、続く  $(h-1)$  回に  $j$  が得られない事、そして第  $(t+h)$  回目に  $j$  が得られる事。かつそれぞれの事象の起る確率も独立であるから、上記の複合事象の起る確率はそれらの積  $(1 - P_i - P_j)^{t-1} P_i (1 - P_i)^{h-1} P_j$  となる。そしてこのような場合以外には  $k_t' k_{t+h}' = 1$  となることがない。ゆえに



注 式 (3) の形だけなら、既に GUIRAUD が導いている。すなわち彼の *Les caractères statistiques du vocabulaire*, 1954, p. 25 に

En effet, si on pose  $p_r$  la probabilité d'un mot donné, sa probabilité d'apparaître dans un texte de longueur  $N$  est de:  $1 - (1 - p_r)^N$  et on a:

$$V = L - [(1 - p_1)^N + (1 - p_2)^N + (1 - p_3)^N + \dots + (1 - p_L)^N]$$

とある。彼はこの証明を述べていないが、前後の叙述から推すと恐らく次のように考えたのであろう。延べ  $N$  語中に特定の語が少なくとも一回現われる確率が  $1 - (1 - p_r)^N$  だから、 $N$  を固定して観測を繰り返せば、特定の見出し語がこの  $N$  語中に平均  $1 - (1 - p_r)^N$  回だけ現われる。従って延べ  $N$  語に認められる異なり語数 [の平均]  $V$  は  $\sum_{i=1}^L \{1 - (1 - p_i)^N\}$ . もしこう考えたのだとしたら、結果の式は正しくとも、導き方に疑問が残る。



§ 3・1

$$+ \frac{P_{L-1} + P_L}{P_{L-1} + P_L} = \frac{1}{2} L(L-1) \quad (\text{オ})$$

ここで式(オ)を代入した(イ), また式(イ), (ウ)を先の(ア)に代入して

$$V_n = K_n - K_n^2 + 2(L-1)K_n - L(L-1) + 2 \sum_{i=1}^L \sum_{j \neq i} \frac{P_j}{P_i + P_j} A_{ij}^n$$

を得るが, 更に初めの三項を式(3)によって変形すれば

$$V_n = \sum_{i=1}^L (1-P_i)^n - \left\{ \sum_{i=1}^L (1-P_i)^n \right\}^2 + 2 \sum_{i=1}^L \sum_{j \neq i} \frac{P_j}{P_i + P_j} A_{ij}^n.$$

ところでこの末項は, 式(オ)の展開にならって考えると共に  $A_{ij} = A_{ji}$  の関係がある事に注意して,

$$\text{末項} = 2 \sum_{i=1}^L \sum_{j=i+1}^L A_{ij}^n = \sum_{i=1}^L \sum_{j \neq i} A_{ij}^n.$$

従ってわれわれは  $k_n$  の分散として先の式(6)を得る:

$$(6) \quad V_n = \sum_{i=1}^L (1-P_i)^n - \left\{ \sum_{i=1}^L (1-P_i)^n \right\}^2 + \sum_{i=1}^L \sum_{j \neq i} (1-P_i - P_j)^n.$$

ついでながら, すべての見出し語が等しい使用率をもつ時には  $P_i = P_j = 1/L$  となり, 上式は次のように簡単化される:

$$(6') \quad V_n = L \left(1 - \frac{1}{L}\right)^n - L^2 \left(1 - \frac{1}{L}\right)^{2n} + L(L-1) \left(1 - \frac{2}{L}\right)^n.$$

次に命題(7)の  $\lim_{n \rightarrow \infty} K_n = L$  であるが, この証明はきわめて簡単である。式(3)

$$K_n = L - \sum_{i=1}^L (1-P_i)^n$$

の右辺第二項の  $(1-P_i)$  は 0 と 1 との間の値だから, それを  $n$  乗したものは  $n \rightarrow \infty$  と共に 0 に収束する。ゆえに

$$(7) \quad \lim_{n \rightarrow \infty} K_n = \lim_{n \rightarrow \infty} L - \sum_{i=1}^L \lim_{n \rightarrow \infty} (1-P_i)^n = L.$$

更に命題(8)の, 分散の数列が 0 に収束する事を証明しよう。この場合も命題(7)と同様の考え方をとればよい。すなわち  $V_n$  を表わす式(6)で, 右辺の三つの項はどれも,  $n \rightarrow \infty$  の時 0 に収束する。だからそれらの代数和である  $V_n$  もまた 0 に収束する。つまり  $\lim V_n = 0$  が証明された。

最後に命題(9), 数列  $\{k_n\}$  が  $L$  に確率収束する事を証明する。先の式(7)によって  $K_n \rightarrow L$  だから, あと, 任意のどんなに小さい  $\varepsilon (> 0)$  に対しても

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \Pr(|k_n - K_n| > \varepsilon) = 0 \quad (\text{カ})$$

を示せばよい。ところで確率の定義と TCHEBYCHEV の不等式とから

$$0 \leq \Pr(|k_n - K_n| > \varepsilon) \leq V_n / \varepsilon^2.$$

$$\therefore \lim_{n \rightarrow \infty} 0 \leq \lim_{n \rightarrow \infty} \Pr(|k_n - K_n| > \varepsilon) \leq \frac{1}{\varepsilon^2} \lim_{n \rightarrow \infty} V_n$$

この第一辺はもちろん 0, 第三辺も先の命題(8)によって 0 である。従つて式(カ)が成り立ち, 命題(9)が証明された。

### § 3・1

以上に証明して来た (3) と (6) ないし (9) との諸命題が、§ 3・13 に述べた推定法に根拠を与えるのである。

#### 3・16 上記の推定法の反省

われわれが採った推定法は前の節に示したところの理論的根拠に立っているが、実際の推定作業という操作はその理論模型にすみずみまで合致するようには運べない。そこになお問題は残る。それを明らかにして置くことは、理論の今後の発展のためにも必要であろう。

われわれの理論模型で前提としたところは、調査対象のすべての単位語に等しい抽出確率を与え、そこから重複をも許して大きさ  $n$  の標本を抜くという最も基本的なランダム抽出法であった。この抽出法は対象が大きい場合には手間がかかってほとんど実行出来ない。〔われわれの調査対象の大きさ  $N$  は約九百万語であった。〕そこで実際の標本抽出は、この報告書の付録Ⅱに述べた方式によっている。ここに理論上の前提と実際との食い違いがある。実際の抽出法に即した理論式を導くのが最上ではあるが、有限母集団での非重複集落抽出法に対する理論式を求める事はきわめて複雑で、現状では収拾がつかかねる。だから一往、われわれのデータは基本的抽出によって得たものと大差がない事を仮定して、推定を行った。この仮定も実用上は次の理由によって、著しく無理ではなかろう。第一に、われわれの場合  $N$  が十分大きく、 $n$  が  $N$  に比べ割合に小さいから、基本的抽出と非重複抽出とが結果的には近いものとなるであろうこと。第二に、集落抽出法を執りはしたが、その集落はページの半分に当る分量の本文をランダムに 20 個組み合わせさせて作ってあるから、集落間分散がかなり小さく、一続きの文脈による影響も見出し語の出方に著しく及んではいなかろうこと。第三に、基本的抽出を前提とした理論曲線がデータに相当良く当てはまったという経験的事実。——もちろんこうした事だけで意を安んじていてはならない。たとい現に行った推定の信頼度が高く十分実用に供せられはしても、なお科学としては上述のような仮定をせずに済む推定法の確立に進むべきである。

また推定に当ってはデータを、使用率が大差ないような語の組に分割して、まとめた。この組み分けは、境を色々に動かしてみても定差図上で直線的傾向がきれいに出るように、経験的に定めた。そういう経験的方法でさしつかえないか否かは、反省すべき事柄である。もしこれこれの条件の場合には幾つの組に分け、その境をどう定めるのが最適かを知る方法、またはそういうオプティマムな解は得られないというような事を、更に進んで確かめるのも今後の課題となる。

更にまた推定法のアイデア自体、ここに述べたのと別のものがあり得る。たとえば使用率の理論的分布函数が発見されれば、それを利用する推定法も考えられる。そのほかにもあろう。そうした何種かの方法およびそこから求められた推定値を対比して検討すれば、ますます得る所が多くなるであろう。

## 3・2 使用率の分布函数

## 3・21 分布函数を求める事の意義

ある語彙で各見出し語の使用率がどんな分布をしているかの問題を、次に取り上げる。すなわち使用率の分布函数を求めること、それが厳密には求められないにしても、どんな函数で近似されるかを調べることを試みる。それに先立って、あとの説明とのつながりのために、「分布函数」について大づかみな解説をして置こう。

まず「変量」の解説からはいる。ある一連の事象に対し、それぞれの事象を区別する目印しとなるような〔実数値の〕 $x_1, x_2, \dots, x_i, \dots$  があって、変数  $X$  がそのうちのある値  $x_i$  を取る確率  $\Pr(x_i)$  が与えられている時、こういう変数  $X$  を変量または確率変数という。〔この場合には、厳密には「離散変量」である。〕さて変数  $X$  がある定まった  $x$  以下の値を取る確率  $\Pr(X \leq x)$  を考えると、これは  $x$  の函数となるから  $F(x)$  と書ける。この  $F(x)$  を変数  $X$  の分布函数という。つまりその一連の事象の集まりから一つを取り出した時、その事象の目印しとした値が  $x$  以下である確率が、分布函数によって知られる訳である。ではこの事と語彙論とがどう結びつくか。それには下記のように二段に分けて考えるのが便利であろう。

第一段として、考察の対象である語彙すなわち見出し語の集合から一つの見出し語を取り出すことを考える。直観的には、それらの見出し語を等しいスペースに列記したリストの上に、高い所から針を落して、針が刺さった見出し語に着目すると考えてもよい。この時、上に述べた「事象」は「ある見出し語が取り出されること」に当る。また事象の「目印し」にはその見出し語の「使用率の値」を採用する。そうすれば「変量」は当然、そういう目印しの様々な値の一つとして実現する「使用率」というものである。ここで、一つ取り出した見出し語の使用率が特定の  $p$  以下の値である確率を知ろうとしたとする。これは上述のところから分る通り、分布函数を使って  $F(p)$  として求められるはずである。もしその函数が既知なら、その式に  $p$  の値を代入して計算することにより、求める確率は数値〔もちろん 0 と 1 とを両端としてその範囲にある値〕として示される。

そこで第二段として、上記の確率が語彙論上どんな性質のものかに目を向けよう。考察している語彙がすべてで  $L$  個の見出し語から成るとする。その  $L$  個中で使用率が最大の見出し語の使用率が  $p_{\max}$  だったとする。この時にはどの見出し語を取っても使用率は必ず  $p_{\max}$  以下だから、 $F(p_{\max})$  は 1 である。更に

$$p' \geq p_{\max} \text{ であるような } p' \text{ に対しては } F(p') = 1$$

と言える。次にこの語彙で最小の使用率が  $p_{\min}$  だったとする。この時には

$$p'' < p_{\min} \text{ であるような } p'' \text{ に対しては } F(p'') = 0$$

と言える。なぜなら、どの見出し語を取ってもその使用率が  $p_{\min}$  より小さい事は起らないからである。なお次の事には注意を要する：〔離散変量の場合〕 $F(p_{\min})$  は 0 ではない。現に使用率が  $p_{\min}$  であるような見出し語が何個かはあるからである。それならこの場合の分布函数

### § 3・2

の値はどうなるか。今ここでは、見出し語を一つ取り出すのに、どの見出し語も選ばれるチャンスが平等である事を前提に置いている。だから、 $L$  個の見出し語のうち使用率が  $p_{\min}$  であるものの数を  $k'$  個とすれば、一つだけ取り出した見出し語の使用率が  $p_{\min}$  である確率は〔古典確率論が教える通り〕  $k'/L$  である。また  $p_{\min}$  より小さい使用率の見出し語が現われる確率は〔上記の通り〕 0 であった。そこで  $F(p_{\min})=k'/L$  となる。この右辺は、すべてで  $L$  個の見出し語中、使用率が  $p_{\min}$  以下である見出し語の占める割合にほかならない。この事は何も  $p_{\min}$  の場合にだけ成り立つのではなく、一般に次のように言えるのである。

語彙が  $L$  個の見出し語から成る時、使用率が  $p$  以下であるような見出し語の数を  $k$  とすれば、 $F(p)=k/L$ 。

以上のような結びつけ方で、分布函数が語彙論上どんな働きをするかが分った。そこからは使用率が  $p$  以下の語が全体の何割を占めるかという、その割合を知ることが出来る。またその割合を 1 から引くことによって、使用率が  $p$  を越える語の占める割合も分る。ここでもし語彙量すなわち見出し語の総個数が既知なら、割合だけでなくその条件を満たす見出し語の個数も求められる。更に、分布函数を利用して計算を進めれば、使用率が任意に定めた  $p$  を越えるような  $(L-k)$  個の見出し語だけで、延べ語数全体の何割までがまかなわれるかを算出することも出来る。この最後の結果は、基本語彙を選定する際、何語ぐらいを選んだらよいかを考えるのに一往の目安を与えるという意味で、有力な資料となる。また翻訳機械の設計に当たっても同様に、記憶装置に貯えるべき語彙の量を決めるのに役立つであろう。このほか、いわゆる文体論研究で語彙の豊かさなどを論じようとする時、印象による主観的態度や特性の単なる勘定による方法から進んで、更に精密な論拠を用意することが、使用率の分布函数を利用すれば可能になる。このように、分布函数の追及は、理論的興味だけでなく様々の問題に応用されるはずのものと言ってよい。

#### 3・22 今までに示された諸函数式

使用率または使用度数の散らばり方に関する研究は、上記のようなフォーミュレーションは少なかつたにせよ、既に幾つかまとめられている。この問題はまだ十分に解明されたとは言えない。そうであるだけに、今までに示された説を顧みて置きたい。ここでは次の四種について簡単に紹介する：すなわち、CONDON-ZIPF の式、MANDELBROT の式、ZIPF の他の式、およびわれわれが以前に発表した式である。〔なお式の引用に当たっては、比較の便をはかって、必ずしも原典の記号法によらないことを断って置く。〕

(I) CONDON-ZIPF の式<sup>註1)</sup> ある見出し語の使用度数を  $f$ 、すべての見出し語を使用度数の多い方から並べた時のその見出し語の順位を  $r$  で表わせば、

$$fr=C$$

が近似的に成り立つという。ここに  $C$  は対象とする言語表現の集合により統計的に定まる定数であって、ZIPF によれば現代英語の場合 10 である。<sup>註2)</sup>〔この式は C. E. SHANNON や P. GUIRAUD の研究に利用された。〕

この式は直接には使用度数〔簡単な変換により使用率に変えられる〕の分布函数を与えてはいない。しかし使用順位  $r$  は分布函数と密接に関係する。そのおおよその筋道をたどってみよう。まず使用順位を使用度数の函数と考えて  $r=C/f$  が得られる。次に、この対象の延べ語数が  $N$ 、語彙量が  $L$ 、また  $r$  より順位が若い方へ直上の語の使用順位、使用度数をそれぞれ  $r'$ 、 $f'$  で表わし、更に  $p=f'/N$   $C_0=C/N$  と置けば

$$R(p) \equiv r' = C_0/p$$

となる。ゆえに分布函数  $F(p)$  は

$$F(p) = 1 - R(p)/L$$

または 1 [特に  $p$  が  $r=1$  の時]

という形に表わされる。

さて CONDON-ZIPF の式は、どんな対象についても成り立つものではない。この批判はつとに出ていた。〔日本語でも、われわれが調査した婦人雑誌や総合雑誌のデータには明らかに当てはまらない。〕そこで次に、同じく使用順位と使用率との関係に着目した MANDELBROT の式に移ろう。

(II) MANDELBROT の式<sup>3)</sup> MANDELBROT は、情報理論の考え方を導入し、いきなり語を取り上げず、その語を形作る音韻とか文字とかいう記号を基礎にして、下記のような函数式を示した。推論の過程は省いて結果だけをしるすと、 $A$ 、 $B$ 、 $c$  を定数として使用率  $p$  と順位  $r$  との間には

$$p = A/(r+B)^c$$

という関係が認められると言うのである。ただしここでは、次の二つの事を仮定している。

仮定1 語を形作る諸記号には、それぞれ一定の *coût* が対応していると見なし、その *coût* は記号の使用率に比例するものとする。

仮定2 諸記号は互にどの記号とも結びつき得るものとする。

この仮定を許せば、上記の式が理論的に導けるのである。(I) の式が全く経験的なものであるのに引き替え、この式には理論の裏づけという強みがある。ただし先の仮定2は特に、言語的事実と著しく反するので、まだ十分な理論とは言えない。だが一般に、CONDON-ZIPF の式より良い近似を与えていることも争われない。従ってわれわれも一往この式を総合雑誌のデータに当てはめてみたが、思わしい結果は得られなかった。

以上二種の式では使用率を使用順位と関係づけているが、これを異なり語数と関係づけた研究もある。それを見よう。

注1 (39ページ) E.V. CONDON: Statistics of Vocabulary, *Science* 67, 1928 に発表された由。なお cf. G.A. MILLER: Language and Communication, 1951, pp. 91—92.

注2 (39ページ) G.K. ZIPF: The Psycho-biology of Language, 1935, p. 45.

注3 B. MANDELBROT: Contribution à la théorie mathématique des jeux de communication, 1952 等。なお原典が入手出来なかったので、L. BRILLOUIN: Science and Information Theory, 1956, の紹介によった。

§ 3・2

(Ⅲ) ZIPF の式<sup>注1)</sup> 使用率が  $p$  である見出し語の数を調べ、それが  $k'$  個あったとする。  
この時

$$k'p^2=b$$

が近似的に成り立つというのが、ZIPF の主張である。もちろん  $b$  は定数である。さてこの式を書き換え

$$k'=b/p^2$$

とした上で、使用率の小さい方から  $p$  までの  $k'$  の値を足し合わせ、これを語彙量  $L$  で割れば分布函数が得られる。すなわち

$$F(p)=\sum(b/Lp^2)=(b/L)\sum p^{-2}.$$

ところで上の式をデータに当てはめると、彼自身が示した例においてさえ、系統的な片寄りが認められるので、なお問題が残る。ただ(Ⅳ)に掲げる式とはかなり似た曲線となる事を言って置こう。

(Ⅳ) われわれの式<sup>注2)</sup> 次に述べる式は、離散変数である使用率を連続変数と見なして、分布函数の近似式を得ようとしたものである。すなわち  $\alpha$  と  $\beta$  とを対象の量的構造によって統計的に決まる定数とする時、

$$F(p)=p/(\alpha p+\beta)$$

が近似的に成り立つとしたのである。もしこの関係が認められれば、使用率  $p$  の逆数と  $p$  以下の使用率の語の異なり語数の逆数との間には、<sup>せんがひ</sup>線型の関係がある事になる。ところでこの式を微分してみると

$$f(p)=\frac{d}{dp}F(p)=-\frac{\beta}{(\alpha p+\beta)^2}$$

となる。ここで、もし  $\alpha$  が 1 に近く、また  $\beta$  も 0 に近いきわめて小さな正の値であれば、これは(Ⅲ)の第二式と相当よく似た曲線を与える。

われわれの式にもまた色々問題はあり、その一部は国研報告4に述べて置いたが、前回の調査での曲線の当てはめ方には不十分な所があったので、ほかに適当な函数が見つからないまま今回も重ねてこの射影函数型の式による近似を試みようと思う。

### 3・23 射影函数型による近似

異なる  $L$  種の語を含む調査対象から延べ  $n$  語の標本を抜いて、そこに認められた標本異なり語数が  $\bar{k}$  だったとする。さて前節Ⅳの関係が成り立つとの仮定のもとに、母使用率が  $p$  以下であるような見出し語の数  $y$  を求めれば

$$(1) \quad y=LF(p)=\frac{Lp}{\alpha p+\beta}=\frac{Lx}{\alpha x+b}, \quad \text{ただし } x=np, \quad b=n\beta.$$

ところで  $y$  の推定値としては、標本使用率が  $p$  以下、また同じ事ながら標本使用度数が  $x$  以下

注1 ZIPF, *ibid.*, pp. 40—44.

注2 国立国語研究所報告4『婦人雑誌の用語』1953, pp. 256—261.



### § 3・2

の語の、標本での異なり語数  $k$  を採用するわけには行かない。なぜなら、概して  $\bar{k} < L$  であって、標本には一回も現われていない見出し語がなお  $(L - \bar{k})$  残っているからである。このように、語の使用率の分布函数を考える時は、普通の場合——たとえば体重の分布とか製品の仕上り寸法の分布とか、更にはまた音韻の使用率の分布とか——とは違った配慮を必要とする。語彙調査で抽出単位とするのは単位語であって、見出し語ではない；と言うより、見出し語を抽出単位とする事が不可能なのである。ところが分布の問題は、当然、見出し語を抽出単位とし使用率をその属性として扱わなければならない。ここに扱いの上での困難がある。<sup>註</sup> 体重や仕上り寸法の場合には、このような難題は初めから存しない。音韻の場合は事情を同じくしていても、異なり音韻数のごく限られているため、すべての音韻が現われるような大きさの標本を実際に抜く事が出来るので、やはりこの難題はよけて通れるのである。さて話を元にもどして上記の事を考えると、 $y$  の推定は

$$(2) \quad y \sim k + (L - \bar{k})$$

によらなければならない。ところでこの式の  $k$  およびその標本での最大値  $\bar{k}$  は標本によって観測されるが、 $L$  は一般には未知である。しかし、われわれの場合、既に § 3・1 で一往の推定値を得ている。従ってこの推定値を使って話を進めよう。

さて式 (1) に  $X=1/x$ ,  $Y=1/y$  という変換を施した上で、両辺の逆数を取れば

$$(3) \quad Y = \frac{1}{L}(\alpha + bX)$$

という線型式が得られる。われわれは  $L$  の近似値を得ているから、実際のデータを式 (3) の形にまとめ直して  $\alpha$ ,  $b$  の近似値も求められる。これら三個の値  $L_0$ ,  $a_0$ ,  $b_0$  を出発近似値として、データに式(1)の型の函数を当てはめ、DEMING 流の最小二乗法で調整すれば、求める〔近似的な〕分布函数が定まる。各観測点の重みづけは次のようにした。ある観測点での  $x$  の分散を  $\sigma_x^2$ ,  $y$  の分散を  $\sigma_y^2$  とすれば、前者は、使用度数に関する (a) 抽出誤差分散と (b) 測定誤差〔採集カード枚数勘定の誤差〕分散との和、後者は、 $y$  の算出に使った  $L_0$  が誤差をもつから (c) その分散と (d) 異なり語数測定誤差〔整理票枚数勘定の誤差〕分散との和であると考えられる。この (b), (d) は従来の作業経験から既知；(a) は報告書前編の語彙表に載せた推定精度に関する情報から、 $x$  の函数として割合に簡単な形の函数が求められ、これで評価可能；(c) も § 3・1 の作業によって評価されている。従って各観測点ごとに  $\sigma_x^2$ ,  $\sigma_y^2$  の値から重みが定められる。

上記の方針に基づいて、われわれは第Ⅱ層に関する分布函数を求めてみた。第Ⅱ層を特に選んだ理由は、この層が一冊を除いて単一の雑誌の本文から成っており、例外の一冊も性質が残りの大多数に似ているという意味で、他の層よりは等質的で好都合だと思われたからである。

このデータ、すなわち後掲の第2表に\*印しをつけた行の左二列の値を使って、最小二乗解

注 HERDAN もこの vocabulary-occurrence duality に 'Language As Choice And Chance' の § 3・4 A statistical paradox and its explanations その他の箇所て注意を喚起しているが、われわれのこの問題に直接役立つような事は述べていない。

§ 3・2

を求めた結果得られた、パラメタの推定値とその標準誤差とは次の通りとなった。

$$L=17621 \pm 267; \quad \alpha=.9980034 \pm .0009551;$$

$$b=.4025217 \pm .0000018, \quad \beta=(8.507454 \pm .000038) \times 10^{-6}.$$

従って使用率の分布函数は

$$(4) \quad F(p) = p / (.9980034p + 8.507454 \times 10^{-6})$$

で近似される。この式から〔調査対象全体での〕使用率  $p$  以下の異なり語数を求めるには、式(1)によって式(4)を  $17621 (=L)$  倍すればよい。またわれわれの標本において、使用度数が  $x$  以下である語の異なり語数として期待される値は、上記の推定値と標本での全異なり語数 10437 と式(1)、(2)とから、

$$k = 17621x / (.9980034x + .4025217) - 7184$$

で近似出来る。

以上のような計算曲線から求められる値を観測値から出した値と比べたものが、下記の第2表である。表の第5、第7欄は、普通は 観測値—理論値 の形で示すところであるが、当てはめた函数の型が近似的なものにとどまるので、あえて逆の形にしてある。なお先の式で求めた  $L=17621$  という値は、31 ページの第1表に示した 95 パセントの信頼区間 14793~18309 中に収まっている。

第2表 分布函数の値

(1)標本使用度数	(2)標本異なり語数	(3)計算分布函数	(4)経験分布函数	(5) (3)-(4)	(6)計算異なり語数	(7) (6)-(2)
	回 語			$10^{-3}$	語	語
1540*	10437*	(1.001738)	1.000000	(1.738)	10467.6	30.6
642*	10434*	(1.001371)	.999830	(1.541)	10461.2	27.2
203*	10419*	(1.000014)	.998987	(1.036)	10437.2	18.2
152	10411	.999349	.998524	.825	10425.5	14.5
105*	10397*	.998166	.997730	.436	10404.4	7.7
85	10385	.997269	.997049	.220	10388.9	3.9
70*	10368*	.996260	.996084	.176	10371.3	3.1
60	10354	.995310	.995290	.020	10354.4	.4
50*	10335*	.993983	.994211	-.228	10331.0	-4.0
40*	10299*	.991998	.992168	-.170	10296.0	-3.0
35	10274	.990585	.990750	-.165	10211.1	-2.9
30*	10248*	.998708	.989274	-.566	10238.0	-10.0
25	10210	.986092	.987118	-1.026	10191.9	-18.1
20*	10152*	.982193	.983826	-1.633	10123.2	-28.8
15*	10029*	.975764	.976846	-1.082	10009.9	-19.1
13	9963	.971849	.973100	-1.251	9940.9	-22.1
11*	9870*	.966561	.967822	-1.261	9847.8	-22.2
10	9806	.963154	.964190	-1.036	9787.7	-18.3
9	9729	.959023	.959821	-.798	9714.9	-14.1
8*	9634*	.953908	.954429	-.251	9624.8	-9.2
7	9509	.947412	.947336	.076	9510.4	1.4
6	9332	.938887	.937291	1.596	9360.1	28.1

§ 3・2

5*	9105*	.927207	.924408	2.799	9154.3	49.3
4	8803	.910221	.907270	2.951	8855.0	52.0
3*	8321*	.883254	.879916	3.338	8379.8	58.8
2*	7477*	.833845	.832019	1.826	7509.2	32.2
1*	5709*	.714018	.731684	-17.666	5397.7	-311.3

3・24 結果の検討と問題点の反省

先の表の結果は、計算曲線と経験曲線とがよく合っているとも見られるが、表の右端の列の値から分るように、差の符号の出方に片寄りが認められ、まだ良い近似とは言われない。しかし今の所 § 3・22 にあげた他の函数型よりは近似度が良さそうである。と言ってわれわれは、もちろんこの射影函数型で満足しているわけではない。

仮に射影函数型を当てはめる事だけを考へても、データは先の表の各行よりももっと細かく得られている。そこから表に\*をつけて掲げた  $x$  の値 16 個だけを選んで計算したのであるが、この選び方自体をどうしたら最も能率のよい推定が出来るかが問題である。また先に述べて置いた重みづけの方法とか、累加度数分布に対して曲線を当てはめる事とかの可否にも、なお問題は残る。事実われわれの求めた曲線は分布函数に関してこそかなりの近似を与えたが、ある使用率〔前後のかなり狭い区間〕に対する異なり語数については、余りよい近似を与えていない。

§ 3・21 に述べたような用途に役立つものとしては、更に別の型の函数を見つける努力が必要である。射影函数型をひとまず採ったのは、式 (3) が実際のデータに相当よく当てはまるという、全く経験的な理由であった。われわれは更に進んで〔課題の性質は別ながら § 3・1 で行ったように〕理論式を求め方向に行かなくてはならない。CONDON-ZIPF 以降の三種の式も、一往はこの歩みをたどった。(I) は物理学でのモーメントをモデルに取り、(II) は ZIPF 自身の the least effort の法則を仮定し、(III) はまた情報理論上の best coding の考へを入れている。これらのアイデアに共通な点は、現実の言語を mass として見ればそこにある種のつり合いが存するという optimism であろう。つり合いが存するなら、理論的考察もかなり楽になる。しかし現実の言語にそういうつり合いが期待出来るだろうか。現に (I) ~ (III) の式の適合度がそれほどよくない事を考えるべきである。不つり合いという事を入れて来ると、経済学〔国民所得分布論〕で言う LORENZ 曲線が語の使用率の分布と似ている面もある。しかし LORENZ 曲線およびこれと関係づけられる PARETO や GINI の法則にしても、実験式の域を出ずなお問題のあるものだから、安易な態度でこれらをモデルに取ることは出来ない。また理論的分布函数式について一往のめどが立ったとして、標本からこれを推定するには、HERDAN が word count について言っている duality の問題、すなわち項数がきわめて多い〔万の order にもものぼる〕多項分布型における標本分布の問題を解決しなければ、方法論上十分に精密だとは言われまい。

不つり合いを前提とした理論式の探求、duality がある場合の標本分布論、これらはどちらも非常に難問であり、短時日に解決はつかなかろう。その間の一往の目安として、今回も射影函数型による近似を試みた次第である。

## 4 意味から見た語彙の構造

われわれはこの報告書の前編（国立国語研究所報告12）に、五十音順及び使用率順の語彙表を掲げたが、これら総合雑誌の語彙調査で得られた語の総体は、意味の上から見て、どのような種類のものから成っているのであるか。これについて、全体の見渡しができるように作った一覧表が、51ページ以下に掲げる分類語彙表である。ここに少しく分類語彙表について説明しておきたい。

ここに分類語彙表というのは、一般に一つの言語体系の中で、単語がそれぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る限りの意味を分類して、その各項にそれぞれの単語を配当したものである。

かような一覧表は、いわゆる同義語・類義語が同一のまたは近隣の項の中に収められるものであって、いわば類義語集をなすのであるが、普通の辞典のように、語の音形また表記形を手がかりとして排列したものでないことが一つの特色である。従って、実用的に表現辞典、詞藻辞典としては検索に不便であることはやむを得ないが、それは索引の工夫によって補われるであろう。しかしそれよりも、かような一覧表には次のような役目がある。その一つは、生活のまたは意味上の各分野から、適切な単語を選んで基本語彙を設定しようとする事業のために、偏りのない全体の見渡しを与えようとする。（基本語彙の設定は、ひいて基本文字の問題にも関連する。）そのためには、分類の各項におけるそれぞれの語の重みが、語感からも能率からも比較商量される必要があるとともに、分類各項相互が、生活の中でどのような地位を占めるかが考えられるように、分類がなされていなければならないが、とにかく各分野を余すところなく見渡すことによって、生活に基本的に重要な語を選び出すことができるであろう。また、基本語彙といわないでも、日常の用語における表現の過不足も、かような一覧表のわく組によって明らかにされるであろう。また、類義語の間のつりあいも、広い範囲、狭い範囲のいろいろの段階で見ることができるであろう。このことは、ひいて或る言語主体（個人にしても社会にしても）の語彙の構造を明らかにすることになり、もし分類が十分妥当であるならば、異なる言語主体の間の語彙比較の物さしとなるであろう。これは、作品の文体論に関連し、さらに、言語の問題をこえて、それぞれの社会の精神構造を追求するための基礎に役立つであろう。

51ページ以下に掲げる分類語彙表は、上のような実効を持つ分類語彙表への一つの試みというべきものである。

この分類語彙表は、報告書前編の五十音順語彙表に掲げた各語を、意味の分類の各項目に配分したものである。その「意味の分類」は、国立国語研究所報告4『婦人雑誌の用語』（1953）の§5・1分類語彙表に試みたものを修正したものである。大きな違いは、彼の写生詞と連体詞

#### § 4

と副詞の或るものとを、形容詞の群へ入れたこと、比較的大きな分類項目に彼の場合よりも細かい番号を与えたこと（前編の五十音順語彙表の「分類目」の数字はこの番号で、従って五十音順語彙表はこの分類語彙表の索引の役目をする）、名詞の群、動詞の群、形容詞の群等のそれぞれの内部では、互に連関するものを明らかにするために、それぞれほぼ同様の分類に整理し、番号をなるべく共通にしたこと（これは群の区別を撤廃することができないわけではないことを示す）、などである。

なお、大切なことは、婦人雑誌の分類語彙表の場合には $\alpha$ 単位の語を収め、このたびの分類語彙表には、この報告書 § 2・3 に説明するような $\beta$ 単位の語を収めたことである。従って、この総合雑誌の場合には、婦人雑誌の場合と同様《気をつける、筆をとる、ピンからキリまで》のようないわゆる慣用語が、表の中に現われないことのほかに、婦人雑誌の表にはある《お化粧法、看護婦、民主主義》のような合成語も、ここでは《お、化粧、法、看護、婦、民主、主義》のように分解されて、合成された全体の形としては現われない。これは、今のところ、純粋に意味上の単位を設けることが困難で、ことばの形式的な面を手がかりとする統計のための単位分割に従ったからであって、類義語集としては不十分であることを免れない。（重要な概念がこの表に見当たらないとすれば、それはこの調査の範囲では、その概念が重要なものとして現われなかったか、または $\beta$ 複合として表わされていたか、のどちらかである。但し、そのような $\beta$ 複合の合成語を掲げないというのは、この表においてのことであって、調査全体としては、組合せについての調査が、語構成の章のためには準備されている。）

(1.) (2.) (3.) (4.) の別は、おおむね文法上の品詞別によるものであるが<sup>補註1)</sup>、(1.) と (3.) の間では、特に名詞と形容動詞語幹との間に解釈の動揺が残っているかもしれない。

意味の上から見ると、ほぼ次のようになる。

名詞の群 (1.) には《何、何ごと、何もの、どれ、だれ、いつ、どこ、いくつ》等の概念を表わす語と、それらを問としてその答となるべき語とを収める。

動詞の群 (2.) には《ある》に関連するもののほか、《どうする、どうなる》等の答となるべき語を収める。

形容詞の群 (3.) (文法的には形容動詞の語幹、副詞の或るものを含む) には、《ない》に関するほか、《どう、どんな (に、だ)》等およびその答となるべき語を収める。

その他の群 (4.) には、(1.) の概念との間の、また叙述されるべき事柄と事柄との間の関係づけや、感動や、判断・期待・仮定など叙述態度についての予告や、呼びかけ応答や、待遇や、を表わす語を収める。

婦人雑誌の語彙分類をはじめの際には、まだ分類のわく組が出来ておらず、かつ類義語目録の先例として爾雅、節用集等の古い分類辞書の類か、土居光知博士の基礎日本語、ROGET の Thesaurus ぐらいしか知らなかったので、四千三百語の中で類義語を集めながらわくを組み立てていった。(もっともその前に、『日本語基本語彙』(国際文化振興会)の二千語について同様のことを試みてはいたが、このわく組は、また別にたとえれば、いわば精粗のつりあい

悪いにしても、海岸線と行政区画の線だけを表わした白地図のようなもので、このたびの総合雑誌の語彙の場合には、この白地図の上に、区画を修正しながら、前半の調査で得られた一万六千語を書きこんでいったことになる。そこでは、思考や行為に関するもののように、婦人雑誌の四千語の場合よりずっと細かく区画をしなければならなくなったものもあり、また衣食住に関するもののように、一区画の中の語の密度がずっと小さくなったというようなものもある。

分類項目の番号は、五十音順語彙表との対照上では、小数点以下2けたまでしか与えなかったが、実際分類はもう少し細かいものになっている。分類された各項の排列は、分類そのものとともにまだ非常に個人的な考えにもとづくものであって、多くの人を十分に納得させるまでには至らないであろうと思う。恐らく、かような分類表は、それを試みる個人によってそれぞれ異った形で現われるであろう<sup>補注2)</sup>。ここではしかし、かような一覧表の試みについての刺激になることを期待する。

小数点以下の大きな分類についていうならば、ここに分類の対象となるものは、人間の言語（ここでは日本語）によって切り取られた、大世界を構成する大小種々の部分的な完結体であって、それは、人間活動に関する部分と、そのわくに関する部分（.1）とに大別される。人間活動は、活動の主体であるもの（.2）と、その活動の様相（.3）と、その活動の相手として存在するものとの三つの観点で分けられる。そのうち、最後のものは、人間が直接に活動の結果として作り出した物また作り出すために利用する物（.4）と、そうでないもの、人間の主体的活動からは比較的自由に、外界として存在するもの（.5）とになる。ここまでの所で、次の5部門が立てられたわけである。

- .1 抽象的關係
- .2 人間活動の主体
- .3 人間活動—精神および行為
- .4 生産物—結果および用具
- .5 自然—自然物および自然現象

各部門の間の区別は、常識的に比較的明らかであると思われる。所屬が問題になる語は、多分に譬喩的用法を持つものであって、その際臨時的譬喩はもちろんのこと、その用法が慣用的であっても、一方に原義の用法が一般にあると認められる時は、つとめて原義によって分類位置を定めた。《爆発、冷却》などが心理的な意味に用いられても、自然の部門に収めたごとくである。

各部門の内容が、さらにどのように分類されているかは、実際に分類表に当たって見られることを望むが、それを原理的に述べることは至極困難である。その排列（番号づけ）は、各項は必ずしも一列には相接続してはいないから、土地に番号をつけるよりもはるかにむずかしいと思われる。しかも個々の語の持つ意味上の領域は、互に他を犯さないようなものでなく、広がりにおいて大小様々であるから、白地図の平面の上に書き入れていくには無理がある。ここでは、数個の分類項の意味を総合した意味や、それらの意味に共通した性質、共通した部分に関

する意味は、多くは、それらの分類項に先立たせて、一つの項を設けた。たとえば (1.56) は動物及び動物のからだに関する部分であるが、(.560) は (.561) の各種動物に対する総記の部分であり、(.5620) は (.5621~27) の身体各部に対する総記の部分である。番号によって項目を細分しないものにあっても、なるべくこの方針によって排列した。

この表で語を分類するに際しての「語の意味」というのは、それぞれの用例を通じて認められるところの意味であって、いわば個々の事物に対して常にあてはまるような概念である。個々の用例の前後文脈から汲みとられるその場の具体的意味は排除し、また自動・他動・受動・能動（このたびの調査には《れる、られる、せる、させる》を $\beta$ 単位の内部の要素として含めた）の別や、待遇その他の語感の差などは無視した。（従ってこれらの区別しか持たない語は、たとえば《私、僕、俺…1.200》や《変る、変える、変ずる…2.1500》や《そむく、そむかれる…2.1511》のように、それぞれの仲間を通じての中心的意味の分類区画の中に、同居することになる。）

語の用法は多岐で、その辞書的意味も一語についていくつも数えあげられるものがある。このたびの調査でも、まだ一語一語の意味の分析には十分及ぶ時間がなかったので、著しいものについては実例によってそれぞれの分類項の中に分置したが、多くの語はその中心となる意味についてそれぞれ一箇所に収めたのみである。（従って以下の表でも、或る一箇所に収めた語がその一箇所にしか掲げられていないからといって、第二の意味では用いられなかったものということ、厳密には出来ない。）

なおもう一つ述べておくべきことは、この意味の分類と語の排列では、個々の語それ自身のもつ意味が問題になっているのであって、その語が用いられる生活場面での他の語といかに交渉するかが度外視されていることである。語の中には、用いられる生活領域の固定したものもあるが、いろいろな生活領域で用いられるはずの語も多い。生活領域を分類して、それに語を分配する方法は、会話書のような日常の実用にとっては有効で便利な方法であるが、むしろわれわれは、いろいろな生活場面を通じて一つの意味がどのような語として現われるかに関心を持つ。そこで生活領域の分類よりも先に、語の意味を分類しようとし、さらに、我々がとすればおちいりやすい連想、用いられる生活場面の想起から連鎖的に他の種類に属する語を喚起することを、できるだけ避けようとした。たとえば、《ビール》については、《酒・スタウト・ウイスキー・飲む・酔う・一杯・あわ・ジョッキ・コップ・ほろにが・ホップ・赤ら顔》等々が連想の網の中に捉えられるであろうが、この複雑な目を持つ網はこの一語のためには大切なものであっても、《飲む》や《コップ》にとっては同様に有効なものとはいえない。ここでは、右の各語の中から、《ビール》と同類項をなすものとして《酒・スタウト・ウイスキー》のみを選び出すことにしようとしたのであって、いわば生産物に関しては、その中心意味の重点を用途に求めたものともいえるであろう。

以下の表は、本来、この総合雑誌の語彙調査の前半に得られた延べ十二万語に対する、異なり一万六千語について作ったものであるが、今ここに掲げるに際しては、報告書の前編の五十

音順語彙表（11～95ページ）に収めた四千二百語を特に採り上げて示すこととし、それ以外に調査の前半後半を通じていずれかに現われた語のおもなものを選んで、付載することとした。それによって、分類のわく（白地図における境界線）が明了さを加え、かつ、総合雑誌における多度数語の性質が見やすくなるであろうと思われたからである。

表の体裁について述べると、

行頭の数字は前編の五十音順語彙表の分類目に示した番号の、小数点以下2けたと、同一番号のうちを更に細分して番号を与えた場合の、第3、4けたである。細分の場合、第1、2けたは多くを省記した。

同番号の項の中も、小グループごとに、行をかえて一括した。

」はその小グループの限りを示す。

』の前に掲げるものは、標本使用度数7（使用率0.030%）以上の語（五十音順語彙表に載せた語）。——は、そのグループに該当の語がないことを示す。

そのうち、頭に \* の印を加えたものは、標本度数30（使用率0.130%）以上の語。

』の後に掲げるものは、標本度数6以下の語（の一部）。

以上のうち、尾に 。 の印を添えたものは、『日本語基本語彙』（国際文化振興会、1944年）の二千語に含まれた語。

（の後に掲げるものは、この調査では得られなかったが、『日本語基本語彙』にある語補注3）。

この表に掲げた語の表記は、便宜に従ったものである。（表記及び用字についての分析は別に報告の機会を待つ。）

なお、この分類語彙表の後に、分類項目一覧を添えて、この分類が全体としてどのようなものであるかを、大体から示すことにした。その項目一覧に掲げる番号は、もとより分類語彙表の番号そのものであるが、その番号のもとに掲げる語は、ただその分類されたグループが、どのような意味分野に属するものかを示すための見出しで、必ずしもこの調査で得られた語ではなく、従って分類語彙表に掲げられた語とは限らない。うまく選ばれているとすれば、各グループの総記の部分に位置を占めるはずのものである。

補注1(46ページ) 品詞別を最初の分類基準とすることは、概念を分類する上では賛成を得られないかも知れない。前述のように、各群で排列番号を平行させたことは、品詞別を撤廃する可能性を或る程度示すことになると思う。しかし、実際の分類の手續上、 $\beta$ 単位の語を手がかりに考えている間、動詞の陳述の機能や、形容詞の修飾の機能を取り去って名詞との間に比較定置することは、《動く—動き》《美しい—美》などのような限られた語の場合を除いては、はなはだ困難であった。（《よさ》等は形容詞群に入れることにしておいた。）

補注2(47ページ) 類義語目録の先例として、『婦人雑誌の用語』264ページに掲げた、ROGETやBALLYのもののほか今は次のような例を知ることができた。

Franz DORSEIFF: Der Deutsche Wortschatz nach Sachgruppen, Berlin, 1954.

Rudolf HALIG, Walther von WARTBURG: Begriffssystem als Grundlage für die Lexikographie (Versuch eines Ordnungsschemas), Berlin, 1952.



## § 4

前者は 20 類、910 項 (約一万語のアルファベティカルな索引がある)、物の分類によるとあるが、事物の現われる生活領域での連想が色こく見られる。後者は、フランス語約六千五百を見出しとする概念の分類で、3 大類 (Hauptteil)、10 中類 (Abschnitt)、61 小類 (Unterabschnitt)、さらに類によって精粗さまざまに細分がなされている。その 3 大類とは、A L'UNIVERS, B L' HOMME, C L'HOMME ET L'UNIVERS で、その B には社会的な存在としての人間、人間の社会的また心理的活動のほか、生理的肉体的な存在としての人間に関するものをも含んでいる。各小グループの中には文法上の品詞の別を度外視して、たとえば《麦仕事》の項に《畑、境界、耕す、耕作人、鋤、種蒔く、くれうつ、地均し》等が収めてある。またたとえば L'UNIVERS の下位区分は、「人間が動植物に対して立つ関係を反映した排列」をとり、動物学植物学の分類には従っていない。そして、「事物のグループによって分類されたフランス語彙の抜粋ではない」ことを強調している。その方法と成果に対する批評はともかく、(WARTBURG 自身 DORNSEIFF について批評しているが) 語彙を体系的に把握するための基礎的な試みとして、我々の分類表とはその手順と結果を異にするが、同様の目的を持って我々に少し先立った業績として、注目すべきである。

なお、日本語について、

田中久直：学習基本語彙 指導の実際、東京、1956、  
には小学校の国語教科書 7 種における共通度の高い三千五百語についての分類が示されている。11 類、86 項、分類の主義は我々のと同様で、細かくはないが安らかなものである。

なお、ここで部分的に参考した分類例としては、1. 241 の項について、昭和 25 年の国勢調査に用いられた職業分類、1. 552 について『日本植物図鑑』、1. 561 については『日本動物図鑑』および『日本昆虫図鑑』がある。その他、『体系商品辞典』のようなものも参考したが、専門分野については、今後も専門知識によって修正されるべき点が多かろうと思われる。

補注 3 (49 ページ) 『日本語基本語彙』では、《おばあさん・運転手・八百屋・図書館・警察署・展覧会・寒暖計・蓄音器・自動車・自転車・飛行機》等、この調査での単位と異なるものがあるが、今はこれらを記入しなかった。

なお、われわれの調査は標本抽出調査であるが、この表で ( ) の印より後の語は、全数調査をしても、その使用率について、』の印より前の語の仲間に入ることは、ほとんどなかろうと考えてよい。しかし、』の印の後で、( ) の印の前と後とでは、その差を考えることはできない。

分類語彙表

1.1

- 100 \*これ。\*この 本 当』 這般』  
 \*それ。\*その』  
 \*あれ。\*あの かの』 こんな, そんな等→3.10  
 \*どれ。\*どの』 ここ, そこ等→.17  
 \*いずれ どちら。どっち』  
 かも』 あれこれ』  
 各々 個々』 某→.20  
 \*の。\*もの。\*方。前者 後者 分』  
 \*何。何事 何物 何等』 何々』  
 1 対象 \*事。事柄』 物事』  
 \*物』 物件』  
 万事』 一事 万端 諸般』  
 \*事件。出来事 大事 事故 沙汰』 大ごと 瑣事』  
 2 事項 項 件』 条項 項目 由 旨 儀 本件』  
 3 現象。事態』  
 \*真 \*実 \*事実。\*現実 \*真実 \*實際。』 史 実 情実』 →.13, 具体, まこと→.30  
 真理。』 形而上 諸行 有為』  
 \*秘密。』 機密 枢密 枢機』  
 4 本物 自体 主体 体』 正体 実体 実物 にせ 前身 個体 神体 機体』  
 \*代表。候補 \*代り。』代理 身代り 補助 副』  
 一』 主流 中堅 亜流』  
 資料』 史料 データ 標本』  
 一』 地 本位 本格』  
 一』 補欠 補充 補填』  
 \*他 \*ほか(他・外)。』 別個 別物 余儀 他人 ごと』 非→3.10
- 110 類 種 種類。』 範疇 たぐい』  
 一種 各種』 同類 多種』  
 形式。様式 \*式。流』 類型 タイプ』  
 象徴』 典型 模範。原型 モデル』  
 部門』 国別 性別 業種』  
 \*例。事例 ケース 例外』 実例 特例 類例』  
 \*階級。層 級 クラス』 階層 職階 冠位』  
 標準。基準(規準) \*水準 レベル 上等 上層 高等 高級』 中等 下。』  
 系 系統』 系列 血統』  
 1 \*関係。仲。』 問柄』  
 \*関連 縁』 関与 相関 かかわり』

- \*基礎。 \*基本 \*根本 根源(根元)』 根底 基幹 源泉 語源 本末』  
 \*条件。前提 要因 根拠 拠りどころ 理由。わけ \*原因。所以 故。もと。所為』 \*何故 起因 成因 死因 因縁 由縁』  
 \*目的。\*為。\*目標』 目あて 用途 実用 乗用 軍用』  
 \*結果。成果 \*効果 \*影響。』 帰結 甲斐 効験 応報 帰趨』 成績→.34  
 証拠。口実』 例証 反証 言質』  
 手段』  
 2 同一 一致 \*違い。相違』 異同 該当 同上 類似 合致 まざれ 人違い 同業 同権 同郷 同好』  
 3 \*相互 相对 合い』  
 連絡。結びつき つながり』 連結 連帯 連鎖 一』 交錯 並行(併行) 対置 呼応 照応』  
 \*逆 \*反対 矛盾。』 相剋 包含 融合 混合 相応 食いちがい ずれ』  
 対日 対外 対。』  
 從属 所属 兼』 付属。付随 隸属 直属 專屬 被』 支配→.360, 独立→.124
- 120 一』 有無 あり合せ』  
 1 出現 登場 発生』 現前 きざし  
 \*実現 現われ 復活 提出』 現出 再現 生起 抬頭 惹起 自発 突発 勃発』  
 暴露』 開頭 露出 発露 發揮』  
 2 形成 樹立 結成』 創立 組閣 創設 発会』 創始→.1502 創造, 創作→.320  
 新興』 再興 中興』 成功失敗→.343  
 3 成立 確立』 成否』  
 完成 既成』 出来 成就 済み』  
 解消 廃止』 やめ 全廃 廃校』  
 4 \*存在』 存亡 存立 実在 実存』  
 一』 現行 既存 名残』  
 一』 普遍 偏在 散在 混在 内在』  
 \*独立。自立 孤立 依存 共存』  
 \*対立 \*中立』 連立 乱立 遊離』  
 滞在 駐屯 駐留 留守。』 在世 在住 寄留 駐日 進駐 在隊 在任』  
 消滅』 亡失 喪失 紛失 焼失 滅亡 絶滅 抹殺 抹消 断絶 佚』  
 5 固有 \*必要。』  
 \*維持 保存。保持 保全』 堅持 温存 永持

- ち 放置」  
 中略 抜き』略 前略 除外 排除 払拭 撤  
 回 撤廃 撤去 一掃 除幕」  
 放棄』棄却 破棄 廃棄 放擲 解除」  
**130** \*状態。様子。有様。情況(状況) 状 真相  
 現状』様 様相 相 態 実態 実相 生態  
 内状 症状 世相 好況 盛況 旧態」  
 景気→. 372  
 \*事情。実情』情状 国情 政情 消息」  
 \*傾向。\*情勢 態勢』形勢 風潮」  
 調子。具合(合)。 加減 都合。』基調 順調  
 失調 論調」  
 気配 雰囲気』風情 趣き 趣向」  
 異常』異状」  
**131** \*風 観』外観 表向き ぶり 壮観」  
 ——』容姿 風貌 風采 装 てい、スタイル  
 さま 醜態」 →. 18  
 2 \*内容。中味 要素。実質』仔細 正味 エ  
 レメント 成分」  
 構造。機構 \*組織。\*体制 構成』仕組み 組  
 合せ 体系 システム 仕掛。』  
 3 性質。\*性 質。』悪性 品質」 →. 3. 301  
 \*性格 個性』格 パーソナリティ」  
 特徴。特色』特質 特性」 →. 341  
 本質』本性 性 習性 野性 国柄」  
 長所 欠点 欠陥』持ち前 取得 アラ 弱点  
 瑕瑾 性能」 能力→. 341  
 4 秩序』公序」  
 調和。調節 調整 同調」  
 均衡 緊張 緩和』釣合 均勢 バランス ア  
 ンバランス ゆるみ 弛緩」  
 美』  
 都合。』便宜 不便 支障」  
 破綻』故障。不備」  
 混乱』錯乱 攪乱 もつれ 紛糾 雜踏 混雜  
 混濁」  
 ——』純 粹 国粹」  
 ——』充実 緊迫 切迫 窮迫 危殆」  
 是非 正』善美 良否」  
 ——』弊 弊害 旧弊」  
 ——』勝目 けち 引け目 競争→. 353  
**140** \*力。\*力 エネルギー 原動』  
 \*勢力。実力 全力』威力 底力 強み 全力  
 主力 自力 独力」  
 精力 暴力 電力 戦力 兵力 武力』活力  
 智力 視力 腕力 弾力 国力 火力 勞  
 力」

- 圧力 勢。』外圧 迫力 魅力」  
 機能 働き 能力』効力 失効 力量 インポ  
 テンツ」 →. 341, 性能→. 133  
 攻勢』水勢 国勢 守勢 惰性」  
**1500** 作用。反応』即応」  
 \*変化。変革 変り』一変 激変 変更 変質  
 変貌 変動 転変」  
 \*化 悪化 激化』美化 硬化」  
 転換』転成 転化」  
 交換。』交替」  
 \*安定 一定」  
 01 革新 改革』更新 刷新」  
 回復 復旧 復興』復元 還元」  
 改善 改造 改訂 改良 修正 \*改正』改修  
 更正 是正」  
 02 開始 開戦』始まり 着手 開業 発祥  
 再開 草創 創始 皮切り」  
 終止 終了 \*終戦 \*休戦』終結 完了 店じ  
 まい 中止」  
 03 継続 続行』連続 続き 永続 相続 後  
 継 継承」  
**1510** \*動。\*運動。\*活動。\*自動 自転 運転  
 反動 反撥』身動き 胎動 激動 動揺  
 揺れ 主動 空廻り」  
 停止 停車』停留 碇泊 停滞」  
 固定』安置 鎮座」  
 11 ——』起立 立ち上り 起き上り 蹶起」  
 顛覆 飛躍』打倒 顛倒 狂奔 蹉跌 立脚」  
**1520** 過程 経過 経緯 動向 軌道 コース』  
 筋道 道程 中道 成行き 航路」  
 ——』帰途 寄り道 別途 活路」  
 21 推移』移行 過渡 移動 移転」  
 出発。到着 到達 上陸』発足 発車 船出  
 到来 殺倒 波及 必至」  
 行進』邁進 突進 猪突 徐行」  
 通過 \*飛行』同行 道行 独歩 車行」  
 徹底。』横断 貫徹 直道」  
 推進』誘導 隨行 尾行 先駈 便乗 追撃  
 追いこみ 尻おし」  
 流れ』うわすべり 浮遊 漂流 天下り」  
 交流』流通 遠心 横行 蔓延」  
 22 進行 前進』後退」  
 後進』先進 逆行 東進 南下」  
 上京』下り 渡仏」  
 ——』往復。去来 通い 外来 出戻り」  
 帰り 帰国 送還 復帰』帰還 帰京 帰郷  
 帰省」

- 循環』巡回 巡洋」  
 ——』轉向 転回 偏向 脱線 逸脱」
- 1530 出入り 進出』外出 脱出 脱却 脱走  
 脱退 出所』 出欠席→. 351  
 入り 入ソ』入場 立入り 入国 入城」  
 導入 侵入』挿入 投入 移入 注入 先入  
 突入 流入 入水」  
 收容 吸収 收拾」  
 ——』放出 放水 流出 漏洩』放射→. 51
- 1540 昂揚 上昇 引揚 アップ』抑揚 高まり  
 騰貴 昇進 尻上り」  
 低下 投下 墮落』下向 下落 落下 墜落  
 没落 脱落 沈下 沈没 撃沈」
- 1550 ——』離合 集散」  
 結集 編成 蓄積』結束 集権 集結 集積  
 蒐集」  
 \*統一 集中 結合 総合 \*連合』合一 統合  
 総括 合体 複合 併合」  
 分解』分化 分散 発散 破裂」  
 分離 分割 \*分裂 分配』決裂 分列」
- 51 開放 公開」  
 ——』閉鎖 封鎖 掩閉 密封 幽閉」  
 ——』拘束 束縛」
- 1560 接触 衝突。』接近 隔離 ばなれ 命中  
 風当り 密着」  
 打撃』衝撃 乱打 摩擦。」
- 61 圧迫 圧倒 抑圧』圧縮 重圧」  
 抵抗。反抗」
- 62 防止 妨害 阻止 障害(障礙) 邪魔。』  
 阻害 妨げ 難関」  
 打開 突破』回避 打破 バス 融通」
- 1570 ——』変形 造形」  
 ——』傾斜 折 歪曲 卷 裏返し」  
 \*破壊 破滅 崩壊 解体』切断 カット 玉  
 砕 倒壊 壊滅 決壊」  
 ——』頽廢 荒廢」
- 71 \*増加 増進 増大』激増 漸増 増額  
 水まし 倍加 値上げ 値上り 賃上げ」  
 減少 切下げ』軽減 削減 半減 引下げ」  
 延長 延期』伸長 引のぼし 背のび 短縮」  
 拡大 充実 展開』拡張 拡がり 膨脹」  
 ——』収縮 萎縮 緊縮」  
 増強 補強 \*強化 強調』衰弱 消耗 衰減  
 老朽』 →. 57  
 優越』凌駕 耐震」
- 72 発達。\*進歩。\*発展 進展 向上 \*改進』  
 昂進 進捗」
- 1600 位置。\*立場 場 場面』シーン」  
 境遇 破目』境地 境涯 窮地」  
 \*地位』ポスト 配置 帝位 席次」  
 \*場合。段階 段 政局』局面 局 難局 行  
 きがかり」
- 1610 \*時。』刻」  
 \*何時。』いつごろ」  
 \*時間。』年月 月日 歳月 時日」  
 \*間』合間」  
 一時 一瞬 瞬間 一刻 刹那」  
 \*機会 チャンス \*危機 動機 契機 きっか  
 け』機運 好機 転機 画期」  
 \*際 折節 序で。』途端 折柄 潮時 帰  
 しな 間際」  
 \*頃。時刻 時分』時点 時限 定刻 定期  
 日時 日取」
- 11 毎 たび。』都度 毎度」  
 \*毎日 日々 毎年 年々』日ごと 毎晩 毎  
 夜 毎週 月々」  
 日常 日頃』通常 経常 平生 ふだん」  
 時々 時折』折々 時たま」  
 臨時。』隨時」  
 一旦」
- 1620 生涯 一生』一代 半生」  
 青春 中年』幼少 初老 晩年」  
 時期 期間 期』年季 有期 無期」  
 後期』前期 長期 短期 下期 早期」  
 永遠 永久』金輪際」
- 21 \*時代。代 紀』時局 時世」  
 \*現代 \*近代 古代 原始 戦時 維新』戦国  
 王朝 神代 ルネッサンス」  
 \*世紀』紀元」  
 \*昭和 大正 \*明治 慶長」
- 1630 \*年(歳)。\*年度 年間 半年』年次」  
 辛酉』戊申 豊年」  
 メーカー』元旦 年末 暮 除夜」
- 31 季節。春秋 春。夏。秋。冬。』季 学期」  
 32 月。』月間 月余」  
 中旬』上旬 下旬 月末」  
 正月』 一月・二月→月. 192
- 33 週間』週」
- 34 \*日。』半日 連日」  
 節 日曜』デー 休日 命日 縁日」
- 35 午前。午後。\*朝。昼。夕方。晩。\*夜。  
 夜』終日 ひねもす 朝夕 夜明け 早朝  
 日中 昼前 正午 午下り 日暮 夕暮 夕  
 刻 深夜 夜半 夜 暗夜」

1640 —』古今」

41 \*今。\*現在。目下 この頃』只今 現時  
今頃 当今』 現→3. 16  
\*今日 \*今日。今夜』本日 今朝。今晚 今春  
今秋』  
\*今年。本年』  
—』今生」

42 \*過去。\*昔。\*元 \*旧 前』疾う 大昔  
古』  
昨日。』昨夜。昨。一昨(年) 過日 先日 こ  
ないだ せんだって 先月 旧臘 (おとし  
い。おとし。)

去年。\*昨年』  
先 先刻 先程 先頃 \*最近 近頃』先刻 先  
般 昨今 近年 往年 ひとこころ』  
多年』永年』  
来 従来 本来 もともと』爾来 古来 旧来  
年来』

43 \*将来。未来。目前 \*今後 前途 先。』  
ゆくゆく 近々』  
明日。』明日 あした。明朝 あさって。来月  
来春 来年。来世』

1650 \*先』順 順序。順番 順位 後先 本番』  
\*初め。\*最初。先頭』前半 後半 真先 先鋒  
優先』

初 初期』初頭 当初 巻頭 トップ』  
末。\*最後。最終』末葉 末期』  
途中。最中 \*中。』中途 戦中』  
\*次。』次回』

51 終始』首尾 顛末』  
終い(仕舞) 終り 挙句(揚句)』冒頭 出鼻 中  
盤 結び 大詰 臨終 結末』  
—』極 窮極 行詰り』

52 —』新旧 急ぎ 遅れ』  
\*同時 \*当時』同年 同日 当日』  
前後 \*前。以前 直前 \*戦前』寸前 事前  
かねて 前々』  
\*以来 \*後。\*後 \*後。以後 直後 \*戦後  
以降』読後 死後』  
後日』後年 後世 後代 前日 前年』  
翌 翌日』翌朝 翌年』  
\*今度 今回』今次』

当面』当分 当座 即刻 すぐさま』

53 —』日課 課程 工程 カリキュラム』  
—』日曆 本曆 官曆』 曆→1. 31

1700 —』空間』

\*所(処)。』

\*ここ。\*そこ。あそこ。\*どこ。』いずこ どこ  
そこ こちら 当地 そちら』  
各地 あちこち』所々 随処 各所 あちらこ  
ちら 方々』

場所。個所』地点』  
所 \*場』 現場。職場→. 262  
\*地』現地』

01 \*点 諸点 重点 焦点 頂点 要 観点』  
起点 基点 振出し 終点 ゴール 盲点  
拠点 急所 足場 足がかり』

\*もと(下・許)』局地 口もと 耳もと』

02 範囲。地域 地区 地帯 \*地方。区域  
領域 \*土地。』帯 域 神域 芸域』

分野』視野 裡 脳裏』

圏 界』

基盤』

中』

席。座』座席 議席』

\*跡(痕)。』形跡 痕跡 あとかた 遺址 廃墟』

03 限界 境。国境』境界 境』限度→. 194

1710 向き \*方向。直面』向け 指向』  
こちら。こっち あちら。どちら。』そちら。  
そっち あっち どっち』

向う』手前 あなた 対岸』

縦。横。』斜。傾き 逆さ。傾斜。』

あて』行先 途方』

ほう。』方位 方角』

東西 \*東。\*西。南北 南。北。東北 東南  
東方 西方 南方』うしとら』

—』西部 北部 中部』

11 左右 左。左翼 \*右。右翼』左 左方  
右方 右下 右舷』

\*上。\*上。\*下。下』上部 上段』

地上 地下』海上 卓上 頭上 面上 屋上  
席上 世上 軒下 床下 治下 管下』

12 \*中。\*中心。\*中央。』中頃 中核 核心  
中枢 都心』

—』そっぽ 末梢 末節 末席』

片隅 はずれ』隅。隅 一角 街頭』

—』上 下 上手 下手』

上流』中流 下流』

1720 \*面 一面 正面』平面 斜面 部面 前  
面 生面』

表面。表。裏。反面』裏面 内面 半面 側  
面』

紙面』盤面 函面 地面 河面』

\*側。』西側 舷側 両側 蘇側』

\*前。後。背後』 門前 駅前 店先 前方 後部』

\*間。\*間。中間』

先』 端。端 先端 末端 端緒 いとぐち』

21 内外』

\*内(中・裡)。\*内。\*中。\*内部 党内』 体内 屋内 境内 場内 坑内 市内 学内 空中

宙 渦中 懐中 城中 陣中』

外。外。外部 域外』 外様 線外 門外 港外 国外』

裡 懐』

\*奥。底。』 奥底 どん底 胸底 船底 陰(蔭・翳)。』

横。』 横っばら 真横 左横 両脇』

隣。』 隣室 隣席』

よそ』

1730 付近 かわら 側。』 ひとり 湖畔 寄沿い、伝い、近隣 近辺 浜続き 鼻先』

近く 遠く』

近所 周辺 まわり(回・廻・周)。周囲。一帯 環境』 ぐるり』

\*辺り 辺 方面』 身辺 界限』

180 \*型』 大型 小柄 拵え 詩型』 形式→. 110 \*形。形態 形(型)』 外形 形状 形骸』

—』 塊り。粒。滴』

丸。』 方形 長方 三角 円形 楕円』

玉(球)。』 立体。円壩』

—』 鱗形 波紋 波状 魚形 畸形 (皺。)

\*姿。恰好』 姿勢 ポーズ 半跏』

点。』 斑点 傍点』

\*線。ライン 筋。』 棒線 基線 斜線 路線 本線 曲線 曲折 急カーブ』

—』 角。曲折 カーブ そり』

—』 三叉』

1 穴(孔)。入り口』 孔 口 銃口 切口 はけ口 隙 隙間 ギャップ』

粹。』 外輪 台 下地 管 彫』

模様。目。』 柄 縞 網目 布目』

—』 束。一団』

—』 破片 かけら 片鱗』

—』 核 芯』

欄』 包み』

列。』 行列 家並 一連』

190 量。高 額 レコード』 数量 分量 ヴェリューム 値』

件数 人口』 内訳 紙数 人数 人員 定員 搏数』

距離。幅。高度 高さ』 間隔 寸法 波長 直径。半径 周 身丈 (背。)

規模 面積。』 大小 (体積。)

年齢』 適齡 学齡 年数』

金額』 年額』 価格→. 371

能率。』 効率 精度 高率』

温度。』 熱度 気温 水温』

—』 角度 視角 重量 比重 軽重 速度

スピード テンポ 時速 強度 強弱 濃度

感度 血圧 収量 水量』

1910 \*数。\*数。』

零・五 \*一 \*二 \*三 \*四 \*五 \*六 \*七 \*八 \*九

\*十 \*二十 \*三十 \*四十 \*五十 \*六十 \*七十 \*八十 \*九十 \*百 \*二百 \*三百 \*四

\*百 \*五百 \*六百 \*七百 \*八百 \*九百』

\*千 \*二千 \*三千 四千 \*五千 六千 七千 八千 九千』

\*万 \*億 兆』

幾つ。\*幾ら。幾。』

幾百 数百 何百。』 幾十 幾百千 数十 何千』

\*一人(独)。\*二人』

一日 二日 三日 四日 七日 八日 九日 十日 二十日』

二三。』 四五 二六 四六』

—』 番地 ナンバー ワン ベストワン ベストツー ベストスリー 元』

若干 多少』 幾分』

11 \*多数 大量 大勢 大幅 高価 少数』

多量 巨額 少量 小額』

—』 半数 半額 同額 パー 寸分』

係数』 偶数 約数 分母 根 指数』

\*倍 分の』 乗 平方。立方。二分 三分』

平均。割合。\*割 率』 比率 レート 歩割』

差。』 開き 差額 誤差 格差 差引』

合計 総額』 総数 総計 票寄せ』

プラス マイナス』

当り』 おき 足かけ』

2 単位。』

\*割 分 台(代) \*パーセント』

\*第。位 番。\*号 世 代 等』

\*度 \*回 \*次 遍』

階 重』 丁目』

個 件 \*名 枚 \*本 台 軒』 騎 艘 隻 輛 門 目 戸』

冊<sup>ページ</sup> \*頁。』 卷 丁 行」  
 頭 匹』 羽 尾」  
 歩 通』 服 発 抱 杯 皿 封」  
 籽 米』 キロ センチ ミリ」  
 里』 町 間 尺 寸」  
 哩』 ヤード フイート」  
 町 歩 量』 反 坪」  
 石』 升」  
 噸 キロ』 グラム パール 貫」  
 \*時 \*分 時間。』  
 \*年 箇年 \*月 \*箇月 \*日 \*日」  
 \*歳』  
 \*円。 銭 文』  
 \*ドル フラン』 ポンド セント シリング  
 ルーブル ルピー リラ マルク」  
 30 \*全部 全面 \*全体。 \*総て(凡・全)。 \*皆。  
 \*一切 一同 \*一般』 全員 一式 総がかり  
 網羅 全群 全土」  
 \*部分。 \*一部 \*部。 半分。 半。 半ば 大半  
 \*多く \*大体。』 一半 半々 過半 大部」  
 中』 満場 満部 満水」  
 集団 集 群。 群 組。 グループ』 集まり 一  
 行 アベック マス」  
 両者 双方 両方 \*一方 他方』 複 片方  
 片」  
 \*等 \*等。 \*方。 \*達。 \*ども」  
 31 過剩 過ぎ 余 余地 余裕 余計 のこ  
 り』 超過 おまけ 蛇足 余分 余剩 残額  
 残高」  
 不足』 欠乏 払底 半端」  
 付 付』  
 \*など。 \*なんか \*なんて』  
 32 \*程度。 \*程。 \*位。』 何程」  
 限度 限 \*限り』 極まり 至り」  
 \*以上。 以下。 以内 \*以外』  
 乃至 \*まで。』 限界, 範囲→. 170  
 \*のみ \*ばかり。 \*だけ。』

1.2

200 \*私。 \*わたし \*僕 \*俺 我 \*我が 予  
 わし \*我々』 わっし 拙僧」  
 \*あなた。 \*君 \*お前 あんた \*諸君』 汝 貴  
 下 貴女」  
 \*彼 \*彼女 あいつ」  
 \*誰。 何人 何者』 誰々 どなた。』  
 おのれ \*自ら \*自身 \*自分。 \*自己 本人  
 他人』 当人 同人 別人 自他」

各自 各人』  
 某』  
 2010 \*人間 \*人。 人物 \*者。 \*方。』  
 \*人 \*人 \*者。 \*家。 \*士 \*奴 \*生 \*員 徒  
 婦 マン 姫』 手 漢 奴 夫」  
 \*人々 連中 方々 衆』 連 兩人」  
 \*様。 \*さん。 ちゃん \*君 殿 \*氏。 嬢』 陛  
 下 殿下 ミスター」  
 公 丸 軒』  
 11 \*神。』 神 氏神 武神」  
 仏。』 仏 菩薩 観音 明王」  
 メシア キリスト』 天主 救主」  
 一』 天狗 夜叉 聖靈 ばけもの」  
 2020 男女』 異性」  
 \*男。 男性 男子 野郎』  
 \*女。 \*女性 婦人 女子 女 女史 女の子」  
 \*子供。 \*少年 少女 児童』 赤ん坊 幼児 小  
 児 悪童」  
 \*青年 若者』 乙女」  
 大人。』 成人 おっさん」  
 老人 老 翁』 爺 老婆 古老」  
 美人』 美男 麗人 大男」  
 210 家族。 皇室 一家 家 族 源氏』  
 親子 父兄』 妻子 子弟 遺族」  
 一』 隠居 居候」  
 1 夫婦。 夫妻』 配偶」  
 良人。』 亭主 夫君 夫 婿。』  
 妻。 \*夫人 女房』 妻君(細君) 家内 かかあ  
 老妻 先妻 後妻 妾」  
 未亡人』 後家」  
 20 \*親。 両親』 父母」  
 \*父。 父親 父。 親父』 老父 パパ」  
 \*母。 母親 母。』 母上 ママ」  
 一』 継母 義母」  
 祖父 じい。』 祖母」  
 一』 先祖 祖先 祖」  
 21 \*子 児 孤児 息子。 \*娘。 皇子 皇太子』  
 寵児 養子 嗣子 太子 曹司」  
 一』 長男 次女 末子」  
 一』 孫。 子孫。 後裔」  
 嫁。』 嫁っ子」  
 30 兄弟。』 姉妹 同胞」  
 兄。』 兄貴 兄 長兄」  
 姉。』  
 一』 実兄 義兄」  
 弟。 妹。』 弟妹 令弟」  
 一』 実弟 義弟」

- 40 一』 親類。親戚 皇族」  
 叔父。おば。』  
 一』 従弟。甥」
- 220 \*相手。』  
 仲間。同志 同士』  
 味方。\*敵。』 かたき 敵手 外敵」  
 友達。友人 友』 親友 旧友 学友」  
 知合』 近づき 知人 知己 隣人」  
 一行』 連れ 道連」
- 1 \*主人。主婦 マダム \*奥。』 あるじ 女  
 将」  
 \*客。』 泊り客 国賓」
- 230 \*民族。人種 \*国民。』 ネーション」  
 外人』 邦人 エトランジェ 白人 黒人」  
 市民 村民』 住民 住人 移民」  
 一』 世人 私人」
- 1 \*人民 \*民衆 \*大衆 民 平民 庶民』 万  
 民 衆生 公民 士民 臣民 臣 重臣」
- 2 \*天皇 皇帝 王 女王』 天子 国王 君主  
 暗君 暴君 中宮 摂政」  
 一』 大名 諸侯 国造」
- 大統領』
- 3 官僚 武士 ブルジョワ 豪族 貴族』 侍  
 公卿」  
 信者 クリスマン』 信徒 教徒 宗徒」
- 4 英雄』 豪傑 大聖 三哲」  
 紳士 大物』 名士 大官 要人」  
 博士』 農博」  
 一』 秀才 文豪 人材」  
 つ  
 通』 先達 先覚」  
 インテリ』 インテリゲンチャ」  
 一』 フェミニスト ニヒリスト」  
 一』 論客 弁士 闘士」  
 名人』 チャンピオン 選手。エキスパート」  
 素人 プロ』 アマチュア」  
 一』 花形 売れっ子」  
 金持』 成金 長者」  
 一』 旅人 乗客 旅客 お上りさん」  
 常連』 新人 有志」  
 一』 奇人 野人 おきゃん」  
 一』 あわて者 なまけ者 ピエロ」  
 一』 愚者 酔っぱらい ごろつき」  
 病人 患者』  
 一』 死者 盲人 狐つき」  
 一』 勝者 弱者 にない手」  
 一』 義民 暴徒」  
 捕虜 奴隷』 俘虜 とりこ 人質」
- 犯人』 国賊 戦犯 罪人 囚人」
- 240 一』 成員 要員 一員」  
 職員 会員 黨員』 店員 隊員 社員 塾員」  
 \*議員 \*委員」  
 職』 教職 閑職 現職 要職」 →. 38
- 10 一』 技師」  
 \*教師 \*教授 教官 教員 講師 \*学生 \*生  
 徒。』 学徒」  
 医師 医者。医』 按摩」  
 \*作家 詩人』 文士」  
 \*記者』 ジャーナリスト プロデューサー」  
 一』 歌手 テナー チェリスト」
- 俳優。スター 役者 女優』  
 画家』 絵描き 画伯」  
 名人』 棋士 家元」  
 \*学者。』 学究 儒者」  
 牧師 教祖』 神官 僧侶 坊 法師 尼 禪師  
 伴天連 始祖 開祖 在家」
- 11 役人 官吏 \*官』 補 吏 属」  
 \*大臣 閣僚 \*首相 外相 文相』 相 宰相  
 蔵相」  
 次官』 奉行 大夫 参事 文官」  
 大使 公使 領事』  
 判事 検事』  
 一』 知事 庄屋 地頭」 長→. 243  
 重役』 専務 頭取」 社長→. 243  
 地主』 親方 元締 マネージャー 用人」  
 書記』 秘書 クラーク」  
 給仕。』 (車掌。)
- 12 業者 メーカー 商人 商 問屋』 豪商  
 買弁 株屋」  
 一』 売子 小僧 丁稚」  
 一』 かつぎ屋」
- 13 百姓 農家 \*農民』 作男 カウボーイ」  
 漁民 漁夫』 狐師 漁師」
- 15 一』 セーラー マドロス」
- 16 工員 工 職人』 職工」  
 一』 大工 石工 鳶職 とび」  
 一』 土方 人夫 ニコヨン」  
 一』 自労」
- 17 警官 刑事』 巡查。足軽 門番」
- 18 女中。』 召使 侍女 忠僕 書生 学卒」  
 一』 小使 ボーイ 三助」  
 一』 女給」  
 一』 ガイド メッセージャー」  
 一』 マネキン」  
 一』 芸者 傾城 躑躅おしやく



パンパン』街娼 男娼」  
 19 スパイ』まわし者」  
 強盗』ギャング すり 海賊」  
 一』乞食」  
 2 軍人。兵隊。兵』歩兵 憲兵」  
 一』士官 下士」  
 元帥 將軍 將校』神將」  
 大將』將官 准將 大佐 大尉 軍曹 三正  
 一查」  
 提督 參謀』幕僚 副官」  
 3 \*長。長』  
 議長』  
 \*長官 總裁 司令』総督」  
 \*社長』総長 総務」  
 学長 校長』教頭」  
 会長』会頭 所長 館長 駅長」  
 部長 課長』局長 係長 組長」  
 村長』市長 町長」 知事→. 241  
 首長 首班』頭 主席 主任 盟主」  
 一』次長」  
 4 幹部 ボス 首脳』ワンマン 長老 上役  
 ダラ幹」  
 \*先生。師匠 師』師弟 先輩」  
 旦那 親方』パトロン 抱主」  
 手先 側近』部下 番頭 子分 従者」  
 弟子』門下 教え子 後輩」 臣→. 231  
 5 係。』係官 係員」  
 役員 理事 幹事 顧問』 役→. 34  
 作者 著者 筆者 \*読者』訳者」  
 監督。』助手」  
 フェン』  
 聴衆 観客』観衆」  
 \*被告』原告 証人」  
 一』聞き役 立役 端役 後ジテ」  
 一』オルグ スポンサー アジテーター」  
 一』主 持ち主 株主」  
 使 特使 ミッション』使節 伝令」  
 250 公 私 民間』公け 一身」  
 \*個人。』  
 1 \*家庭。\*家。家々』世帯」  
 一』本家 分家 実家 旧家」  
 一』家門 武門 患家」  
 2 故郷 郷里 \*国。』故郷 郷土」  
 地元』異境」  
 3 \*国家 \*国。\*国』邦家 君国 皇国 斯国  
 ステーツ」  
 \*全国 \*国内 内地』内国」

自国 祖国 本国』母国」  
 同国』  
 \*外国。他国 海外』隣国 隣邦 異国 外地」  
 大国 軍国 帝国』強国 王国」  
 国々 \*国際。各国 \*諸国』列強」  
 連邦 两国』盟邦」  
 一』和漢 和洋 民国 ヒンディ」  
 藩』  
 4 都市 都会。都 都 \*町(街)。街 郊外』  
 露部 下町 盛り場 花街 場末 洛北」  
 地方。田舎。\*村。\*農村』山村 漁村 僻地」  
 部落』  
 5 領土』縄張り」  
 府県 府 \*県 都 郡 \*市』  
 \*区』学区」  
 260 天下』万国 八紘」  
 \*社会。世間 \*世の中。\*世』浮世」  
 1 \*世界。』天国 冥途」  
 \*界 政界 財界 文壇』野 官海」  
 \*市場 \*陣營 筋』  
 一』勞使 勞資」  
 2 \*戦場』つとめ先 持場」  
 議場』会場 宴席」  
 現場 戦場 陣 戦線』売場」  
 \*基地』  
 一』早場 本場」  
 3 神社。寺。寺 \*教会。』  
 \*学校。\*校 学園』  
 \*大学 大 京大 東大 学部」  
 高校 中学 \*小学」  
 一』全校 他校」  
 官学 私学』アカデミー」  
 母校』学窓」  
 4 \*会社。昭電 日産』公社 公司』社→. 280  
 \*銀行。日銀』世銀」  
 \*工場。』工廠」  
 市場。市』マーケット ヤミ市」  
 駅。』  
 一』鉱山。炭坑」  
 5 商社 店 店。』問屋 商店 デパート」  
 一』質屋 飯屋 酒場 茶屋 料亭」  
 一』本屋 書店 煙草商」  
 一』魚屋 靴屋」  
 一』土建」  
 旅館。宿屋 宿 ホテル』  
 一』床屋 銭湯」  
 病院。』医院 医局 薬局」

劇場 座』

\*屋。\*所。』

6 宅 自宅 下宿 アパート 荘 坊』 私邸

ホーム 寮 本営 キャンプ』

教室 会館 \*館』 道場 サロン』

法廷』 廷』

——』 監獄 ラーゲル』

——』 関所 宿』

270 \*機関 体』 団体→. 280

本部 支部 \*部』

1 \*政府。\*内閣 幕府』 朝廷 国府』

官庁 役所。当局』

\*省 \*院 \*局。庁 署 役場』

課 官房』

2 国庫 \*警察 国鉄』 復金 行監 地裁 国  
警』3 \*国会 \*議会 上院』 衆院 参院 両院  
市会 村会』

委』

4 \*軍 軍部 \*軍隊。』

\*海軍。\*陸軍。空軍』

米軍 仏軍』

\*隊。部隊 艦隊 師団 連隊』 勢 中隊 分  
隊 デモ隊 縦隊』

——』 寄せ手 後詰』

5 \*国連 ユネスコ』 ガット オリンピック  
赤十字 コミンフォルム』

280 \*同盟 連盟』 連邦→. 253

\*団体。\*団 合衆 \*社』

\*組合 労組 総評』

農協 漁協』

経団連』

党派 \*派』 徒党 一味 別派』

\*政党 \*党 与党 野党 両党 右派 左派  
左社 右社 労農 ナチス 中共』

サークル クラブ』

宗』 教団 財団 球団』

謡講』 宮座 新派 トリオ』

班』 隣組 め組』

\*会。協会』 学会』 大会→. 341

1 クラス 2 L A』 学級 全級』

2 財閥 軍閥』 閥 藩閥』

## 1. 3

3000 \*心。\*心 \*精神。心理。魂』

\*意識』

元氣。』 意気 精根』

気質』

印象。感動 感激 感心。興奮 感覚。実感

同感 苦痛』 疲労』

不意』 失神 虚心』

\*夢。』 眠り 目覚め 酔 休息』

——』 眩惑 錯覚』

気違い 馬鹿。』 ヒステリー 癡癡』

\*感 \*感じ \*気。\*気持。気分 気味 心持。』

心境 機嫌。』 心情 心事』

01 \*感情。情緒 感傷』

——』 退屈。』

恐慌』 驚き 驚異 驚愕』

愉しみ』 興 慰み』

喜び』 歓楽 享楽』

苦しみ 悩み』 苦悩 労苦』

——』 閉口 困却 困窮』

——』 憐れ 悲哀 哀愁』

恐怖』 物怖じ おじけ 臆病。』

怒り 憤り』 腹立ち 憤慨 短気』

悲しみ』 嘆き 慨嘆』

\*心配。不安』 憂慮 懸念 危惧 焦躁』

安心。』 落付き』

不満 満足。』 不平。満悦』

02 \*好き』 好み 好奇 愛書』

親しみ 友好』 親露 向米』

愛。愛情 同情。愛国 恋愛 恋』 友愛 情愛  
慈悲 博愛』

——』 遠慮。謙遜 卑下 恐縮』

反感』 嫌い 憎悪 忌避 厭軍』

反米 反共』

恨み 遺憾』 痛恨』

好意 親切。』 好感 誠意 篤志 忠義。幸  
行。』

感謝。同感』

信頼 信用。』

尊敬。尊重 崇拜 輕蔑』 敬意 珍重 敬仰

感服 欣慕』

迷惑』 当惑』 人気→. 341

03 表情 顔つき \*顔。』

——』 忍び泣き 男泣き』

苦笑』 笑い 微笑 失笑』

\*声。笑声』

3010 念 信念 \*努力。\*勉強。苦心 苦勞 我慢。辛棒 夢中』 自我 心がけ 一念 熱中  
没頭 心酔 浮氣 忍耐』

自主 自信 誇り 名誉。面目 勇氣。』 自慢。

自負 自嘲 恥。恥辱 士氣 客氣 躊躇。』

覚悟 後悔。懺悔 悟り」  
 慾。性慾 願 念願 望み \*希望。欲望 切望  
 待望 \*期待 失望 諦め』本能 衝動 食  
 慾 節度 志願 志 野心 強氣 断念」  
 \*態度。自覚 反省 趣味。』ユーモア」癖→12  
 11 意 意図 意志。\*心算。\*自由。』内心  
 意向 意思 故意 任意 随意 総意 神意  
 わがまま 横暴」  
 良心。正義 道德。\*誠。使命 \*責任。罪。  
 善 悪 不正』義 名分 人道 道義 操  
 悪徳 余徳 背信」  
 信仰 \*宗教。\*教 カトリック 回教』迷信  
 宗旨 儒教 仏教 禪」  
 義理 恩。お陰。』恩寵 恩義」  
 12 練習。訓練 熟練 試練 習慣。癖。』見  
 習 習得 慣習 洗練」  
 稽古 学習』研鑽 専攻」  
 修業 修身 演習 セミナール』模倣 真似。  
 夜学 修養 涵養 復習」  
 記憶。覚え 記念。\*経験。体験 思い出』暗  
 記 蘊蓄 回顧 忘却」  
 20 知性 智慧。知 \*知識。常識。良識』理  
 性。勘 センス 見識」  
 思い \*考え 考慮 感想 \*思想。見解 \*意  
 見 偏見 観』思考 考察 工夫 推理 配  
 慮 発想 私見」  
 確信 不信 疑問。疑い』所信 盲信 懷疑  
 嫌疑 容疑」 信頼→02  
 注意。\*関心 \*興味。用心 警戒』留意 油  
 断。』 用意→33  
 認識 承知。存知 解釈 \*理解。諒解 把握  
 誤解 納得 確認』早わかり 合点 判明  
 混迷」  
 21 区別。対照 \*比較。分類 整理。参照  
 参考。』識別 混同 対比」  
 選択 採択』選 選定 銓衡 人選」  
 22 \*実験。試み 試験。検査 審査 審 検  
 察 検討 探求 追求 捜査 探検』追試  
 考查 診察。檢疫 原審 検閲 詮議 追究  
 追及 捜索 探偵 模索」 発見→90  
 \*調査 分析』調べ 吟味 解明」  
 \*研究。観察。観測 計算。勘定 統計。評価  
 発明。』測量 算出 換算 清算 精算」  
 証明。実証 \*解決。』審理 考証 裏づけ こ  
 じつけ ゴマ化し」  
 23 想像。空想 \*理想。』仮定 幻想 夢想  
 妄想」 目的→. 111

判断。\*判決 否定 断定 結論 予定。決意  
 決心』判定 認定 審判 決断 静観」  
 推定 予想 予測 見透し 見込 \*筈。』推量  
 推測 推察 憶測 占い 予期 予断」  
 24 承認』是認 否認 否決 是々 非々  
 \*決定 取決め 制定 国定』定め 所定  
 暫定 確定 設定」  
 30 構想 要約』あらまし 概括 筋書 眼目  
 見どころ 要 要旨 要点 要諦」  
 理念 概念 觀念 \*具体 抽象 客観。』表象  
 命題 主観。』  
 \*意味。\*わけ。意義 広義 趣旨 \*問題。課  
 題 話題』定義 含み 主旨 論旨 テーマ  
 議題」  
 一』題材 特ダネ 議事」  
 31 論理 \*理論。理窟。無理。』論法 理 道  
 理 つじつま ナンセンス」 矛盾→. 111  
 嘘。誤り 間違い』虚偽 聞き違い 手違い  
 訂正 取り返し」 真→. 103  
 学術 \*学問。\*学。\*科学。\*専門。教科 \*科』  
 学芸」  
 \*哲学。物理。化学。地理。医学 教学。』漢学  
 法学 外科 曆 算術。』  
 説 \*論 世論』論説 社説 論究 輿論 公  
 論 緒論」  
 32 原理 原則 綱領 \*法 法則 \*規定 \*法  
 律。規則。憲章 \*憲法 \*条約 令』範  
 規約 規律 法制」  
 \*MS A』商法 独禁 破防 刑訴」  
 \*主義。建前 方針。\*主張。イデオロギー』信  
 条 教理」  
 \*民主 デモクラシー \*共産 フェッシズム  
 \*保守』勤王 ブルジョワジー リアリズム  
 日和見」  
 \*方法。方式 術 手続 \*方 \*様。戦術』術  
 方途 定式 流儀 手がかり 工法」  
 手段→. 111 技術→. 341  
 \*制度。\*制 職制』新制 官制」  
 33 見地 見通し 見当』狙い あて 目先  
 観点」 →23, 目標→. 111  
 準備。\*計画。企画 戦略 予備 用意。』支  
 度。企て 共謀 陰謀」  
 \*案 原案 法案 方策 策 \*政策 対策』試  
 案 懸案 施策 プラン」  
 90 御覧。視 拝見 \*発見。見物 注目 無視  
 監視 \*番。』一見 所見 看取 直視 凝視  
 傍観 展望 人目 重視 閲兵 観劇 視察

- 』展示 展覽 陳列 誇示」  
指示 指定 指摘 指針』示唆 暗示 指図」
- 91 —』聴取 採聴 公聴」
- 3100 —』言辞 言説 言動 口先 叫び」  
\*言葉。言 言 文句 \*語。科白』言語  
言語 辞 熟語 詞 句」  
国語。英語』露語 パングリッシュ 方言 隠  
語」
- 』発音 口調 訛 アクセント」
- 01 符』印。示標 肩章 符号」  
文字 字。数字 赤字』漢字。かな。」  
表。図。\*式。』地図 グラフ 図案」
- 』楷書 行書 草書」
- 02 —』命名 呼称 自称」  
名前。\*名』銘 題。題目 題名 名目」
- 03 \*表現 表明 描写』叙述 形容 誇張  
換言」  
翻訳 訳』通訳 国訳」
- 04 発言 一言 沈黙 引用』ひとりごと 断  
言 力説 放言 過言」
- 05 声明 言明 宣言』披露 公言 提唱」
- 06 \*発表。公表』發布 布告」
- 07 読書 愛読』朗読 熟読 拝誦」
- 10 通信。\*手紙。便り 電話。電報。』書簡  
音信 矢文 打電」  
知らせ 通達 周知 予報 予言』通知 諜報  
朗報 予告」
- 11 \*報道 ニュース 情報 宣伝。\*新聞。放  
送。』マスコム 日報 広告。」
- 12 挨拶。\*話 会話 談 座談 講義 講演  
説教』合図。呼びかけ 祝辞 喋り 雑談  
縁談 講座 福音」
- 13 問 質問。返事。答え 答申 答弁 解答  
回答』問答 反問 拷問 詰問 クイズ 否  
応 応酬」
- 14 \*批判 批評。\*非難 皮肉』言分 異議  
苦情 申訳 弁解 諷刺 いや味」
- 15 議論 論議 討論 討議 協議 衆議 代  
議 審議 \*会議 \*会談 提案 決議』評議  
論争 論難 反駁』抗議→. 352
- 16 言論 \*演説 弁護』弁論 遊説」
- 17 \*報告。陳情 自白 告白 投書 投票』  
証言 進言 申出 申込 密告」
- 18 \*説明。注 説得』解説 注釈」
- 19 噂 評判 寸評』世評 名声 デマ 好評  
悪名 誇り 悪口 悪口」
- 20 記載 前記 調印 署名』筆写 記述 執  
筆 登録 捺印」
- 21 文章。文。前文 編 節 条 記 \*記事  
記録。』全文 本文 本文 空文 漢文 長  
篇 余録」
- 22 文書』書類 調書 白書 覚書 コミュニ  
ケ 免状 ヴィザ」
- 23 文献 図書 書籍 書物 \*書 本。古典  
\*雑誌。誌 紙 巻』著書 珍本 古書 辞  
書 じびき。全集 選集 句集 集 聖典  
読本 テキスト 台本 絵本 名簿 カタロ  
グ」  
書紀 万葉 聖書 読売 タイムズ』
- 24 プログラム』目次 序 メニュー 曆。」
- 320 創造 著 立法 作曲』独創 創作 著作  
作文」  
\*作品 原稿』名作 合作」
- 1 \*芸術。文芸 \*文学。詩。\*歌(唄)。聖歌  
民謡 スローガン 陀羅尼』歌 和歌 俳句  
川柳 ことわざ。」  
評論 論文 日記 \*小説。物語 伝 手記』  
散文 隨筆 リポート 脚本 母もの」  
神話 落語 冗談 謎』説話 伝説 夜話 エ  
ピソード 祝詞 洒落」
- 2 美術。\*絵。\*写真。』絵画 蒔絵 工芸。  
彫刻。」
- 3 音楽。曲』節。音頭 雅楽 謡 浄瑠璃  
シャンソン」
- 4 \*映画。演劇 劇。芝居 悲劇 歌舞伎  
能』歌劇 オペラ キネマ」
- 3300 \*文化。\*伝統 権威 \*歴史。\*史 由来』  
道統 古事 故事 いわれ」  
風俗。風潮 流行。文明』通俗 アプレ 風靡  
普及 通用」
- 10 \*人生 運命。仕合せ 福祉 幸運(好運)  
災害 震災 水害 凶作 被害 幸い。\*幸  
福。不幸』運。幸 宿命 艱難 難 遭難  
饑饉 冷害 戦災 災難。禍 惨禍 罹災  
避難 (害。)
- 11 出世』処世 立身 復員」
- 12 入党 就職 辞職 失業 立(候補) 下野  
引退 入閣 入社 入院 就任 兼任 留任  
退官 応募 獵官」
- 2 勤務 勤勞 \*労働。共稼ぎ 従業 従事  
閑。夏休み ストライキ \*スト 争議』服  
務 出張 休暇 暇 サボ アルバイト」
- 3 \*生活。暮し』独身 一人暮らし」  
—』居住 居 土着 同居 逃亡 夜逃」

—』起居 徹夜 宿泊」  
 食事。』朝食 昼飯 晚餐 弁当 酌宴 大食 喫茶」  
 化粧。武装 性交』理髮 美容 仮装 洗面  
 嗽 保健 養生」  
 4 入学 卒業。進学 留学 受験』在学 放  
 校 勉学 落第 入門」  
 5 結婚。離婚』結髮 戴冠 洗礼」  
 6 \*式。祭 祭 クリスマス デモ』儀式 祝  
 い 婚礼 葬い 葬式。』 会合→.351  
 —』 礼拝 祈禱 参拝 墓参」  
 7 旅 旅行。外遊』 遠出 観光」  
 碁 将棋 パチンコ \*運動。スポーツ 野球。  
 舞』遊び 道楽 戯れ 娯楽 手品 ゲーム  
 体操。競技。レース 水泳 テニス。剣道  
 ダンス 踊り 芸当 競輪 散歩。(相撲。』  
 8 騒ぎ』 騒動 失火 心中」  
 9 乱暴。』胡坐 半跏 身振 セスチュア 抱  
 擁 辞儀。接吻」  
 —』腕づく かつぎ 手ぶら 摺取り 板挟  
 み 戸締り 発掘 肉づけ 首っ引き」  
 —』一呑み ラッパ呑み 一肌 一足」  
**3400 義務。任務 公務 担当』当為 任 職務  
 兵役 受持」**  
 01 権利。\*権 \*権力 権限 主権 人權  
 \*政権 特権』 權益 民権 覇権 家督」  
 1 資格。身分 出身 生まれ \*役。役目 役  
 割 経歴』 身上 本分 系譜 閱歴」  
 職→.380  
 人格 人気 魅力』 人柄 人品」  
 教養 才能。\*技術。』 素養 学力 技能 芸  
 手腕 演技 無能 文盲」 →.3032  
 —』体面 威儀 エチケット 風紀(礼儀。』  
 —』行状 品行 素行 非行 情事』→3.301  
 冒険』 振舞 動作 業 手際 やり口 手口  
 暴挙」 乱暴→.339  
 20 行為 \*行動 \*実行 実践 実施 執行  
 遂行』 履行 決行 敢行」  
 犯罪 犯行 無罪 疑獄 汚職 殺人 売春』  
 再犯 有罪 連坐 放火 窃盗 賭博 売笑  
 売国」 罪→.3011  
 21 活躍 \*運動。\*活動。主催』 奔走 イニ  
 ャティヴ 先手 当亭 対処 行使 興行」  
 従事→.332  
 22 用』 所用 雑用 私事 用事。』  
 3 失敗。\*成功。成績。功績 達成』 業績 過  
 失 自業 手柄。』

**3500 交際。\*外交。』 交り つき合い 国交 運  
 衝 鎖国」 同盟→.280**  
 01 争い 紛争 喧嘩。講和 \*平和。妥協』  
 係争 反目 抗争 排斥。排外 親善 融和  
 宥和 協和 和解」  
 反撥→.151 反米→.302 同調→.134  
 1 会見 対決』 面会 面接 再会」  
 訪問。』 歴訪 見舞。来朝 辭去」  
 招待。応接 歡迎』 招聘 勧請 見送り」  
 案内。馳走』 接待」 紹介→.362  
 別れ』 告別 訣別 離別」 →.155  
 \*会。会合 \*大会 総会 集会 出席。解散』  
 パーティ 召集 陪席 欠席。』  
 20 約束。契約 \*協定 締結 裏切り』 婚約  
 公約 密約 協約 妥結 解約」  
 21 相談。\*交渉。依頼 許可 拒否 \*支持  
 賛成。同意 容赦 \*反対。抗議』 接衝 承  
 諾 承服 合意 譲歩 許容 辞退 拒絶  
 一蹴 共鳴」 →.3002  
 22 \*協力 協同 \*参加 加盟 加入 脱退  
 団結』 参与 参画」 共同→3.36  
 23 寄与 貢献 サービス 犠牲。』 奉仕 奉  
 公 殉国 献身 慈善」  
 3 競争。勝負 勝利 克服 敗北 敗戦 対  
 抗』 手合せ 試合。勝敗 勝ち 優勝 戦勝  
 降服 屈服 凱旋」  
 \*闘争 \*闘い(戦) 戦闘 作戦』 闘争 死闘  
 接戦 冷戦 野戦」  
 \*攻撃。反撃 爆撃 襲撃 空襲』 防禦 砲撃  
 進撃 ゲリラ 撃破 撃退 退却 敗退」  
 \*戦争。\*大戦 \*戦 挑戦。』 軍 役 義戦 緒  
 戦」 休戦→.15  
 暴動 動乱 事変』 一揆 反乱」  
 \*軍事 \*防衛 自衛 国防 \*軍備』 防備 防  
 空 軍拡 駐兵」  
 征服 \*侵略 不可侵』 遠征 鎮圧 制圧 掃  
 蕩」 占領→.370  
**360 —』 建国 割拠」**  
 \*政治。自治 統帥 指揮 総理 管理 \*監督。  
 \*支配。』 統治 君臨 掌握」  
 \*革命 反逆』 謀叛 大逆」  
 専制 独裁 共和 \*封建 共産』 帝制 法治  
 立憲 霸道」  
 國務 行政 司法 \*財政 大藏 通産 農林  
 文部 外務 \*植民』 文武 国政 政務」  
 \*保安 治安 徴兵 警備』 公安 摘発 検査  
 逮捕 釈放」

訴訟 \*裁判。公判 処刑 追放 八分』捕物  
抑留 起訴 刑務 刑罰 刑 懲役 死刑  
差押』

1 設置 設立 国立 私立』新設 増設 公  
立 都立』

\*経営 運営』国营 公營 自營 主宰 主幹  
司会』

人事 動員 派遣 \*選挙。雇傭<sup>くひ</sup> 任命  
委任 除名 特派 日雇 解雇 罷免 減首  
首切り』 失業→. 331

2 \*教育。\*指導。感化 文教 養成 育成  
啓蒙 授業 教え 教化 發育 助長 教訓  
啓発 伝授』

\*要求。請求。強制 要望 要請』強要 賦課  
課税 免除 募集』 →. 352

命令。指令 \*禁止。彈圧 制限。統制 制約  
取締り 拘束 \*解放』訓令 号令 規制  
牽制 引締 制御 制止 自制 抑制』

違反 違憲』遵守 合法』

奨励 促進 勸告 警告 \*注意。』激励 煽動  
挑発 振興 誘惑 忠告 催促。』

\*援助 手伝い、支援 応援 救い、扶助』助  
力 助け 助成 後援 救済 救援 救護  
救国』

\*保護。擁護 \*保証 保障』守護 護衛 後  
見』 弁護→. 311

待遇。世話。厄介 看護 紹介。干渉』介抱  
周旋 介入 調停』

賞 賞讃 讚美』表彰 褒美。礼讃 叱り 侮  
辱 誹謗 罰。』

推薦 信任』推奨 信認 起用』 →. 361

礼。失礼。迫害 脅威』仕打ち 不礼 脅迫  
恐喝 威嚇 報復』 →. 3002

370 獲得』既得』

有 所有。\*独占 固有 手持 \*占領 確保』  
所蔵 領 持ち 所持』

預金』貯蔵 貯金。貯え』

\*経済。金融 インフレ 保険。』インフレーション  
デフレ 財務』

家計 \*予算。』経理 会計 採算』

収入。所得 支出。投資 融資 消費』収支  
未収 支弁 支払 払込 遣い、投機』

1 税金。税』関税 運上』

財産。\*資本。資産 \*資金 外資』基金 学資  
ガリオア』

\*金。\*金 金銭』現金 大金 外貨 ヤミド  
貨幣→. 401

株』国債 株式 籤』

価値。物価 米価 相場 価格 プリ コスト  
\*貸銀(貸金)』値段。値 値打ち 原価 平価  
高価 家賃 代金 運賃 代価 代 料金。』  
費用。\*費 経費 国費 負担 無駄。』 冗費  
食費 小遣い』

給与 給料。サラリー 恩給 手当』報酬 給  
付 俸給 月給 祿 ボーナス 無償 代賃』  
利子。』質 担保 マージン 利廻り』

2 利害 利潤 損。損害 \*利益。利己 不利  
\*為。』利 損益 損失 得。儲け 金儲け』  
軍需 特需 供給。注文。発注 補給』需要。  
供出 供与 調達』

取引 \*貿易。通商 \*輸出。\*輸入。』交易』  
交換→. 150

販売 購買 買付 仲買』売買 売却 小売  
ダンピング 払下げ 購入 買物 競売』

提供 頂戴 搾取 掠奪 侵害』授受 捧呈  
割愛 支給 給食 差入 接收 収奪 争奪  
横領 盗み 返し』

献金 礼 贈りもの』寄付 カンパ 募金 賄  
賂 祝儀』

賠償』貸借 貸付 貸出 貸貸 借入 借金  
借款 うわ借り 問借り 信託 返済』

\*貧乏。貧困 不況 不振 景気 繁榮 贅  
沢。』貧富 窮乏 富。節約。儉約。破産』  
配給 為替』仕送り 送金 配達。』

380 \*仕事。\*事業。』難事 仕上げ』  
労働→. 332 成功→. 343

\*産業。実業 \*企業 業務 \*事務。』生業 営  
業 請負 下請』

\*生産 増産 産』マスコ 操短』

職業。業 職 農業。農 漁業。商業。\*工業。』  
商工 現職 教職』 →. 24, 役→. 341

1 ——』農作 稲作 麦蒔き 田植 収穫。  
漁<sup>りょう</sup> 潜水 密猟 熊打ち 飼育』

商売。』商 商事 行商』

印刷。』製鉄 製鍊 伸鉄 紡績 発電 鑄造  
鋳業』

工事。\*建設 建築。再建 造船 \*設備。施設  
建』造営 新築 普請 採光』

開発 貯水』土木 敷設 防波 治水』

交通。航空 輸送 海運 郵便。』航海 運輸  
集荷 水揚』

厚生 衛生 治療 主治 医療 診療 外科  
手術 手当』注射 輸血 防疫 避妊 予  
防』

ジャーナリズム 編集 出版 版』特輯 刊行  
 創刊 初版 誤植 校正」  
 掲載 取材』連載」  
 出演 演出 興行』実演 主演 公演 再演  
 上映」  
 2 作業 工作 製造。製 製作 人造 修理  
 設計 装備 操作 撮影』造作 作成(作製)  
 人工 細工 修繕 裝飾。消防 解剖 採集  
 射撃 試射 射ち」  
 料理。掃除。』家事 裁縫。洗濯。虫干 磨き  
 3 扱い 使用 応用。\*利用。採用 行使』取  
 扱 日用 適用 活用 乱用」  
 処理 処分 処置 措置 対処 始末』手数。  
 手配」

## 1. 4

400 製品 商品 \*品。』品物。私物 土産。荷  
 物。重荷 産物。国産 名産 百貨 見本。  
 (模型。』

1 通貨 札。』貨幣 銀貨」

410 物資 資源 材料。原料。素材 料』材  
 教材 屑。』

1 紙。』用紙 半紙 色紙 紙片」

—』布地 生地 ナイロン ビニール」

—』木材 材木。板。丸太」

コンクリート。硝子。煉瓦。』瀬戸もの。セメン  
 ト 墓石 瓦。(金物。』

鉄鋼』鋳物 合金 地金 筋金 鉄骨」

燃料』ガス。マッチ。ガソリン。炭。(薪。』

—』肥料 堆肥 硫安」

—』蠟 ゴム。油。(糊。』

2 —』輪。管。筒 バイブ 釘。盤 パー  
 蓋。揚げ底 棒。片棒 コン棒 杖。ステッ  
 キ 竿。挺子 バネ。軸 栓。(ピン。ねじ。  
 柄。鞭。縁。』

3 網。注連縄』紐。繩。テープ 鉄糸 鎖。』  
 網。』網 法網」

420 —』衣料 呉服 綿 木綿。糸。織物  
 布。綿。布。絹。タオル 羅紗 毛布。毛皮」

1 衣服 着物。服 和服 洋服。』衣類 衣裳  
 服装 制服 紋つき 寝間着 水着 背広  
 モーニング」

2 袴。』コート 外套。オーバー 羽織。小  
 袖。上着。スカート ズボン。下着。シャ  
 ツ。帯。(チョッキ。襦袢。』

3 ポケット。』襟。裾。釦。(カラー。』

4 帽子。下駄。草履。靴。』甲冑 ヴェール

帽 冠 ソフト マスク ネクタイ。腹巻  
 手袋。足袋。靴下。わらじ 拍車」

5 蒲団(布団)。枕。』財布。手巾。夜具 シーズ  
 傘。(手拭。風呂敷。』

430 \*食糧(食料) 食物 主食 弁当。』常食 食  
 べもの 食べ物」

米。米 糠』米穀 穀物。ヤミ米」

1 飯』ご飯。握り飯 パン。そば 豆腐 コ  
 ンニャク あんころ スープ 天ぷら 焼鳥  
 餃子 漬物」

—』塩鮭 煮干し 蒲鉾 牛肉 ハム」

2 ミソ』塩。食塩 砂糖。醤油。バター。  
 (酢。』

3 —』菓子。ケーキ せんべい つまみ物」

4 茶。酒。ビール。』飲み物 飲料 コーヒ  
 ー。ミルク 酒 ウイスキー 洋酒」

煙草。』

5 薬。剤』薬 麻薬 煎じ薬 ヒロポン ズ  
 ルチン 酒精 爆薬」 毒→.562

6 線香』香 香水 白粉。口紅 石鹸。』

440 \*住宅 屋敷 宮 墓。』住居 社宅 御所  
 宮 邸宅 邸 城 城 古墳 渠。』

1 建物 家屋 ビル 塔。堂 食堂。小屋』  
 建 長屋 拜殿 本堂 校舎 講堂 アトリ  
 ニ 文庫 書庫 スタンド (倉庫。』

2 門。鳥居 玄関。\*部屋。\*室 間 座敷。  
 書齋 台所。廊下。床 炉 風呂。』垣 塀。  
 柵 浴室 広間 茶の間 居間 寝室 便  
 所。厠 縁 縁側。(垣根。』

3 土台 柱。支柱 壁。窓。』屋根。軒。破目  
 天井。電柱 梁 床。礎石 煙突。』

4 ベッド \*舞台 棚。』寝台 寝床。ステー  
 ジ 式台 欄干 階段。藤棚 戸棚。』

5 戸。扉 幕。畳。』ドア 雨戸 硝子戸 障  
 子。テント。天幕 揚幕 マット 土俵」

6 机。テーブル。椅子。』箆笥。鏡台 火鉢。  
 炬燵 梯子。』

450 道具。』財 私財 宝 国宝」

1 器 袋。籠。桶。』陶器 茶器 紙袋 箱。  
 木箱 硯箱 抽斗。鳥籠 靴。リュック 水  
 筒 角樽 バケツ。(俵。罎。』

罐。』瓶(罎)。壺 井 盃。コップ。皿。碗。  
 茶碗。鍋。薬罐。鉄瓶。杉箸 匙。俎板  
 盆。膳。(釜。箸。火箸。』

2 装置 筆。活字』具 器具 鉛筆。ペン。  
 コンパス ゴム消し(墨。インキ。印。』

鎌。針。』農具 鋏。工具 スパナ 枷 櫛。

- 指環 扇子。うちわ。箒。刷毛。(鉄槌。)
- 3 —『キレ物 ナイフ。庖丁。太刀 剣  
ナギナタ バリカン のこぎり。鋏。かみそり。  
(刀。刃。鎌。)
- 4 武器 \*兵器 爆弾 \*原爆 水爆 槍 銃  
鉄砲。ピストル 砲』 矢 玉。弾丸 砲弾  
魚雷 楯 小銃 大砲。バズーカ 引ガネ』
- 5 鐘。』 楽器 ベル ピアノ。笛。簫 ラッパ  
太鼓。』
- 人形。像』 玩具 おもちゃ。カルタ 面。ま  
り。サイコロ 仮面 傀儡 銅像 胸像』
- 6 看板。碑』 立札 名札 位牌 旗。国旗  
馬標 軍配 額。徽章。』
- 7 帳 手帖 \*本。票 レッテル』 切符。切  
手。葉書。ノート 札。ビラ 表紙。(帳面。  
名刺。)
- 8 燈火』 燈 電燈 提灯 ネオン (あかり。  
ランプ。)
- 9 カメラ』 レンズ 眼鏡。鏡。フィルム 原  
板』
- 460 ラジオ。テレビ』 テレビジョン マイク  
テレタイプ 無線』
- 1 \*機械。\*機 時計。』 計 モーター 汽筒  
ロボット ロケット ポンプ (はかり。物  
指。秤。)
- 2 車。\*車 タクシー バス トラック 戦車  
汽車。列車 鉄道。電車。』 土車 だし 輪  
タク ベダル ジープ スクーター エレヴ  
ーター 神輿』
- 3 \*船(舟)。船 船舶』 出船 艦艇 ポート  
ジャンク ヨット 漁船 工船 汽船。軍  
艦。帆。タラップ 甲板』
- 4 —』 航機 ジェット機 ヘリコプター  
単発 マタドール』
- 470 庭。公園。園』 宅地 市街 園 庭園 樹  
石 グランド フィールド』
- 農地 田畑 畑。広場』 田。田んぼ 耕地 桑  
畑 山林 墓場 砂場』 →. 522
- 1 道路 \*道(路・途)。道 踏切 橋。軌道』  
ストリート 通路 逃げ道 歩道 坑道 隧  
道 鉄橋 栈橋』
- 2 ダム 池』 港。港 堤 堤防 壕 壕  
溝 噴水 用水 水道。井戸。』

1. 5

- 500 刺戟。』
- 1 光 反映 闇 影。』 光熱 光線 反射。照

- 明 陰影 映像 人影 面影 幻影 火影  
スペクトル 艶。』
- \*色。色 黒 赤 緑。』 色彩 色どり 血色  
白 灰色 紅 緋 黄色 グリーン 金色  
(紫。)
- 2 音。』 音 響き 音色 靴音 砲声 ざわめ  
き』 声→. 3003
- 3 匂い。味。味』 香り 香氣 臭気 体臭  
残り香 味気 珍味』
- 510 \*自然。天然 物質。\*原子 分子 電気。』  
万有 五輪 三才 三体 電子 電流 電波  
引力』
- 1 鉄。水素』 金属。黄金 金。銀。銅。青銅  
鉛。亜鉛 カルシウム リチウム 青酸 (ア  
ルミニウム。かね。)
- 石。土。泥。石炭。石油。』 鉱物。鉱石 石  
岩。砂。土砂 原炭 油』
- 』 塵埃。カス 残滓 粉。捏粉 くず  
よごれ 垢 粘り 苦渋 (気体。液体。固  
体。ごみ。錆。)
- 煙。灰。』 焦げ 余燼 煤』
- 2 空気。雾田気 ガス。』 大気 熱気』
- 3 \*水。』 水 泡 海水 汚水 湯。蒸汽。氷。  
霜。湯水 汁。(露。)
- 4 洪水 地震。爆発。火。火事。放射 熱。』  
白熱 沸騰 凝結 結氷 なたれ 氾濫 高  
潮 化合 爆破 昇華 炎 火の玉 口火  
飛火 下火 焼夷 (雷。)
- 波。』 怒濤 うねり 潮 しぶき』
- 5 天気。\*風。嵐 台風 雲。霧。\*雨。雪。』  
気候。氣象 天候 秋晴れ 曇天 雨天 荒  
れ 風雪 北風 寒風 潮風 モヤ 梅雨  
霰 降灰 虹』
- 520 宇宙 空。太陽。朝日 月。衛星。地球。』  
天文 天。天地 空 上空 満月 新星 日  
食』
- 1 \*土地。地盤 大陸。洲 島。島 \*山。山  
丘 砂丘 坂。原 河川 \*川(河)。流れ 海。  
海 \*洋 沖。湾 海岸。温泉。』 地形 陸。  
陸地 半島 孤島 小山 峰 山脈。高台  
谷。沢 盆地 野。平野。野良 江 河口  
溪流 河床 湖。湖水 池。大洋 深海 公  
海 海峡 浦 浜 岸。 兩岸 崖 いずみ  
地下 (瀧。)
- 2 国土 林 森。』 風土 本土 漁場 林。松  
林 藪 田園 空地』 →. 470
- 南極』 北極 赤道 熱帯』



- 光景 景色。風景 背景』眺め 見晴し ラブ  
シーン』
- 550 性 セックス 牡。』雌雄 雌。同性 生物  
繊維』
- 1 植物。木。草。』草木 植木 立木 流木  
本草 藥草 野菜。』
- 2 小麦 苔。』南瓜 朝顔 サツマイモ 木犀  
オリーブ 柿。榊 わびすけ 葡萄。蜜柑。  
豆。蓮華 薔薇。林檎。キャベツ 桜。梅。  
桑 柳 芋。芦 麦。稲。竹。檜 巨杉  
松。ぜに苔 キノコ。海藻 ワカメ (桃。  
梨。蔞。麻。瓜。バナナ。菊。大根。なす。』
- 3 根。枝。葉。\*花。実。種。』幹。枝葉  
やせ枝 青葉 芽。花 蕾。穂。苗。樹脂  
(節。蔓。莖。果物。』
- 560 動物。\*人類』生き物 野獸 (獸。』
- 1 猿。鼠。猫。犬。熊 馬。羊 鳥。鷄。蛇。  
魚。虫。』山猫 狼 狂犬 走狗 狐 オッ  
トセイ 牛馬 牛。軍馬 野猪 豚。象 鳥  
類 珍鳥 おとり いんこ 鶯 燕 鶯 ト  
キ 鳩 山鳥 七面鳥 青大将 竜 蛙  
蛙。がま 魚類 雜魚 ヒラメ 鯛 鱈 マ  
グロ 鰹 鰻 鮭 鱒 鱒 金魚 ピラナ  
ひとで 昆虫 蚕。蚊。かげろう 蜻蛉  
蠅。蜜蜂 蟻。蟹 蜘蛛 牡蠣 みみず チ  
ブス菌 黴菌。(兔。蜂。蝶。貝。』
- 20 \*身体。\*身 裸。裸体 肉体』体格。全身  
遗体 母体 骨身』
- 21 \*頭。\*顔。\*目(眼・瞳)。頬。耳。鼻。\*口。  
喉(咽喉)。首。』ハゲ頭 首級 面 顔立ち  
笑顔 眼ぶた 眼玉 目玉 血眼 斜視 盲  
目 額。顎。耳目 唇。舌。咽元 嘴。』
- 22 \*胸。腹。肩。背中。背 腰。』上体 下腹  
肩身 尻 足腰 尾。蛇尾』
- 23 \*手。右手 左手 両手 腕。指。\*足(脚)。  
膝。』手足 四肢 片腕 拳 掌 片足 大  
股 翼 鵬翼』
- 24 頭腦 脳。心臓。血管』内臓 髓 肺。動  
脈 食道 胃。肝 腎臓 鰓』
- 25 骨。神經。齒。髮 髻。皮膚。肉。』骨格  
遺骨 義齒 象牙 甲 毛。白髮 金髮  
ちぢれ髮 禿 眉。あご髯 膜 肌 指紋  
羽根。(鱗。』
- 26 血。血液 \*涙。小便 蛋白 脂。』血球  
鼻血 嬉し涙 唾 乳。汗。尿 脂肪 ビタ  
ミン 毒。』
- 27 ——』卵。卵黄』

- 570 生命。生』命。人命 壽命 長寿 長生  
短命 命生 余命』
- 10 誕生 生 成長 生存』生死 生み 難産  
成育 成熟 育ち 老 芽生え 結実』  
→.157
- 11 \*死 自殺 戦死』死去 死亡 逝去 他  
界 没 死滅 再生 自決 枯死 討死 戦  
没 病死 殺生 射殺 屠殺 殺戮』
- 20 栄養 熱。息。消化。生殖 遺伝 混血  
腐敗』生理 脈 呼吸。青息 咳。排泄 発  
情 風媒 醱酵』 声→.3015
- 21 健康。』傷病 怪我 傷。傷 負傷 かす  
り疵 火傷 死傷』
- 22 病氣。病 中毒 出血 結核 \*風邪。』疫  
病症 炎 重病 水ぶくれ 頭痛 貧血  
卒中 癩 けい肺 癌 腫物 治癒』
- 23 ——』吃 びっこ いざり』

## 2.1

- 111 \*於く。\*拘わる \*掛る(懸・羅) \*掛ける(懸・  
梁)。\*関する 帰する \*従う。属する \*対  
する。\*就く。\*着く(付・憑・就) \*附ける \*以  
つ \*基く 役立つ \*由る(依・拠)。』因む』
- 2 \*似る。\*違ふ。異なる \*交る。即する 反  
する \*当る。応ずる あてはまる \*合う。』  
類する 似通う 兼ねる もとる 食違う』
- 3 \*着る。履く。擁する 包む。背負う 抱  
く。抱く 脱ぐ。とりまく 挟む。さし挟む  
蒙る からむ かぶる。かつぐ 抱える 掩  
う 帯びる 負う あびる。』着せる。纏う  
むきだす だきしめる 取り囲む くるむ  
かぶさる かばう 囲む。浴する 剥く。』  
\*含む 含める 交る』入り交る とりまぜる  
まじえる まぜる。』
- 120 \*ある(有・在)。\*居る。\*居る いらっしや  
る。ござる。候 控える』存する います  
おわす はべる ありふれる』
- 1 \*現われる(表・頭)。現わす。隠す。\*出る。  
\*出す。』呈する 隠れる。ひそむ 秘める  
暴き出す』
- 2 \*なる(成・為)。\*生ずる \*出来る。成り立つ  
出来上る \*興る(起)。\*起きる。\*おこす。  
湧く』ひき起す わき起る まきおこる』  
出来る→.13 生れる→.55
- 3 作り上げる うみだす うちだす つぶれ  
る つぶす。』作り出す→.38
- 4 \*残る。\*残す。』居残る 焼残る』

- なくなる。\*失う。なくす。尽す 尽きる 絶える。亡びる。』失せる 絶する 亡ぼす。逸する 食い尽す」
- 消える。消す。』消え失せる 消え去る 打ち消す 取消す」
- 5 保つ 除く 捨てる。\*取る。\*払う。』もちこたえる 居据わる 取り除く 取り払う 出払う 振りすてる 投げ出す さしおく 省く。』
- 13 整える 備える 揃う。欠く 欠ける あらす』揃える。損う 損ずる 荒果てる 狂う。(乱す。』
- 値する \*不可<sup>いけ</sup>ナ<sup>イ</sup>。\*出来る。兼ねる 利く。たまらナイ。』叶う 似合う 釣り合う。行き届く 混む すたる 緩む。(緊まる。差支える。』
- 1500 \*変える(換・代・替)。\*変る。化する』変ずる 化ける なり行く」 帰する→.11
- 01 改める。直す。切りかえる』生れ変る 取り替える 組みかえる 立ち直る」
- 02 \*始まる(初)。\*始める。\*止める。やむ。\*済む。\*しまう。\*終る。終える 片づける。絶つ 果す \*出す。休む。』初める とりかかる 打ち切る 済ます 片づく 果てる」
- 03 \*続く。\*続ける。引き続く \*くりかえす。』降り続く」
- 1510 \*動く。動かす。振る。ゆすぶる 振う 止まる 止める 停まる。』揺れる。ゆらく 打ち振る 震える。ぐらつく 立ちどまる 止める。』
- 走る 飛(跳)ぶ。流れる。流す。引きずる』飛ばす 吹き飛ばす ほとぼしる はずむ 滑る。漂わす はねる。』 歩く→.33
- \*廻る。繞る まわす。歩き廻る』めぐらす 出廻る 駆けまわる ほっつく」
- 11 \*立つ(建)。\*立てる(建)。打ち立てる 起ち上る 起きる。据える 傾ける 倒れる。坐る。横たわる 投げる。はなつ \*掛ける。釣る。下げる。釣れる ささえる。\*受ける。構える \*置く。収まる』突っ立つ 傾く。かしげる 倒す。ひざまずく 這う。伏せる 裏がえる のめる 転ぶ。ころがる。ころがす。ひっくりかえす。くつがえる 投ずる 投げかける 放る のす 埋まる。うずめる。浸る くぐる 敷く。はめる。凭れる ひっかかる」
- 20 \*向う。向ける。向く。』立ち向う 転ずる 逸れる そむく。そむかれる」 →2.17
- 21 移る。うつす \*通る。\*通す。\*渡る(渉・亘)。わたす。もたらす \*伝える。』引っ越す 伝わる。はやる。手渡す 寄越す。吹き送る」
- \*出掛ける \*たつ。発する \*達する \*至る \*着く。届く。追いつく \*及ぶ 先立つ』走りだす 届ける 立ち至る 押しかける さまよう はやる。』
- 迎る 越える 越す。追う。\*過ぎる。\*通す。』追いかける かり立てる のりこえる 通りすぎる 通り抜ける 切り抜ける ずぬける 横切る」
- 22 \*進む。\*進める。おしすすめる \*来る。来る 去る \*行く。いらっしゃる。参る。\*帰る。帰す もどる かよう。さかのぼる 逃げる。のがれる』退く すぎ去る 引き返す 追い帰す 持ち帰る 舞い戻る ひきもどす」 避ける→.352
- 153 \*出る。乗り出す 飛び出す』さしでる 流れ出す 逃げだす 溢れ出る 抜け出す はみ出る」
- \*出す。追い出す 差出す 取り出す 持ち出す 吐く。』おし出す 繰り出す 突出す 連れ出す ひき出す 掘り出す」
- \*入る。入る \*入れる。採り入れる 汲む。組み入れる 引き入れる 踏み入れる」
- 乗り込む 飛び込む 逃げこむ 割りこむ」
- つっこむ 追い込まれる まきこむ 持ち込む 籠める 閉じこもる 射ちこむ 送り込む 注ぎ込む つめこむ 吹きこむ 投げ込む 込む。』
- 抜ける 抜く。つまる。つめる 注ぐ 差す 洩れる。洩らす 泌みる』抜かす 引抜く 抜きとる 浸み亘る」 挟む→.113
- 154 上る(登・昇)。下る 下す』
- \*上る(举)。上げる(举・擡)。かかげる 引き揚げる』持ち上げる ささげる 汲み上げる すくいあげる つみあげる 吊し上げる 這いあがる はね上る」
- \*下る。下げる。』掘り下げる ぶら下る 引き下げる」
- 落ちる。落す。陥る』落ち込む けおとす つきおとす」
- 降る。』ふり注ぐ」
- \*載る(乗)。のせる。』のっかる」
- 降りる。降ろす。垂れる』こぼれる」

浮ぶ。沈む。』 浮び上る 浮出す」  
 1550 組む。解く。はずす。』 乱れる 散る。散らす。撒く。ぶちまける 編む。組合せる 組立てる もつれる 解ける。ほぐれる 綻ばす はずれる。』  
 伴なう \*連れる。\*付く。\*付ける。』 率いる 引出す」  
 並ぶ。並べる。重なる。重ねる。積む。沿う』 立ち並ぶ 列ねる 積もる。添える。はぐれる」  
 寄る。寄せる。迫る 近づく』 引きつける 片寄せる おしつめる かけよる 近よる 遠のく」  
 貼る。\*付く。\*付ける。』 くっつける とりつける とりつく 飛びつく すがる」  
 繋がる \*結ぶ。結びつく 結びつける しばる。』 結う 繋ぐ。くくる しばねる」  
 \*離れる。分ける。割る。』 放す。ふりきる さく へだてる 介する 割れる。』  
 \*集まる。\*集める。纏まる。纏める。\*合う(会・逢・遭)。合わせる。出逢う 別れる。』 よび集める つのる 取り組む ゆきあう すれちがう ずらす」  
 51 開ける \*開く。明ける。つぶる』 あく。きり開く しまる。閉じる。封ずる」  
 1560 触れる。触る 接する』  
 \*打つ(撃・射)。叩く。\*当る。あてる。ぶつかる』 はたか なる 突っかかる」  
 61 押す。抑える。押しつける 突く。』 おさえつける 圧する 押し合う 押しのける 突っかける。』  
 ——』 摺る こする」  
 \*引く(曳)。ひっぱる』 挽ぎ取る ひねる」  
 62 はばむ 詰まる。行き詰まる 貫く 防ぐ。』 妨げる。喰いとめる つかえる よどむ」  
 \*張る。』 しめる。ひきしめる 握りしめる ゆるめる。』  
 1570 曲げる。折る。巻く。』 形づくる 曲る。折れる。屈する たたむ。波打つ ちぢれる ゆがめる しかめる (そる。ねじれる。ねじる。』  
 崩れる。破る。』 崩す。崩れ落ちる 掘りくずす 打破る 踏み破る 傷く 破れる。』  
 壊れる。潰れる。つぶす』 こわす。ぶちこわす 砕ける。砕く。おしつぶす ふみにじる くじく ひしがれる」

削る。\*切る(斬)。切れる。刺す。』 刻む 掘る。はげる たちきられる 喰い切る 切り抜く 刈る。』

——』 めくる むくれる」

71 増える。ふやす 増す 加わる \*加える。減る。減らす』 つけ加える 減ずる」  
 伸びる。伸ばす。』 延べる 引伸ばす 差のべる 縮める」

拡がる。拡げる。』 ひろめる 狭める」

高まる 高める 深める』 聳える 深まさる ふくれる」

——』 早める 古びる」

ためる。』 長ずる 強まる 弱る 昂ずる」

満ちる 満たす 溢れる』 滲える 余る。切り捨てる 凌ぐ 上廻る 手控える こぞる 引くくるめる」 →.19

16 際する 臨む 瀕する』 位する」

\*経つ。経る \*過ぎる。過ごす』 永らえる」  
 急ぐ。遅れる。』 せく はかどる 手間どる」  
 次ぐ』 相次ぐ」

17 ——』 面する 隣る 偏する」 →.152

19 限る。極まる 極める \*過ぎる。足りる。』 →.157

\*優れる。劣る。値する』 まさる。秀でる」

## 2. 3

3000 \*感ずる。気付く 眠る。寝る。酔う。構う』 疲れる。痛む 覚める。覚ます。夢みる。寛ぐ 狂う。血迷う 酔っぱらう 飽きる。』

01 味う \*驚く。驚かす。\*喜ぶ。楽しむ。

苦しむ。悲しむ 悩む 悩ます \*恐れる。

焦る おびやかす 怒る。\*困る。慌てる。

おちつく。\*(かわい)がる』 恐れ入る 窮する

憂える まごつく 案ずる 謹む。待ちこがれる 呆れる 懲りる 耽る 照れる こだわる」

02 好む \*愛する 親しむ 嫌う。憎む。』 たしなむ 慕う ほれる なつかしむ 甘ったれる 懂れる いやがる 怨む。慰める。惜しむ。貪る 尊ぶ あがめる (好く。』

03 \*笑う。\*泣く。』 微笑む 歎く むずかる はしゃぐ 泣きじゃくる 咆える がる」

3010 \*努める(働・勉)。がんばる 堪える 欲する 願う。望む。思い切る 諦める。祈る。期する \*待つ。\*求める。省みる』 励む。励ます。こらえる ためらう たじろぐ 憚る 見合せる 志す 祝う」 →.33

- 11 誇る。威張る。』 奢る 思いあがる 己惚れる 恥じる へり下る ぶる すます とぼける 馬鹿げる」
- 12 慣れる。』 習う。待ち構える 則る \*学ぶ 覚える。\*思い出す \*忘れる。』 修める 置き忘れる 思いおこす」
- 20 \*思う。存ずる \*考える。\*信ずる。疑う。迷う。』 思いつく 思いがける 思い浮べる 思い込む 思いたつ 思い直す 危まれる」 \*知る。\*知れる \*わかる。解する 解く。\*認める。心得る』 覚る わかりきる わきまえる」
- 21 \*比べる。比する \*選ぶ。\*採りあげる \*要する(に)』 見比べる 照し合せる 例える。えりわける にらみ合せる」
- 22 試みる。調べる。計る。数える。』 試す。算する みつもる 差引く 裏づけられる さばく」
- 目指す 探す。探る 見出す 見つける。見のがす』 めがける 捜し出す 見当る 見つかるとる 見失う 見受けられる みなす」
- 23 愚ぶ』 断ずる かんぐる 察する 見ぬく 卜す 否める」
- \*決まる。\*きめる。決する 定める』 定まる」
- 3 あやまる まちがう。』 まちがえる。取り違える 正す」
- 』 企てる 講ずる もくろむ たくむ」
- 3090 \*見る。\*見える。見上げる 見下す 眺める。見つめる ねらう。見かける 睨む 覗く。』 仰ぎ見る 見まわす 見渡す 眺めやるとる 見入る 見守る 睨みつける みはるとる」 \*見せる。\*示す。指す。』 →22
- 1 聞く。聞かず 聞える。伺う』 承る 聞き入る 伝え聞く 耳馴れる 聞きかじるとる(嗅ぐ。』
- 310 \*言う。おっしゃる。\*申す。申し上げる 言いかえる 黙る。』 奏する 言い出す 言い張る 申し添える 言い古す」 \*書く。しるす』 印する 書きつける 認める 書きたてる 題する」 \*呼ぶ。称する 名づける』 唱える 名のるとる 名ざす」
- 表する \*うたう。叫ぶ となる』
- \*述べる』 言い現わす となり込む 訳す」
- 』 申し渡す 仰せつかる 宣せられる」
- \*読む。』 関する 読み取る 読み通す 読み返す 読みふける」
- 1 \*伝える。伝わる。\*通ずる 知らず 知らせる。報ずる 告げる \*話す。\*語る 物語るとる 喋る 説く 講ずる』 談ずる 言いふらす まくしたてる 呷く 話しかける 呼びかける」
- 問う 訊ねる \*答える(応)』 糾す」
- 論ずる』 弁ずる やじる 評する 誇る ののしるとる」
- 320 写す。描く』 描き出す 劃する」
- 332 \*働く。勤める。かせぐ 休む。』 怠るとる 怠けるとる。』 →.301
- 3 暮す。営む』 携わるとる」
- \*食う \*食べる。』 食す 召しあがる 喰い込む 食わす」
- 着る。』 →.113
- \*住む。泊る。』 住み慣れる 住みつく 宿るとる —』 拜む。拜する 葬るとる 祭るとる。祀られる 奉ずるとる 祝う。』
- 9 遊ぶ。騒ぐ。』 暴れる (たわむれる。』 すわるとる。\*歩く。歩む 踏む。寝るとる。起きるとる。舞う 握るとる。握む。\*持つ。』 坐す うづくまるとる 躓くとる 躍るとる。蹴るとる。泳ぐ。いじるとる 摘む 揉む しぼるとる 拾う。練るとる かきまわす かきむしるとる 撫でるとる。』
- 走る→.151, 打つ→.156
- 振り返るとる とらえるとる とらわられる』 もがくとる 振り向くとる 醸えすとる つかまるとる つかまえる。』
- \*飲む。吸う。吹く。飲み込む 吐く。嘗めるとる。うなずく』 嚙む。吸い込む ふかすとる 喘ぐ (鼻を)かむ」
- 342 \*する。\*される \*させる。\*なす(為・成) \*至す。\*なさるとる。\*行う。演ずるとる やるとる。犯す 催す』 仕るとる 遊ばせられる」
- 3 とげるとる 果す』 しくじるとる やりきれる」
- 351 訪ねるとる 訪れるとる 招くとる 待つ。迎えるとる。\*会う。別れるとる。』 付き合う 訪う 弔う 辞する 呼び出す もてなす」
- 2 裏切るとる 訴えるとる。\*頼む。頼るとる。任せるとる。委ねるとる \*許す。応ずるとる 断るとる。拒む』 約す 誓う 申し込む 申し出るとる 聞き入るとる 交わす 報いるとる 仕えるとる (取次ぐ。』
- 』 せがむ 責めるとる 乞う」
- .36 求める→.301
- 3 争う。勝つ。敗けるとる。敗れるとる。\*戦う。襲う \*守る(護)。避けるとる。免れるとる 破るとる。』 競う 打ちかつ 攻めるとる 挑む やっつけるとる 襲いかかるとる 脱するとる (よけるとる。』

逃げる→.152 防ぐ→.156

360 —』治まる。治める。司る 取締る 任ずる 雇う。』

2 \*教える。導く さそう。』教わる』

強いる 命ずる 禁ずる 制する 従う。促す 勧める。』課する 申し付ける』

止める→.151 求める→.301

手伝う。救う 助ける。』助かる』

養う。』力付ける』 飼う→.38

替める。はげます』叱る。警める 罰する 謝る。咎める』 慰める→.3002

誤魔化す だます。』崇る 偽る あざむく』

—』憐む からかう あまやかす いじめる。恥かしめる』 構う→.300

—』おどす 嘲ける 媚びる へつらう とりいる つけいる』

370 \*得る。\*取る(執・採・撮)。\*持つ。携える 占める 有する \*要る。』とりつく 受持つ 蓄える 富む』 とりあげる→.302

2 納める \*払う。支払う』費す』

儲ける』儲かる 益する』

\*売る。売れる。\*買う。』売り出す 売りつける 買取る 買入れる 卸す』

\*受ける。受取る 受入れる 引受ける 奪う。』引取る かすめる 差上げる』

\*与える。譲る。\*贈る \*あげる。\*呉れる。\*下さる。給う 恵む \*やる 捧げる \*もらう。\*頂く。』授ける 奉る 施す 供する 供える 給わる 托す』

盗む。まかなう』博する 賭ける つぐなう』貸す。借りる。預る。返す。』貸出す 借出す 借り受ける 踏みたおす 預ける。配る。届ける。

—』栄える 衰える 賑わす』

380 \*作る。作り出す 設ける』こしらえる 仕かける』 うみ出す・作り上げる→.123

運ぶ。もたらす 送る。』

かざる。』あしらう 装う しゃれる』

—』洗う。縫う。編む 織り出す 磨く。鍛える。(織る。』

拭く。塗る。』拭う ぬりつぶす (掃く。』

飼う。』耕す。植える。植えつける 蒔く。漁る かもす 罫だす』

築く』築きあげる』

扱う。取扱う。\*使う。\*用いる。』使い古す あやつる (漕ぐ。』

勉める』乗ずる』

### 2.5

50 光る。輝く。照らす。映る。目立つ 汚れる。』照る。ひらめく 映ずる ぼける 色どる 黄ばむ 青ざめる すきとおる ちらつかせる 汚す。汚す 染める。』

鳴る。』鳴らす。轟く 響く。きしむ』

—』匂う 薫ずる。』

51 —』さらされる こわばらせる ねばる 渋る 薄れる 澄む 濁る。濁す』

じみる』しみる しみこむ にじむ うるむ

乾く。干す 濡れる。濡す。うるおす まみ

れる 溶ける。(乾かす。湿める。溶かす。』

晴れる。吹く。』荒れる 吹き荒れる(曇る。』

燃える。灼ける。焼く。煽る』燃やす。焚く

燃えたつ くべる 煮る。沸く。沸かす。冷

える。(冷やす。焦げる。煮える。』

暮れる。明ける』明かす』

—』冴える 凍る。凍える 煙る』

55 \*生きる。生かす \*生れる。生む。\*死ぬ。

殺す。育つ。育てる。はらむ』生き残る おし殺す 枯れる。老いる ふける 肥る。瘠せる。』

—』またたく くらむ 涙ぐむ しゃがれる 咳き込む 噎せる』

餓える 害する \*治す。』病む 治る。しびらせる 毒される』

(肝を)かく。生やす 咳く。』生える。角組む

実らせる 繁る。萎む 腐る。腐らせる』

### 3.1

10 \*こんな。斯よう \*斯う。\*斯く 斯る』これしき』

\*そんな。\*そう。\*然る さる』さ 左様』

あんな。ああ』

\*どんな。\*どう。如何 如何。』いかが』

と 動云云』そうこう』

\*いわゆる \*或る。望る』今』

特定 \*殊に \*特』

端的 \*別 ほかなる』

本格 準』

真 \*本当。正に \*正しい。正当 不正 不当

正常 正式。\*当然。あたりまえ』真。リア

ル 切実 まさしく 本式 まとも』

専ら』偏え ひたすら』

個々 一々 \*夫々 \*各。』

主 おもに 主要』

- 11 密接 \*直接。間接。緊密 ばらばら \*共。  
一斉 \*一緒。』 雜然 渾然』  
\*何故。\*合理』  
\*同じ。\*同様 同 \*非』  
まるで あたかも \*如し らしい。\*みたい  
\*丁度。ちゃんと』 均しい。均等 対等 異  
さながら 案の定』  
乍ら。儘。\*通り』  
\*的。』  
共通 反対。相 \*互。反 対。』
- 12 \*無い。\*無。珍しい。稀。\*不。』 虚しい  
儂い からっぽ 未曾有 不可欠 故(空。』  
\*決して。\*全然 一向 ちっとも 到底 とて  
も。\*なかなか。\*ほとんど。』  
\*可能 容易 易しい。易い。むずかしい。難  
い にくい。困難。有効 便利。無理。』 た  
やすい。不能』 →.37  
仮。偶然。必然 必至 \*絶対。\*必要。』 必需』
- 13 \*相。\*様。\*虚 簡単。複雑。微妙 面倒。』  
ややこしい』  
\*普通。平凡 並 碌 \*一往(一応) 一般。変。  
妙 奇妙 おかしい。馬鹿。\*重大 深刻  
特殊 特別。独特 とんだ』 並々 非凡  
格別 とりわけ』  
\*色々。いろんな 様々 種々 \*諸 単純。一  
様』 とりどり 単一 単調』  
\*良い(好・善)。良さ 宜しい。好 結構 \*悪  
い。不良』  
ふさわしい 適當。適切』 絶好 うってつけ  
最良 怪しからぬ 頃合い 種々』  
\*立派。優秀 見事 すばらしい \*駄目。』 上  
乗 最低 劣等』  
\*安全。大丈夫 危い。危うい \*危険。』 無事。  
無難 つつがない』  
——』 安らか 平靜 平穩 安易 不穩 険悪  
由々しい』
- 14 \*強い。強さ 力強い 強大 強力 有力  
弱い。弱さ 弱体 \*烈しい。\*ひどい。しっ  
かり。』 根強い 強固 強烈 無力 貧弱  
脆弱 凄い 物凄い』
- 15 おのづから 活潑 盛ん。どンドン じっと  
そっと ぱっと』
- 16 \*よく 度々 屢々 \*常。頻り 続々 時々』  
往々 たま しょっちゅう 頻繁 のべつ  
年中 再三(毎。』  
直ち 忽ち \*直ぐ。取りあえず 』 \*やが  
て』 即座 直』
- \*急。俄か いきなり 突然。突如 ふと』 出  
しぬけ 勃然 忽然 一躍 急激』  
\*次第 段々。徐々 ゆっくり。次々』 おもむ  
ろ 漸次 逐次 着々 なし崩し』  
\*暫く。\*既 もはや \*もう。\*曾て(嘗) かね  
て 予め 元来 もとより』 かねがね 夙く  
本来 もともと』  
減多 \*まだ。未だ 未 漸く。やっとなし崩し。  
\*結局 到頭。いよいよ。』 ついぞ まだまだ  
はや』 珍・稀→3.12  
新た \*新 \*始めて。今更 現 次 今。』  
(明。』  
久しぶり ぶり \*再び \*再 \*また。つい  
依然 \*まず。たまたま 果して』 あいに  
く。』  
恒久』 無限 とこしえ 久しい』  
\*早い(速)。急速 遅い。』 速か 敏速 手早い  
素早い 遅鈍 スロー あわたたしい』  
\*新しい。新 \*古い。』 新規 新鮮 新興 新  
進 古 古めかしい』  
幼い。\*若い。』 うら若い 年頃』
- 17 \*長い。短い。長』 長 長たらしい 短』  
遠い。遙か \*近い。』 ま近 身近』  
\*高い。低い。低 \*最高 最低』 小高い 高ら  
か』  
\*深い。浅い。』 深々』  
\*広い。広汎 狭い。』 広大 洋々 狭苦しい  
窮屈』
- 18 \*大きい。大。\*大。巨大 龍大 過大  
\*最大 大きさ 中。\*小さい。小。\*小。こ  
まかい。』 極大 ささやか 群小 かすか。  
ハンディ』  
うすい。』 厚い。分厚い』  
——』 太い。細い。筆太』  
重い。軽い。重』  
薄い。』 濃い。』  
真直ぐ。』 丸い。平たい 平。水平。いびつ  
峻しい。平行。』  
鋭い。』 鈍い。尖鋭 円滑 粘っこい (滑ら  
か。』  
堅い。』 やわらかい。柔軟 荒い。』  
——』 燎乱 点々 濛々』
- 19 \*単 唯一 \*両。\*総』 単独』  
\*多い。\*沢山。豊富 莫大 無数 無限 豊か  
数々 うんと \*少ない。乏しい \*僅か 少  
ささか 少々 満員 一杯。余計』 多大 甚  
大 無量 零細 過多 幾多 年上 年下』

\*完全。\*全く。すっかり 悉く \*全 \*あらゆる』まるまる 逐一 (片。』全然→4.12  
 \*大体。ほぼ \*約 おおよそ \*十分。\*ほとんど。』一通り あらかた かれこれ 辛うじて』  
 \*非常。\*大変。大した 頗る 甚だ。甚だしい  
 \*極めて 極く 至極 \*まこと。\*実 極端  
 過度 超 あまり とても。馬鹿。』大層  
 いと 濫り むやみ 無性』  
 \*最も。最 \*一番』無数 無上』  
 \*もっと。ずっと \*一層。\*より \*更。\*益々。  
 なおさら』一段』  
 \*相当。随分。\*かなり。\*大 余程。大分。\*少  
 し。\*ちよっと。稍 ほん \*少なくとも せ  
 めて せいぜい \*あまり \*唯(只・たった。』

## 3.3

300 痛い。』眠い。かゆい。  
 ——』敏感 鋭敏 過敏』  
 びっくり はっと』がく然』  
 楽。呑気。』のんびり 気楽 固苦しい 重苦  
 しい 恍惚』  
 楽しい。愉快。嬉しい。面白い。可笑しい。』  
 快い 痛快 悦ばしい』  
 苦しい。辛い 恐ろしい。恐い 悲しい。寂し  
 しい。哀れ』センチメンタル 切ない 悒鬱  
 悩ましい わびしい 気強い 心細い 悄然』  
 ほっと』  
 \*欲しい。望ましい \*度い。』思わしい』  
 惜しい。残念。情ない』くやしい 無念 あた  
 ら』  
 親しい。懐しい。可愛い。可哀そう。気の  
 毒。』心安い 親愛 親密 いとしい ほほ  
 えましい 傷ましい 笑止』  
 好き \*嫌。嫌い』好ましい 大きらい にくい  
 恨めしい 呪わしい 羨ましい。』  
 恥かしい。』照れくさい 汗顔』  
 ありがたい。』  
 みじめ 悲惨 惨憺 悲愴 凄愴 暗澹 陰惨  
 散々』  
 1 ——』利口。賢明 愚か。無智 幼稚 馬  
 鹿。(賢い。』  
 巧み \*うまい。下手。まずい。』上手。堪能  
 巧妙 拙劣』  
 偉い。偉大』聖 かがやかしい 奇特 不屈  
 極悪 浅ましい 卑しい』  
 正直。真面目。熱心。真剣 率直 素直。』堅

気 善良 あどけない 純真』  
 おとなしい。』穏和 おだやか。温厚 柔和  
 しとやか つつましい 快活 陽気 奔放  
 過激 自墮落 淫蕩 ヤボ 言いなり』  
 厚い(篤)。得意。』円満 重厚 軽薄 浅墓 浅  
 薄 軽々しい 生意気。敬虔』  
 積極。消極。忠実 強引 敢て あくまで わ  
 ざわざ 折角。』極力 着実 刻明 そんざ  
 い 粗野 がさつ 一辺倒 わざと しぶし  
 ぶ 殊更』  
 ——』偏狭 孤独 頑固 強情 気短か』  
 堂々』凛乎 毅然 潑刺 颯爽』  
 大胆 平気。慎重 冷静』敢然 沈着 小心さ  
 腑抜け』  
 ——』潔癖さ さもしい 陋劣 吝嗇 やぶさ  
 か 貪婪』  
 勝手。』ずるい。狡猾 あつかましい 図太い  
 あくどい わがまま。』  
 逞ましい』猛い 勇猛 勇敢 無謀 向う見ず  
 タフ 若々しい 粗暴 兇暴 野蛮 (勇ま  
 しい)』  
 ——』尊大 不遜 僭越 傲慢 (謙遜。』  
 ——』卑怯 卑屈 卑劣 恥しらず』  
 やさしい。丁寧。親切。嚴重 きびしい。公正  
 公平。』手厚い 懇切 非情 冷淡 よそよ  
 そしい 残酷。あこぎ 公明 寛容 寛大』  
 親切→1.30  
 ——』やかましい うるさい。辛辣』  
 本気 懸命 必死 夢中』命がけ むき 躍気  
 等閑 無造作』  
 2 詳しい。詳細 つくづく』精細 精密。粗  
 雑 大ざっぱ つよさ 周到』  
 \*確か。的確 確実 正確。明確。』確固 不確  
 か うやむや ぼんやり。』  
 ——』敵か 敵肅 いかめしい 気高い 神  
 聖。神秘』  
 あやしい 不思議。』不可解 怪奇 奇異 奇  
 怪 架空 滑稽。でたらめ』  
 案外 意外 未知 あいまい』存外 思い通り  
 あやふや 疑わしい』  
 31 ——』饒舌 黙々 寡黙 口下手 口ぎたな  
 い 口頭 謬々 無断 実しやか』  
 大げさ 極秘 こっそり 公然』露骨 内諾  
 筒抜け 暗々』 秘密→1.10  
 33 ——』古風 モダン ゴシック』  
 \*有名。著名』名 知名 名高い。』  
 華やか 素朴』派手。豪華 花々しい 高尚

俗 地道 地味。質素。簡素 粗末。みずぼらしい」

めでたい。』

36 平等 公式 公共 共同』古参 父無し  
親がかり ひもつき」

37 \*重要 \*大切。貴重 有効 有利 不利 無駄。いたずら \*高い。\*安い。詰まらナイ。』  
貴い。肝腎 大事 有用 便利。有益 (不便。』

贅沢 貧しい。忙しい。不振』富裕 多忙 賑やか。セチ辛い」

### 3.5

50 明るい。\*明らか。明白 著しい 暗い。\*はっきり。』明瞭 ほのか 朦朧 暗黒 薄暗い 顕著 鮮か ありあり あらわ(透明。』  
露骨→.31

白い。黒い。\*赤い。青い。』有色 真白い 真黒 赤々 真赤 真蒼 (黄色い。』

\*美しい。美しさ きれい。輝かしい』麗わしい 醜い。醜悪 グロテスク まばゆい』  
静か。やかましい。』静寂 森閑 音なし 騒々しい」

\*旨い。甘い。まずい。』おいしい。美味 塩辛い 渋い 辛い。苦い。しつこい。(酸い。』

臭い。』香しい かびくさい ふんぶん」

あっさり さっぱり』すがすがしい (清い。』

寒い。冷たい。暖い。暑い。熱い。』寒冷 清涼 涼しい。冷え冷え 温味 晴朗 多湿」

汚い。』清潔。清浄 不潔 薄汚い」

固い』

55 健全 新鮮』丈夫。旺盛 健啖 生。生々しい 生き生き 致命 先天 多産 未熟 無害」

### 4.1

110 \*だ \*で です』

1 \*および \*かつ \*しかも しようして  
\*そして。並びに どころか』

2 \*したがう \*そこで \*と』

3 雖ども が けれども。\*しかし。』\*ところが (ところで)』

4 \*或は \*また。\*または。もしくは』

5 \*いわば \*すなわち。\*例えば。\*つまり。』

6 ただし \*なお。尤も』

7 さて そもそも』

### 4.3

300 ああ おお さあ』万歳。』

1 \*おそらく \*必ず。きっと。大抵。多分。  
\*まあ まさに まさか 無論 \*勿論。』

2 \*一体 \*かえって。第一 とかく \*とにかく。\*ともかく \*むしろ』

3 さすが なるほど \*はたして \*やはり。』

4 是非。どうか どうぞ。なるべく。』

5 いわんや たとい。まして \*もし。\*いくら。』

31 いいえ。否 \*否 うん ええ そう ね  
おい』はい。』

35 \*御。御 \*御。御』  
やがる』

(終)



## 分類項目一覽

前掲の分類語彙表で、分類された各グループが大体どのような意味の範囲にはいるかを、簡単な見出しのことばで示す。ここに見出しとして掲げたことばは、調査で得られたものには限らない。

## 1. 名詞

## 1.1 抽象的關係

- |       |          |       |       |       |       |
|-------|----------|-------|-------|-------|-------|
| 1.100 | コソアド     | .1520 | 過程・経路 | .1642 | 過去    |
| 1     | 物事・項     | 1     | 推移・移動 | 3     | 将来    |
| 2     | 現象・真     | 2     | 進行    | 50    | 順序    |
| 3     | 自体・別物    | 30    | 出入り   | 1     | 終始    |
| 110   | 種類       | 40    | 上下・昇降 | 2     | 新旧・前後 |
| 1     | 関係       | 50    | 離合    | 3     | 歷程    |
| 2     | 同異       | 1     | 開閉    | .1700 | 空間    |
| 3     | 相互       | 60    | 接触    | 1     | 地点    |
| 120   | 有無       | 1     | 圧迫    | 2     | 範囲    |
| 1     | 出現       | 2     | 障害    | 3     | 境界    |
| 2     | 生成       | 70    | 変形    | 10    | 方向・方位 |
| 3     | 成立       | 1     | 増減    | 1     | 左右    |
| 4     | 存在・消滅    | 2     | 発達    | 2     | 中外    |
| 5     | 必要・保存・廃棄 | .160  | 位置・場合 | 20    | 面・側   |
| 130   | 状態       | 10    | 時     | 1     | 内外    |
| 1     | 外観       | 1     | 都度    | 30    | 付近    |
| 2     | 内容       | 20    | 期間    | .180  | 形     |
| 3     | 性質       | 1     | 時代    | 1     | 枠     |
| 4     | 秩序・調和    | 30    | 年     | .190  | 量・数   |
| 140   | 力        | 1     | 季節    | 10    | 数     |
| 1500  | 作用・変化    | 2     | 月     | 1     | 多少    |
| 1     | 改新       | 3     | 週間    | 20    | 単位    |
| 2     | 開始・終了    | 4     | 日     | 30    | 全体・部分 |
| 3     | 継続       | 5     | 昼夜    | 1     | 過不足   |
| 10    | 運動       | 40    | 古今    | 2     | 程度    |
| 1     | 転位       | 1     | 現在    |       |       |

## 1.2 人間活動の主体

- |       |       |       |          |      |             |
|-------|-------|-------|----------|------|-------------|
| 1.200 | 自・対・他 | .2140 | 親類       | .241 | 職業          |
| 10    | 人間    | .220  | 相手       | 10   | 専門的・技術的     |
| 1     | 神仏・精霊 | 1     | 主客       | 1    | 支配的・管理的・書記的 |
| 20    | 男女・老少 | .230  | 国民・市民・住民 | 2    | 販売          |
| .210  | 家族    | 1     | 人民       | 3    | 農・漁・猟・伐木    |
| 10    | 夫婦    | 2     | 君主       | 4    | ——          |
| 20    | 親     | 3     | 社会階層     | 5    | 運輸          |
| 1     | 子     | 4     | 人物       | 6    | 生産工程        |
| 30    | 兄弟    | .240  | 成員       |      |             |

§ 4

- .2417 保安サービス
  - 8 サービス
  - 9 反社会的
- 2 軍人
  - 3 長
  - 4 相対的地位
  - 5 臨時的地位
- .250 公私
  - 1 家
  - 2 郷里

- .253 国
  - 4 地域社会
  - 5 政治区画
- .260 社会
  - 1 社会分野
  - 2 現場
  - 3 社寺・学校
  - 4 会社・銀行・工場
  - 5 店・旅館・病院・劇場
  - 6 その他の生活の場所

- .270 機関
  - 1 政府機関一般
  - 2 公共機関
  - 3 国会
  - 4 軍
  - 5 国際機構
- .280 団体
  - 1 クラス
  - 2 閥

1.3 人間活動——精神及び行為

- 1.3000 心・印象・気分
  - 1 情緒
  - 2 対人感情
  - 3 表情
  - 10 念・願望・態度
    - 1 意志・道徳・宗教
    - 2 練習・習慣・記憶
  - 20 知解・思考・注意
    - 1 区別・比較・分類
    - 2 試験・調査・研究・計算・証明
    - 3 想像・判断・予測
    - 4 承認・決定
  - 30 構想・意味・題材
    - 1 論理・学問・論説
    - 2 原則・方法・制度
    - 3 見当・準備・計画
  - 90 見る・見せる
    - 1 聞く
- .3100 言葉
  - 1 符号
  - 2 命名
  - 3 表現
  - 4 話す
  - 5 宣言
  - 6 発表
  - 7 読む
  - 10 通信
    - 1 報道
    - 2 話
    - 3 問答
    - 4 批判
    - 5 議論
    - 6 言論

- .3117 報告
  - 8 説明
  - 9 評判
  - 20 書く
    - 1 文章
    - 2 文書
    - 3 文献
    - 4 目録
- .320 創造・著作
  - 1 芸術・文芸
  - 2 美術
  - 3 音楽
  - 4 映画・演劇
- .330 文化・歴史・風俗
  - 10 人生・運
    - 1 出世
    - 2 進退
    - 2 勤務・労働
    - 3 生活一般
    - 4 学事
    - 5 冠婚
    - 6 式・祭儀・宗教的行為
    - 7 旅・娯楽・スポーツ
    - 8 騒ぎ
    - 9 動作
- .3400 義務
  - 1 権利
    - 1 資格・人格・才能・行儀・素行
    - 20 行為
      - 1 活動
      - 2 用
    - 30 成功・失敗
- .3500 交際

- .3501 争・平和
  - 1 会見・訪問・接待・集会・別れ
  - 20 約束
    - 1 相談
    - 2 協力・参加
    - 3 奉仕
    - 3 競争・軍事
- .360 政治・革命
  - 行政・保安
    - 1 設立・運営・人事
    - 2 教育・要求・制約  
奨励・救護・世話  
賞罰・仕打ち
- .370 獲得・所有
  - 経済・金融・經理
    - 1 税・資本・金銭  
価値・費用・報酬
    - 2 利害・需給  
取引・売買・授受  
貧富・配給
- .380 仕事・事務・生産
  - 産業・職業
    - 1 農漁猟畜産作業  
商売  
工鉦作業  
工事・建築  
土木  
運輸・交通  
厚生  
出版  
興行
    - 2 作業一般・家事
    - 3 使用・処理

1.4 生産物——結果及び用具

- |            |          |             |
|------------|----------|-------------|
| 1.400 製品   | .433 間食品 | .453 刃物     |
| 1 通貨       | 4 飲料・煙草  | 4 武器        |
| .410 物資・原料 | 5 薬      | 5 楽器・玩具     |
| 1 各種原料     | 6 化粧品    | 6 標示物       |
| 2 基本的材料部品  | .440 住宅  | 7 記入物       |
| 3 綱網       | 1 建物     | 8 光熱具       |
| .420 被服材料  | 2 住宅部分   | 9 光学器具      |
| 1 衣服・服装    | 3 建物部分   | .460 電気通信機械 |
| 2 衣類       | 4 台・棚    | 1 機械        |
| 3 被服部分     | 5 造作     | 2 陸上輸送設備    |
| 4 身体につけるもの | 6 家具     | 3 海上輸送設備    |
| 5 寝具・持ちもの  | .450 道具  | 4 航空機       |
| .430 食物    | 1 器・入れもの | .470 土地利用種別 |
| 1 各種食品     | 2 器具     | 1 道・橋       |
| 2 調味料      | 文具・工具・農具 | 2 其他の土木築造物  |

1.5 自然——自然物及び自然現象

- |               |            |          |
|---------------|------------|----------|
| 1.500 肉体への刺激  | .522 国土・風景 | .564 内臓  |
| 1 光・色・熱       |            | 5 骨・毛・神経 |
| 2 音           | .550 生物    | 6 体液・排泄物 |
| 3 臭・味         | 1 植物       | 7 卵      |
| .510 自然・物質・電気 | 2 各種植物     | .570 生命  |
| 1 各種物質        | 3 植物体部分    | 10 誕生・生育 |
| 2 気体・空気       | .560 動物    | 1 死      |
| 3 水           | 1 各種動物     | 20 生理    |
| 4 自然現象一般      | 20 身体      | 1 健康     |
| 5 気象          | 1 頭部       | 2 病氣・負傷  |
| .520 宇宙・天体    | 2 胸部       | 3 不具     |
| 1 地形          | 3 肢        |          |

2. 動詞

- |          |          |           |
|----------|----------|-----------|
| 2.111 関係 | .1503 継続 | .1570 変形  |
| 2 同異     | 10 運動    | 1 増減      |
| 3 相對     | 1 転位     | .16 時     |
| .120 存在  | 20 方向    | .17 場所    |
| 1 出現     | 1 移動・発着  | .19 程度    |
| 2 形成     | 2 進行     |           |
| 3 成立     | 3 出入     | 2.3000 感覺 |
| 4 残存・消滅  | 4 上下・昇降  | 1 情緒      |
| 5 保存・廃棄  | 50 離合    | 2 対人感情    |
| .13 状態   | 1 開閉     | 3 表情      |
| .1500 変化 | 60 接触    | 10 念      |
| 1 改新     | 1 加圧     | 1 態度      |
| 2 開始・終了  | 2 妨害     | 2 学習      |

§ 4

- |            |               |              |
|------------|---------------|--------------|
| 20 思考・認識   | . 311 通信・問答・論 | . 353 競争・闘争  |
| 1 比較       | . 32 創作       | . 36 対人働きかけ  |
| 2 試験・研究    | . 332 労働      | . 370 獲得・所有  |
| 3 想像・判断    | 3 生活一般        | 2 売買・授受      |
| 30 誤る・企てる  | 9 動作          | . 38 作業      |
| 90 見る・見せる  | . 342 行為      | 2. 50 肉体への刺戟 |
| 1 聞く       | 3 成功・失敗       | . 51 自然      |
| . 31 言語    | . 351 交際      | . 55 生命現象    |
| 0 言う・書く・読む | 2 交渉          |              |

3. 形容詞・形容動詞・副詞

- |              |              |             |
|--------------|--------------|-------------|
| 3.10 コソアド・本体 | . 17 長短・広狭   | . 31 言語     |
| . 11 関係      | . 18 大小・軽重・質 | . 33 文化・生活  |
| . 12 無・存在形式  | . 19 多少・程度   | . 36 社会・制度  |
| . 13 様相      | 3.300 感覚・感情  | . 37 経済     |
| . 14 力       | 1 個性・態度      | 3.50 肉体への刺戟 |
| . 15 発動形式    | 2 知的形式       | . 55 生命     |
| . 16 時間形式    |              |             |

4. その他

- |         |          |         |
|---------|----------|---------|
| 4.11 接続 | 4.300 感動 | 4.31 応答 |
|         | 1 陳述形式   | . 35 待遇 |

(終)

## 5 語構成に関する分析

### 5・1 まえがき

#### 5・11 分析の目標

総合雑誌の語彙を種々の角度から分析する際の課題の一つとして、語構成に関する分析をとりあげた。語構成という術語は、種々の意味に使われるが、この場合は語構造と言いかえてもよい。つまり、いわゆる複合とか派生とかの方法によって結合する二つ（以上）の構成要素の間の構造様式を明らかにしようとする分析である。

このような分析を課題の一つにとりあげたのは、次の理由による。現代日本語における語構成の実情を明らかにするには、実際に行われている言語について、ある程度数量的な調査をすることが必要である。ところがこの種の調査はかなりの規模を必要とするため現在までほとんど行われていない。そこで、一年間の総合雑誌という限られた資料についてはあるが、かなり大規模の語彙調査を行った機会を利用して、時間と労力の許す範囲で語構成についても分析し、現代語の語構成上の特質をさぐる上の一つの基礎資料を作ろうとしたのである。さらにもう一つの理由は、われわれが現代語の語彙調査を継続的に進めていく上に、語構成に関する分析の結果が直接役立てられるという点である。すなわち、語彙調査においては、調査単位としての語をどのように決定するかという問題が常につきまとう。この総合雑誌の調査では、§ 2・3 に述べたごとく  $\beta$  単位というものを調査単位として認定した。この  $\beta$  単位の規準ならびにその適用のしかたに問題がなかったかどうか、さらにより厳密な、より効果的な規準にするにはどのような点を改めればよいか、について十分に検討する必要がある。こうした検討のためにも、語構成に関する分析の結果が直ちに役立つ資料となるはずである。

以上が語構成の分析をとりあげたおもな理由であるが、さて分析に当っては、あらかじめ次の三つの目標を用意した。

- (Ⅰ) 語の結合力
- (Ⅱ) 語と語との結合関係
- (Ⅲ) 語の内部における結合関係

ここで語というのは、総合雑誌の語彙調査でわれわれが調査単位として認めた語、すなわち  $\beta$  単位の語をさす。これらの語の中には、他の語と全く結合<sup>注</sup>することなく、単独<sup>注</sup>で用いられるものもあれば、一方他の語と結合していわゆる複合語や派生語を構成するものもある。それぞれが実際にはどのくらいの勢力で用いられているのか、また、どのような種類の語が他

注 「結合」および「単独」という語の使い方については、10～11ページに規定した。

の語と結合しやすく、どの種類の語が他と結合しにくいのか。こうした点を明らかにしようとするのが、(Ⅰ)の目標である。

次に、語と語との結合関係を明らかにするためには、少くとも二つの面からの分析が必要になる。第一に必要なのは、結合の要素になるべき語の種類、ならびにその排列の順序についての分析である。すなわち、いかなる種類の語が、他のいかなる種類の語と、いかなる順序で結合するか、という形式面からの検討である。(これを以下結合形式とよぼう。)いま一つは、互いに結合する二つの語の間の意味的關係である。この結合形式と意味的關係との両面について、語と語との結合関係を明らかにしようとするのが、(Ⅱ)の目標である。

以上の(Ⅰ)と(Ⅱ)とは、われわれが調査単位とした $\beta$ 単位の語が、さらに他の $\beta$ 単位の語とどのように結合するかという検討であるが、それだけでは、実は語構成の分析として十分ではない。 $\beta$ 単位の語の中には、《家 客 駅》などのように、さらにそれ以上の小さい語構成要素<sup>註</sup>に分割できないものと、《気持 組合 労働》などのように、二つ(以上)の構成要素に分けられるものがある。これらが実際の言語ではどのような勢力で用いられているかを調べるとともに、特に後者においては(Ⅱ)の目標と同じく、語の内部における構成要素間の結合関係についての検討が必要になる。こうした点について調べるのが(Ⅲ)の目標である。

#### 5・12 対象の限定

目標を十分に達成するためには、総合雑誌の語彙調査の標本全体に現われたすべての $\beta$ 単位の語について調べることが、何よりも望ましい。しかし、それは時間や労力が到底許さないので分析の対象を次のように限定することにした。この語彙調査の整理にあたっては、延べ二十三万余語からなる標本全体について、もう一度無作為に選んだ延べ十一万六千余語(以下、これを標本の前半とよぶ)を、中間的にまず集計した。この延べ十一万六千余語は、異なった約一万六千語の繰り返しによって成り立っている。この延べ十一万六千、異なり一万六千の語を、語構成に関する分析の対象としたのである。しかし、それでもなお時間や労力に無理があったので、実際には、この延べ十一万六千、異なり一万六千の語の中から、10回以上繰り返し使われた語だけに限って集計する結果になった。この使用度数10回以上の語は、延べにして約八万五千余、異なりで千七百余になる。これは、標本前半の延べ十一万六千語に対し74パーセント強、異なり一万六千語に対して11パーセント強にあたる。従って延べ語数の点では、以上の範囲についての結果だけからも、全体に対する見通しがほぼつけられるはずである。なお、使用度数9回以下の語についても、部分的に集計を完了したものがあるので、必要に応じて以下に述べることにする。

#### 5・13 分析の準備 ——語の品詞別分布——

語構成の分析を進める手がかりとして、あらかじめ上記の約一万六千の異なる語を品詞別に分類した。語構成と直接の関係はないが、標本の前半における品詞別分布の状況について、こ

注 それ以上の小さい単位に分割できない語構成要素のことを、§ 2・3 では語源単位の語形とよんだ(10 ページ)。この章でも、以下必要に応じて語源単位という用語を使用する。

ここで述べておくことにする。品詞分類の方法は、大体『中等文法』に従ったが、語構成の分析のための便宜を考えて、それと異なる取扱いをした点が少なくない。以下、次ページの第1表「語の品詞別分布」に示した各項目ごとに、取扱い上のおもな相違点を述べておこう。

名詞 この中には、《アキラカ 立派 大切》等のいわゆる形容動詞の語幹や、《一層 一番 全然》等の漢字二字で書かれる漢語の副詞なども含んでいる。また接頭語・接尾語といわれるものでも、特に一β単位とされるもので名詞または形容動詞を構成するもの、たとえば《オ 第 非》(接頭)《サン タチ 的》(接尾)や助数詞の類なども、かりに名詞として、この中で数えた。ただし、名詞のうち指示代名詞とよばれるものは、下に別立したコソアド語に含めるため、名詞の中から除外した。なお、名詞の中をさらに次のような六類に分けた。

〔漢語〕ここでは、単に字音語というほどの意味、すなわち漢字の字音によって組み立てられる語をさす。従って中国伝来の語であるか、日本製の語であるかは問わない。

〔和語〕日本語本来の語で、名詞の中の他の五類に属さないもの。

〔洋語〕主として西洋系の外国語から国語の中にはいつてきたものをさす。

〔混種語〕互いに異なる言語に由来する二つの語源単位の語形が結合してできた語。すなわち、漢語+和語(いわゆる重箱読みの語)、和語+漢語(湯桶読みの語)、漢語+洋語、洋語+漢語、和語+洋語、洋語+和語という六種の組み合わせがあるが、全体的には語数が少ないので、ここでは全部を一括して数えた。

〔固有名詞〕ここでは、地名と人名とに限った。

〔数詞〕助数詞を取り除いた、純粹に数量を表わす部分。(本数詞といわれるもの。)ただし、この中には整理上の便宜から《A B C》《イ ロ ハ》などの記号が含められているが、全体としてはきわめて数が少ないので、ほとんど無視して考えてよい。

コソアド語 いわゆる指示語を一括したもの。品詞別という点では、《コレ ソレ アレ ドレ》《ココ ソコ アソコ ドコ》などは名詞(代名詞)の中に、《コウ ソウ アア ドウ》は副詞に、《この かの かの どの》は連体詞に、《ソシテ ソコセ》は接続詞にそれぞれ分属させるべきであるが、指示語の特性を考えて特にここでは一括した。

動詞 ここに含められるのは、すべて和語動詞である。《勉強する リードする》などの複合動詞は、調査単位としてはそれぞれ二β単位に分割されるので、ここでは《する》だけが動詞として数えられる。また《論ずる 達する 愛する》等の一字の漢語から派生した動詞は、それぞれ全体が一β単位として独立するものであるが、一字の漢語の語構成と比較しやすいように、かりに漢語名詞の中に含めて数えることにした。<sup>註)</sup>

注 一字の漢語から派生した動詞の延べ語数、異なり語数は右の通りであるから、これを第1表の動詞の語数に加えて勘定すれば、動詞としての全語数を求めることができる。

	全体	30以上	29~10	9以下
延べ語数	761	367	154	240
異なり〃	113	5	9	99

§ 5・1

付属語（一部） 大部分の助詞・助動詞は、調査対象から除外した。従って、ここで数えたのは、特に一β単位として採集した一部のもの、たとえば準体助詞としての《ノ》や、副助詞の《ナド マデ ノミ バカリ ダケ》、および助動詞の《ゴトッ タイ》などである。なお、§ 2・3 に別表として掲げた「一β単位とする付属要素」の中には、以上のほか、いわゆる接頭語・接尾語があがっているが、これらの語は、それぞれの語性に従って、漢語名詞、和語名詞、動詞、形容詞などの中に、それぞれ分属させた。

以上の方法で分類し、集計した結果が、第1表に示す「語の品詞別分布」である。

- ひと口に品詞別分布といっても、使用度数の多い語群と、少ない語群とでは、かなり分布状況を異にするので、次のように、使用度数「30以上」「29～10」「9以下」の三群に分けて表示した。この分け方は、全く便宜に従ったものにすぎないが、これによって大体の傾向はうかがうことができよう。
- 表中（ ）の中にイタリック体で示した数字は、使用度数別の各群（全体 30以上 29～10 9以下）ごとの延べ語数ならびに異なり語数の総計（表の最下段の数字）に対する、それぞれの品詞の百分比である。ただし四捨五入しても0.1パーセントに満たないものは掲げない。

第1表 語の品詞別分布

品 詞	延べ語数				異なり語数			
	全体	30以上	29～10	9以下	全体	30以上	29～10	9以下
名 詞	76134 (65.4)	35824 (53.9)	14939 (77.3)	25371 (83.2)	13144 (83.7)	396 (69.1)	933 (77.7)	11815 (84.8)
漢 語	43308 (37.2)	16820 (25.3)	11346 (58.7)	15142 (49.7)	7500 (47.8)	244 (42.6)	707 (59.0)	6549 (47.0)
	19439 (16.7)	13000 (19.6)	2285 (11.8)	4154 (13.6)	2290 (14.6)	103 (18.0)	143 (11.9)	2044 (14.7)
	1598 (1.4)	130 (0.2)	231 (1.2)	1237 (4.1)	596 (3.8)	3 (0.5)	16 (1.3)	577 (4.1)
	594 (0.5)	—	92 (0.5)	502 (1.6)	311 (2.0)	—	5 (0.4)	306 (2.2)
固有名詞	6441 (5.5)	1627 (2.4)	697 (3.6)	4117 (13.5)	2316 (14.7)	16 (2.8)	46 (3.8)	2254 (16.2)
数 詞	4754 (4.1)	4247 (6.4)	288 (1.5)	219 (0.7)	131 (0.8)	30 (5.2)	16 (1.3)	85 (0.6)
コソアド語	4562 (3.9)	4388 (6.6)	100 (0.5)	74 (0.2)	53 (0.3)	15 (2.6)	6 (0.5)	32 (0.2)
副 詞	3096 (2.6)	1707 (2.6)	768 (4.0)	621 (2.0)	357 (2.3)	28 (4.9)	43 (3.6)	286 (2.1)
連 体 詞	257 (0.2)	244 (0.4)	—	13	8	4 (0.7)	—	4
接 続 詞	898 (0.8)	759 (1.1)	120 (0.6)	19	22 (0.1)	9 (1.6)	7 (0.6)	6
感 動 詞	183 (0.2)	—	69 (0.4)	114 (0.4)	61 (0.4)	—	4 (0.3)	57 (0.4)
動 詞	26382 (22.6)	19927 (30.0)	2693 (14.0)	3762 (12.7)	1818 (11.6)	94 (16.4)	168 (14.0)	1556 (11.2)
形 容 詞	2750 (2.4)	1763 (2.6)	520 (2.7)	467 (1.5)	232 (1.5)	18 (3.2)	33 (2.8)	181 (1.3)
付 属 語(一部)	1973 (1.7)	1853 (2.8)	99 (0.5)	21	17 (0.1)	8 (1.4)	5 (0.4)	4
計	116235 (100)	66465 (100)	19308 (100)	30462 (100)	15712 (100)	572 (100)	1199 (100)	13941 (100)



§ 5・1

この表から次のことが知られる。全体の異なり語数の 83.7 パーセントまでは名詞が占めており、動詞・形容詞は、合わせてもわずか 13.1 パーセントにしかならない。(延べ語数では、名詞 65.5 パーセントに対し、動詞・形容詞が 25 パーセントであるから、動詞・形容詞は、語の種類が少ない割に使われる度合いが多いわけである。)

名詞の中では、やはり漢語の異なり語数が非常に多く、使用度数の多い語群でも少ない語群でも、常に全体の50パーセント内外を占めている。漢語に比べると和語名詞の語数は、延べ・異なりとも、全体的に少ないが、それでも使用度数 30 以上の語群では、比較的多く使われていることが目立つ。これは、一部の和語名詞の使用度数がきわめて多いからである。いま、前編の「使用率順語彙表(標本全体)」<sup>注1)</sup>で見ると、上位から百位までの語の中に、ここでの和語名詞が 21 語も占めている。それらを前半の延べ十一万六千語における、それぞれの使用度数とともに掲げると、

コト (1692) モノ (957) ヨウ<sup>注2)</sup> (763) ワタクシ (598) タチ (350) タメ (350)  
 ナニ (338) ヒト (303) トキ (300) オ (293) カレ (278) イマ (260) トコロ  
 (234) ラ (220) ナカ (208) サン (166) ホド (160) カタ (154) ワレワレ  
 (143) クニ (138) マエ (128)

のようになる。いわゆる形式名詞としての用法をもつものや、代名詞・接頭語・接尾語等が上位に多く現われることが知られる。この傾向は動詞にも同様に現われ、度数 30 以上の語群では、延べ語数・異なり語数ともに非常に多く使われている。動詞も、使用率順百位までの語の中に 23 語含まれ、かつ個々の語の使用度数がきわめて多いことは、次に見るとおりである。

シ・スル (4471) イル (2377) イイ・ウ (2148) ナリ・ル (1231) アリ・ル (918) キ・  
 ヅル (508) サレル (456) ミル (441) オモイ・ウ (423) ユキ・ク (388) デキル (341)  
 ヨリ・ル (295) モチ・ウ (246) カンガエル (242) ヤリ・ル (219) オキ・ク (205)  
 ツキ・ク (193) トリ・ル (203) デル (179) エル (177) シリ・ル (157) シマイ・ウ  
 (148) オリ・ル (130)

以上の和語名詞や動詞と、全く同様の傾向を持つものが、数詞とコソアド語、および連体詞、接続詞である。いずれも、異なり語数の少ない割に延べ語数が多く、しかもその大半は度数30以上の語群に集中して現われる。使用率順の百位までに、数詞では

一 (610) 二 (404) 三 (361) 十 (355) 五 (233) 二十 (195) 六 (173) ヒ  
 トツ (163) 八 (154) 千 (155)

の 10 語が現われ、コソアド語では、

ソの (1031) コの (830) ソレ (762) コレ (576) ソウ (267) ドウ (191) コ  
 ウ (165)

の 7 語が含まれる。この種の語は、いかなる資料について調べた場合でも、おそらく常に上位を占めるはずで、その点では日常の最も基本的な用語とよんで差しつかえないものである。

注1 国立国語研究所報告 12『総合雑誌の用語』前編 96~97 ページ

注2 《ヨウ》(様)は語源的には漢語であるが、『中等文法』で助動詞とする「ようだ」の語幹もこれに含まれるので、便宜上和語名詞の中に加えておいた。

さてこれらの語とちょうど逆の傾向をもつものが洋語名詞、混種語名詞、固有名詞である。いずれもその延べ語数、異なり語数の大半が、度数9回以下の語群に属している。洋語で30回以上用いられたのは《MSA(47) パーセント(45) ドル(38)》の三語にすぎず、混種語では一回も現われない。

以上は、標本の前半、つまり延べ十一万六千語、異なり一万六千語の品詞別分布であるが、かりに標本全体（延べ二十三万、異なり二万三千）の語について同様に集計しても、おそらく各品詞の占める割合に大した変動は見られないであろう。

さて、以上の分類にもとづいて、各品詞ごとにその語構成の状態を調べたのが、以下の報告である。

## 5・2 語の結合力

一年間の総合雑誌に実際に使われた言語では、いわゆる複合・派生等の現象は、どのくらいの割合で現われるものだろうか。また、どのような種類の語が他と結合しやすく、どのような語が単独で用いられるのだろうか。こうした点につき、§ 5・13で分類した品詞ごとに、その結合力を調べてみたのが第2表である。すなわち使用度数10回以上の語（付属語を除く）について、それが単独に用いられた場合と、結合の部分として用いられた場合との、それぞれの延べ語数を示したものである。

- いわゆる複合と派生とは区別しないで、ひとしく結合として扱う。（以下も同じ。）日本語の場合、両者は本来共通の性質を持つものであって、結合のしかたそのものに特に区別する理由は認められないからである。
- 漢語名詞、和語名詞、和語動詞の中を、さらに語源単位の数によって、それぞれ三類または二類に分けた。
- 副詞・連体詞・接続詞・感動詞には、結合の用法が全く見られないので、一括して示した。
- 各欄の下段の（ ）の中にとりどころイタリックで示した数字は、語の種類ごとに、その延べ語数の合計に対する、用法別の延べ語数の百分比を示したものである。

次ページの表の数字から次のことが知られる。すなわち、度数10回以上の語群の中では、

- 1° 実際に使われたすべての語（ただし、付属語を除く）のうち、約三分の一あまりの語は、他とたがいに結合しあって用いられる。（全体の延べ語数を100パーセントとすれば、単独の用法64.0パーセントに対し、結合の部分としての用法は、36.0パーセント。）
- 2° 他の語と結合するものの大半は、名詞である。これに対し、副詞・連体詞・接続詞・感動詞は、他と全く結合することがない。（結合の部分として用いられる語が全部で約三万語あるうち、名詞のそれを合計すると、約二万六千語近くになる。これに対し、副詞・連体詞・接続詞・感動詞は、全部が単独に用いられる。）
- 3° 和語と漢語とでは、漢語の結合力のほうがはるかに優勢である。これを裏がえしに言えば、単独に用いる可能性は、和語のほうが多いということになる。

なお、語の種類ごとに目立つ点を拾ってみよう。

第2表 語の結合力(度数10以上の語における)

語の種類	単 独 の 用 法 と し て	結合の用法			計		
		結合の部 分として	前部分 として	後部分 として			
名 詞	漢語名詞	10141 (36.0)	18025 (64.0)	7554 (26.8)	10471 (37.2)	28166 (100)	
	一 字	1395 (15.5)	7629 (84.5)	1576 (17.5)	6053 (67.0)	9024 (100)	
		二 字	8724 (45.6)	10380 (54.4)	5974 (31.3)	4406 (23.1)	19104 (100)
		三字以上	22	16	4	12	38
	和語名詞	12689 (83.0)	2596 (17.0)	935 (6.1)	1661 (10.9)	15285 (100)	
	一単位	11632 (82.8)	2415 (17.2)	854 (6.1)	1561 (11.1)	14047 (100)	
		二単位	1033 (85.1)	181 (14.9)	81 (6.7)	100 (8.2)	1214 (100)
		三単位 以上	24	—	—	—	24
	洋語名詞	128 (35.5)	233 (64.5)	72 (20.0)	161 (44.5)	361 (100)	
	混種語名詞	65	27	16	11	92	
固有名詞	1345 (57.8)	979 (42.2)	883 (38.0)	96 (4.2)	2324 (100)		
	数 詞	512 (11.3)	4023 (88.7)	2332 (51.5)	1691 (37.2)	4535 (100)	
コソアト語	4378 (98.0)	110 (2.0)	110 (2.0)	—	4488 (100)		
副・連体・接 続・感動詞	3667	—	—	—	3667		
和 語 動 詞	18578 (82.1)	4042 (17.9)	355 (1.6)	3687 (16.3)	22620 (100)		
	一単語	18425 (82.1)	4038 (17.9)	352 (1.6)	3686 (16.3)	22463 (100)	
		二単位	153	4	3	1	157
形 容 詞	2090 (91.5)	193 (8.5)	22 (1.0)	171 (7.5)	2283 (100)		
計	53593 (64.0)	30228 (36.0)	12279 (14.6)	17949 (21.4)	83821 (100)		

(1) 一字の漢語

一字の漢語で目立つ点は、単独で用いられる場合がきわめて少ないことである。延べ語数では、全体約九千語のうち約千四百語、つまり 15 パーセント程度が単独に用いられるにすぎない。(異なり語数では、全体 197 語のうち単独の用法をもつものが 97 語。)ここで単独として扱ったものは、次のような用法である。

i) 実質名詞としての用法

例： 氣(79—75)<sup>註</sup> 客(23—12) 軍(100—11) 死(31—29) 氏(115—14) 説(14—8) 線(23—11) 敵(35—33) 役(24—16) 門(13—11) 僕(133—102)

ii) 形式名詞としての用法

例： 間<sup>カン</sup>(51—8) 際<sup>サイ</sup>(25—25) 方(155—152) 風<sup>フウ</sup>(32—25) 辺(12—12)

iii) 副詞としての用法

例： 実に(60—32) 特に(54—54) 現に(17—12) 主として(25—11)

iv) 形容動詞としての用法

例： 逆に・な(22—20) 急に・な(26—16) 妙に・な(14—14) 単に・なる(34—34)

単独の全用法のうち、i) が約二分の一を占め、ii) が四分の一、iii) と iv) とを合わせたものが四分の一という、大体の分布状況である。

本来、漢語は漢字一字がそのまま一語に当るべき性質をそなえているはずであるが、国語としての使用状態を見ると、一字の漢語が単独に使われることは、実際にはきわめて少ない。第2表に見るとおり、一字の漢語の八割以上は、結合の要素として用いられている。このこと

注 カッコ内の左側の数字は、標本の前半に現われたその語の延べ語数を、右側の数字は、そのうちの単独に使われた延べ語数を示す。つまり《氣》は、標本の前半で 79 回現われたが、そのうち 75 回が実質名詞として単独に用いられたことを示す。以下、ii) 以下についても、この形式にならって示す。

は、総合雑誌だけにかぎらず、おそらく現代語の全般にわたって認められる傾向であろう。

### (Ⅰ) 二字の漢語

一字の漢語に比べると単独に使われる割合も多いが、また一方、結合の要素としてもさかんに用いられている。(異なり語数で見ても751語中、693語までが単独の用法をもっている。)この、単独でも、あるいは結合の要素としてもさかんに用いられるという点が、二字の漢語の結合上の特徴であると言える。ただし、二字の漢語の中でも、次のものは、他の語と全く結合することなく用いられている。

#### i) 程度の副詞としてのもの

例： 一層(22) 一番(27) 随分(13) 全然(22) 大体(31) 大変(22)

#### ii) 陳述の副詞としてのもの

例： 多分(10) 当然(47) 到底(11) 無論(12) 勿論(60)

#### iii) 情態の副詞としてのもの

例： 一応(28) 一緒(32) 元来(11) 結構(10) 早速(10) 大切(17) 大抵(10)  
沢山(32) 段々(13)

#### iv) 接続詞としてのもの

例： 乃至(15)

#### v) 時間を表わす名詞で副詞的用法をもつもの

例： 去年(13) 今度(41) 今日(64) 最近(49) 最後(42) 従来(15) 将来(22)

これらのうち i) から iv) までの語は、常に単独で用いられるものとして、和語の副詞・連体詞・接続詞などと見合わせて考えられる。

### (Ⅱ) 和語名詞

和語名詞の場合は、ちょうど一字の漢語と反対に、その大部分が単独で用いられる。(異なり語数で見ても、246語のうち92語は全く結合の用法がない。また、そのほか23語は、いわゆる派生の用法だけで、複合の用法をもっていない。)和語名詞で結合の部分として用いられるのは、延べで約二千六百語しかないが、しかもその半数までは、次に掲げる12語の繰り返しによって占められている。

i) お(293) 大<sup>オ</sup>(19) 相<sup>ソ</sup>(18) 幾<sup>イ</sup>(11)

ii) さま(54) さん(166) ちゃん(13) たち(350) ら(220) ども(24) ぶり(11)  
屋(42)

i) は接頭語、ii) は接尾語といわれるもので、常に単独では用いられることのない語である。従って、これらの語を除外して考えると、普通の和語名詞の結合力というものは、漢語に比べてかなり貧弱であることがわかる。

### (Ⅲ) 洋語名詞

洋語名詞は、度数10以上では、延べ361語、異なり19語しか現われない。従ってこれだけでは特徴的な事実を見いだすことができにくい。ただし、このうちで、次の6語が助数詞としても用いられ、その用法だけで結合例の過半数を占めていることが注意される。

## § 5・3

ドル(38—32) パーセント(45—43) トン(12—12) フラン(10—9) ページ(18—17)  
メートル(11—11)

第2表の結果からすれば、洋語名詞の結合力は、一字の漢語に近い比率を示しているが、別  
に度数9以下の、延べ1237語、異なり577語までを含めて集計した結果は、単独の用法の比  
率が増し、二字の漢語のそれとほぼ同じ割合になることを付け加えておこう。

### (V) 混種語名詞

全体を合わせても語例が少ないので、これだけでその特徴をさぐることはできない。

### (VI) 固有名詞・数詞

第2表に見る通りで、特に注意すべき点も見当らない。固有名詞の結合というのは、固有名  
(ここでは地名・人名)と種差を表わす普通名詞との結合のほかに、人名における姓と名との  
結合をも含んでいる。また数詞においては、助数詞との結合のほかに、数の位の間の結合も含  
む。従って第2表において数詞の九割近くまでが結合の部分になるという結果も当然のことで  
あろう。(固有名詞・数詞の結合例については、13～16ページを参照。)

### (VII) コソアド語・副詞・連体詞・接続詞・感動詞

コソアド語の結合例が延べ110例見られるが、これは

コレ(576—68) ソレ(721—41) アレ(31—1)

という代名詞に限っての用法である。(しかもこの結合は、いずれも、《ヲ》《以上 以後 以  
来 自身》など、接尾語もしくは接尾語的な意義・職能をもつ語を後部分として従えるという  
形式に限られる。)この代名詞以外のコソアド語および副詞・連体詞・接続詞・感動詞などは、  
結合力を全く持たず、常に単独で用いられる語である。

### (VIII) 和語動詞・形容詞

この両者も、大部分が単独で用いられる点で和語名詞の場合とよく似ている。しかも和語動  
詞で他と結合するものは延べ約四千語あるが、このうちの三千語あまりまでは、漢語等の名詞  
の後について複合サ変動詞を作る《する》が占めている。従って、もしこの《する》を除外し  
て考えれば、一般の和語動詞が他の語と結合する度合は、きわめて低いということになる。

以上は、標本の前半に10回以上現われた語という、きわめて限られた対象についての結果に  
すぎない。従って第2表における比率をもって、そのまま総合雑誌の用語、あるいは現代語一  
般についての語の結合力をうんぬんすることは、差しひかえなければならぬ。ただし、上の  
結果から、少なくとも漢語と和語との結合力の間にかなりな差のある事実は、認めてよいであ  
ろう。

## 5・3 語と語との結合関係

### 5・31 結合関係の分析

§ 5・11 で述べたように、語と語との結合関係を明らかにするには、結合形式と結合の意味  
的關係との両面からの分析が必要である。

(I) 結合形式の分析

これは、ある種類の語が、他のどのような種類の語と、どんな順序で結合するかという点の分析である。これを調べるため、次のようないくつかの方法上の限定をした。

〔調査すべき語の範囲〕 § 5・2 で見たごとく、他の語と結合するものの大半は名詞であるので、調査の範囲をひとまず名詞に限定した。なお、名詞のうちからさらに、一字の漢語 二字の漢語 和語 の三種類の語に限って、次節以下に報告する。洋語や混種語は全体的に語例が少なく特徴がとらえにくいいため、また固有名詞、数詞は、結合形式が比較的単純なため、ここでは割愛することにした。

〔結合の相手〕 ある種の名詞が前部分もしくは後部分となって結合すべき相手の語には、次の種類が考えられる。

i) 体言を構成する相手

- ① 漢語名詞（一字の漢語 二字の漢語 三字以上の漢語）
- ② 和語名詞（名詞<sup>注1</sup>） 居体言<sup>注2</sup> 形容詞語幹）
- ③ 洋語名詞
- ④ 混種語名詞
- ⑤ 固有名詞
- ⑥ 数詞
- ⑦ その他（上の①から⑥までのどれか二種類以上のものが相互に結合したもの。つまり、すでに一次的な結合を遂げている語を相手としてさらに結合する場合である。）

ii) 用言を構成する相手（この場合、下に掲げる相手の語は、必ず結合の後部分になる。）

- ⑧ 動詞《する》<sup>注3</sup>
- ⑨ 《する》以外の動詞
- ⑩ 形容詞

なお、以上の結合すべき相手の語は、いずれも基準になる語に対して第一次的に結びつくものに限った。たとえば《再軍備計画》という結合例の場合、基準になる語としては《再》《軍備》《計画》の三語がある。《再》を基準として調べるときは、それが第一次的に結びつく相手は《軍備》であるから、《再》は「二字の漢語」の前部分として結合すると考える。一方《軍備》が基準の語になる場合は、後部分として「一字の漢語」《再》に結合するとする。さらに《計画》を基準の語とすれば、後部分として「三字以上の漢語」《再軍備》を相手に結合する、というように考えるのである。

注1 ここには、前節までコソアド語としてきた《コレ ソレ アレ》の三語を含めた。前節で見たごとくコソアド語の中で他と結合するのは、この三語だけなので、結合の相手として特に一類を立てる必要が認められないからである。

注2 動詞の連用形が名詞化したものを、ここでは居体言とよんでおく。

注3 《する》だけを特に一項目として立てたのは、この形式が非常に数多く現われるので、整理の便宜のために⑨と区別したにすぎない。

〔排列の順序〕 前部分と後部分との二つに限った。たとえば《教育科学文化機関》という結合例の場合における《科学》は、むしろ中部分ともよぶべき位置を占めているが、これもひとまず《教育》に対する後部分としてとらえることにした。従って《文化》は、《教育科学》に対する後部分として、また《機関》は、《教育科学文化》に対する後部分として考えるわけである。このような取扱いをしたのは、実は上のような、三語が列挙並列される結合例が全体的に見てきわめて少数なので、整理上の手続きを簡略にしようとしたためである。

さて、以上のような方法で調査し集計した結果が、次節の第3表以下の各表である。

### (Ⅱ) 結合の意味的關係の分析

たがいに結合する二つの語の間には、さまざまな意味的關係が見られる。これまでの文法書などにもいくつかの分類<sup>註</sup>があがっているが、実際に個々の実例に当て検討すればわかるように、各結合間の意味的關係はきわめて複雑で、それを完全に分類しつくすことは、まず不可能に近い。この調査でも実際の結合例の整理からいくつかの分類項目が得られたが、それでもすべてをつくすことはできず、従って各項に属する語数の集計をする段階にまでは至らなかった。そこでこの報告書では、(Ⅰ)の結合形式を中心に記述し、結合の意味的關係については、省略したいと思う。

### 5・32 一字の漢語の結合形式

一字の漢語の結合形式を第3・1表に示す。

○ 以下の表中でいう「延べ語数」および「異なり語数」は、これまで述べてきた $\beta$ 単位の語を単位として数えたものではなく、それぞれの結合形の全体を一個の単位として、数えたものである。第3・1表の左側の上から二段目には、一字の漢語が前部分となって二字の漢語を後に従える形式として、延べで590、異なりで405という語数が出ている。これは、《再軍備》《実社会》《新家庭》などの結合形の種類をそれぞれ一個として勘定した場合が405であり、またその個々の結合例の使われた回数を合計したものが、590であることを示す。ただし、固有名詞と数詞を結合の相手とする場合に限っては、個々に異なりの結合例を数えることの意味が少ないので、次のように基準になる語ごとに特に一括した。すなわち《首相》の場合、《吉田首相》《鳩山首相》《伊藤首相》などは一括して、異なり1と数え、また《第》の場合、《第一回》《第三周年》《第五着》などを一括して異なり1と数えたわけである。

○ 語例中( )内のものは、いずれも総合雑誌の調査では一 $\beta$ 単位の語として数えたもの。従ってここでは集計の対象にならないが、参考のため掲げた。ただし、⑨の「一字の漢語+する」の形式に限っては、例外として特に集計した。(80ページ参照)

また、語例中〔 〕内のものは、実際の例としては現われなかったが、やはり参考例として補充したものである。

表で見ると、一字の漢語は、相手の語によって結合のしかたに非常な片寄りがある。特に目立つ結合形式を拾ってみよう。まず、全体的に

1° 後部分として用いられる形式のほうが、前部分としての形式よりはるかに多いことが目につく。いま、一字の漢語の全結合形式を100パーセントとして両者の比率を求めると、前部分21.0パーセントに対し、後部分が79.0パーセントとなる。その後部分として用

注 たとえば、山田孝雄著『日本文法学概論』61ページ、同著『国語の中に於ける漢語の研究』145ページ、松下大三郎著『改撰標準日本文法』160ページなどに見られる。

§ 5・3

第3・1表 一字の漢語の結合形式

結合の相手	前部分としての結合			後部分としての結合		
	延べ語数	異なり語数	語例	延べ語数	異なり語数	語例
① 漢語名詞						
{ 一字の	51	33	数名 御用 中小(企業)	57	32	某氏 数年 人的(資源)
{ 二字の	590	405	再軍備 実社会	3155	2027	委員会 生物学
{ 三字以上の	53	47	兩大戦争 大叛乱事件	463	408	自家用車 民主主義者
② 和語名詞						
{ 名詞	36	14	全組合 新家元 綿織物	68	50	組合員 子供服 芋づる的
{ 居体言	1	1	不つりあい	15	13	乗組員 見舞客 手合せ所
{ 形容詞語幹	—	—	(気軽 地厚)	—	—	(長年 薄茶)
③ 洋語名詞	10	9	大ストライキ 各サークル	50	48	ロマンス派 マイナス面
④ 混種語名詞	2	2	名番組 大スパイ網	11	11	ギャング役 役付工 職場内 逆コース的
⑤ 固有名詞	24	(21)	新中国 悪フランコ	504	(179)	ソヴェト圏 めい女
⑥ 数詞	286	(57)	第一党 金十兩	1656	(345)	第五巻 十五銭
⑦ その他	2	2	各読書サークル 新日本軍	69	59	朝鮮動乱前 スト規制法案
⑧ 動詞《する》	521	14	(愛する 感ずる 達する)			
⑨ 《する》以外の動詞	—	—	(気づく 役立つ 面くらう)			
⑩ 形容詞	—	—	(縁遠い 気易い 欲深い)			
計	1576	605		6053	3172	

いられる形式の中でも、

2° 二字の漢語の後につく結合形式

が最も多い。後部分となるものの半分以上はこの形式である。これに次いで多いのは、

3° 助数詞として数詞の後につく結合形式

であって、これは後部分となるものの約四分の一を占める。次に、前部分として用いられる形式の中では、

4° 二字の漢語を後につける形式

が最も多く、前部分となるもののうちの約三分の一を占める。これに次いで、

5° サ変動詞《する》を後につけて複合動詞を作る形式

が多い。以上の形式の中で特に注意されるのは、2°の「二字の漢語＋一字の漢語」という結合形式であつて、これは、おそらく現代日本語におけるあらゆる結合形式の中で最も数多く使われる型であると思われる。ただし、5°の《愛する 感ずる 論ずる》等は、《運動する 議論する》など「二字の漢語＋する」の場合とは異なり、現在では一般にその結合意識が薄れ、多くは単純語として取扱われる傾向をもっている。

要するに、一字の漢語は、§ 5・2 に述べたごとく、単独に使われることは少ないが、接尾的に、あるいは接頭的にさかんに用いられて、現代語のきわめて重要な語構成要素としての役割を果たしていることが知られる。



5・33 二字の漢語の結合形式

二字の漢語の結合形式を、第 3・2 表に示す。

第 3・2 表 二字の漢語の結合形式

結合の相手	前部分としての結合			後部分としての結合		
	延べ 語数	異なり 語数	語 例	延べ 語数	異なり 語数	語 例
① 漢語名詞						
┌ 一字の	2164	1223	運動部 映画界 外国人	490	292	諸外国 大会社 全学生
├ 二字の	1956	1381	関係官庁 完全犯罪	2175	1572	専門機関 生産技術
└ 三字以上の	164	145	基地労働者 修正資本主義	549	462	再軍備計画 民主主義國家
② 和語名詞						
┌ 名 詞	177	72	会社側 温泉宿 映画物語	136	93	兄夫婦 跡始末 組合運動
├ 居体言	54	42	映画入り 現実離れ	19	11	持時間 焼打事件 流れ作 業
└ 形容詞語幹	—	—	[意地悪 期待薄]	1	1	ありがた迷惑 [長逗留]
③ 洋語名詞	29	24	原子エネルギー 独立プロ	88	65	ニュース映画 サボ闘争
④ 混種語	5	5	工事現場 農村ゲリラ隊	28	27	戦場交流 ゴム靴製造
⑤ 固有名詞	16	(13)	独立日本 近代ヨーロッパ	633	(321)	岸内閣 東京会談
⑥ 数 詞	90	(28)	憲法第九条 生産第一主義	220	(107)	三者会談 五年以上
⑦ その他	2	2	経済五カ年計画 戦後日本 経済	67	58	反ファシズム運動 ビスト ル自射事件
⑧ 動詞《する》	1295	275	安心する 理解できる			
⑨ 《する》以外の 動詞	10	9	秩序立てる 理屈づける			
⑩ 形容詞	12	4	印象強い 用心深い			
計	5974	3223		4406	3009	

上の結合形式で目立つ点を拾ってみよう。

1° 一字の漢語の場合と異なり、前部分としても後部分としても、片寄りなく用いられる。

二字の漢語の全結合形式に対する百分比を求めると、前部分 57.4 パーセントに対し、後部分 42.6 パーセントとなる。前部分のうち用言を構成するものが 12.5 パーセントを占めるから、名詞を構成するものとしては、前・後ほぼ同率になる。その中でも特に多く用いられる形式は、前部分としては、

2° 一字の漢語を後につける形式

3° 二字の漢語を後につける形式

が最も多い。また、これに次いで

4° サ変動詞《する》を後につける形式

も多い。次に後部分としては、やはり

5° 二字の漢語の後につく形式

が最も多い。二字の漢語の全結合形式に対する百分比で表わすと、2° が 21.0 パーセント、3° が 19.0 パーセント、4° が 12.5 パーセント、5° が 21.0 パーセントとなる。従ってこの四形式

§ 5・3

だけで、二字の漢語の全結合形式の七割以上を占めるわけである。その他の結合形式は、上の形式に比べていずれも比率はずっと低くなるが、ともかく二字の漢語は、単独で使われることも多いうえに、結合の部分としてもいろいろな語に平均して結びつく点、特徴であると言える。

5・34 和語の結合形式

和語名詞の結合形式を、第 3・3 表に示す。

第 3・3 表 和語名詞の結合形式

結合の相手	前部分としての結合			後部分としての結合		
	延べ語数	異なり語数	語例	延べ語数	異なり語数	語例
① 漢語名詞						
{ 一字の	162	49	相手党 子供服 組員	52	24	全組合 新家元 僕たち
{ 二字の	116	94	下工作 手内職 東地区	303	207	和服姿 海岸通り 中堅どころ
{ 三字以上の	9	8	元弁護士 女事務員 見習看護婦	70	59	未亡人たち 純文学 資本家側
② 和語名詞						
{ 名詞	413	109	大金持 夢物語 西出口	664	176	思い出話 屋敷町 子守歌
{ 居体言	68	55	手慰み 子供だまし お願い	133	37	寝物語 貸手ぬぐい 帆かけ船
{ 形容詞語幹	2	2	言葉少な (足早 背広)	—	—	(うるさ型 ありがた涙)
③ 洋語名詞	6	3	抜き打ちスト 朝日ビール	13	12	モルモット代り ナイトジャケット姿
④ 混種語名詞	7	6	奥座敷 大地主	13	13	親分はだ 浮気男
⑤ 固有名詞	71	(26)	西ヨーロッパ 魚イソップ	209	(56)	ライン河 イソップ物語
⑥ 数詞	22	(11)	朝五時 月五回	181	(71)	十割 ふた夏 一里先
⑦ その他	2	2	元東京大学教授	23	20	鉄筋スタンド下 カムチャッカ沖あたり
⑧ 動詞《する》	13	5	物語する 仕事する			
⑨ 《する》以外の動詞	21	19	相携える 年老いる			
⑩ 形容詞	23	13	女らしい 血なまぐさい			
計	935	402		1661	675	

§ 5・2で述べたように、和語名詞はそのほとんどが単独で用いられ、他の語と結合する割合は、漢語に比べていちじるしく低い。従って、第 3・3 表の結果を見ても、特に注意するほどの形式は認められない。大体の傾向としては、

1° 前部分として用いられるよりも、後部分として用いられるほうが多いことが見られる。これは、いわゆる接頭語よりも接尾語の方がその種類も多く、また用いられる回数も多いことに基因している。(85 ページ参照) そして、前部分としては、

2° 和語名詞を従える形式

後部分としては、

3° 和語名詞の後につく形式

4° 二字の漢語の後につく形式

などが比較的多く用いられている。なお、固有名詞の後について種差を表わす形式や、助数詞として数詞の後につく形式などが、上に次いでわずかに目立つ程度である。

5・35 語の内部における結合形式

(I) 語の内部における結合

§ 5・1 の目標(Ⅲ)で述べたように、われわれが調査単位とした語の中には、それ以上に内部を分割できない一語源単位の語と、内部をさらに分割できる二つ以上の語源単位から成る語とがある。実際に標本に現われたところでは、両者はそれぞれどんな勢力で用いられているのだろうか。いま、漢語名詞、和語名詞、和語動詞の三者について、使用度数の群(30以上 29～10 9以下 の三群)ごとに集計した結果を示そう。

第3・4表 語の内部における結合の状況

種別	語源単位の数	延べ語数				異なり語数			
		30以上	29～10	9以下	計	30以上	29～10	9以下	計
漢語名詞	1	6927	2097	1655	10679	77	120	561	758
	2	9893	9211	13411	32515	167	584	5948	6699
	3以上	—	38	76	114	—	3	40	43
和語名詞	1	12061	1986	2301	16348	91	122	918	1131
	2	939	275	1822	3036	12	20	1099	1131
	3	—	24	1	25	—	31	27	58
和語動詞	1	19927	2536	2363	24826	94	159	781	1034
	2	—	157	1399	1556	—	9	775	784

上の表でわかるように、漢語名詞は、延べ語数、異なり語数ともに、二語源単位の語(二字の漢語)のほうが、一語源単位の語よりも圧倒的に多い。これに対し和語名詞、和語動詞は、反対に一語源単位の語のほうがはるかに多い。ただし、使用度数9回以下の群における異なり語数を比較すると、和語名詞では、かえって二語源単位の語のほうが少し多くなるし、和語動詞のほうでも、二語源単位の語が一語源単位の語とほぼ同数となっている。これは、和語のいわゆる複合名詞や複合動詞などは、いずれも個々の語の使用回数が、一語源単位の語に比べて一般的に少ないことを示すものである。ところで、これら二単位以上の語における内部的な結合形式はどうであろうか。漢語名詞や和語動詞の場合は、意味的關係はともかく、結合形式としては比較的単純であると言ってよい。しかし、和語名詞の内部における結合形式には多くの種類があって、決して単純ではないので、次にそれについて検討してみよう。

(II) 和語名詞の内部における結合形式

和語名詞を構成する要素としては、名詞・居体言・形容詞語幹の三種があり、これらが相互に結合しあう。その結合形式の大体を、標本の前半に現われた、二単位の結合になる和語名詞(延べ約三千語、異なり約千百語)について調べた結果は、次のとおりである。以下、各見出しの次に示した( )内の数字は、左側がその結合形式に属する延べ語数、右側が異なり語数

### § 5・3

である。なお、以下の結合形式の分類では、いわゆる疊語をとり出して、特に一類を立てた。

(1) 名詞+名詞 (1195 445)

例：朝日 手紙 父親 右手 ヤミ米 綿ぼこり 昼めし 足腰 親子 裏はら 筋金

(2) 名詞+居体言 (539 244)

例：夜明け 夕暮れ 目抜き 元締め 間借り 昼下がり ひじかけ 鳥流し 子飼い 雲が  
くれ

(3) 居体言+名詞 (355 154)

例：仕事 立場 笑い話 寄り道 読み物 やり口 焼跡 盛り土 まね事 飛箱

(4) 名詞+形容詞語幹 (31 23)

例：割高 色白 身近 筆太 背広 身重

(5) 形容詞語幹+名詞 (64 42)

例：悪口 若者 弱虫 丸顔 細指 故里 広間 長屋 近道

(6) 居体言+居体言 (65 29)

例：割合 行き来 見ごたえ 取引 できたて 出しぬけ 仕合せ

(7) 複合動詞からの転成 (374 143)

例：呼びかけ 行詰り 病みつき 召使い 結びつき 踏切

(8) 形容詞語幹+居体言 (14 13)

例：悪追い 洪好み 薄着 長生き

(9) 疊語 (399 38)

例：人々 われわれ いろいろ さまざま 時々、 生き生き 切れ切れ 思い思い、 赤々  
長々 深々

○ 上のほかに、組み合わせとしては、「居体言+形容詞語幹」(待ち遠 望み薄等)や「形容詞語幹+形容詞語幹」(たかひく 薄青等)という結合形式が考えられるが、いずれも標本の前半には全く現われなかった。

○ 形容詞の語幹に接尾語の《サ ミ ゲ》などをつけて名詞を構成する形式(延べ108語、異なり61語)は、それぞれ全体を一語源単位と考えたので、上の九類から除外してある。

上の分類に見るように、(1)に属するものが最も語数が多く、(2)(9)(7)(3)の類がこれに次ぎ、その他は、ぐっと数が少なくなっている。

### 5・4 あとがき

以上は、標本全体の半分、しかも主として使用度数10回以上の語についての分析であるため、これでもって総合雑誌の語構成の実情をすべて明らかにしたとは到底いえない。ことに結合の意味的關係については、さらに細かく類を立て、かつそれぞれに属する語数を集計した上でなくては、いかなる關係が現代日本語の語構成として有力であるかを判定することができない。しかし、われわれが調査単位としたβ単位の語が、他のいかなる語と、いかなる順序で結合するかという結合形式については、以上の結果からも大体的見通しがつけられるであろう。またこれらの分析のために、標本の前半に現われたすべてのβ単位の語について、その結合例をすべて記録したので、この記録は、β単位の規準を再検討するさいに役立てられることをつけ加えておこう。

## 付録 I 語彙調査の成立根拠と基本的諸概念の定義

「語彙調査 (word count)」と呼び慣らわされて来た調査のおもな仕事は、各「語」の使用度数、更に適切には使用率を調べることであった。<sup>注)</sup> すなわち

- (1) 「語」と呼ばれその存在が予期されているものについて、
- (2) 意味上・形式上同じと見てよいものを、それぞれにまとめ、
- (3) まとめられた各群が実際に使われている度数または割合を測る

ことだと言える。こうした調査の特色は、計量的な結果を出す点にある。計量的調査である以上、当然、そのようにして言語のある性質を測るということ、および測った結果が意味をもつか否かということが、問われなければならない。そこでこういう測定が科学としてどんな意味をもつか、あるいは逆に、科学としての意味をもたせるには測定自身がどんな根拠に立って行われるべきかを、以下に論じよう。今までの内外の多くの語彙調査では、この点の反省が不徹底だったため、結果が認識論的にしっかりしていない、きらいがあった。

さて上述の性質を有する語彙調査が実行出来るためには、あらかじめ次の問題を解決して置く必要がある。

- (i) 与えられた任意の文章を語に分割する方法、
- (ii) 与えられた任意の二語を同じ語か異なる語かのどちらかに必ず分類する方法。

この両者を通じて、違う調査者の間で、または同じ調査者であっても判定するその時々で、分割分類の結果の一致が要請される。次にこれらの操作を経たものが、更に前記の(3)の勘定という操作を受ける。この「数える」という操作が意味をもつためには、数えられる個々の「語」が何らかの点で等質的な性質をもっていなくてはならない。この要請は当然 (i), (ii) の決め方にも影響を及ぼす。語分割なり分類なりの客観性だけにとらわれて、この等質性をないがしろにしては、語彙調査の特色である計量的な性格が全く意味を失ってしまう。ところで、与えられた文章を等質的な単位に句切り分類する方法は、どんな点で等質かというその見方によって幾通りかあろう。われわれはもちろん、それが国語の現象、更に言えば語彙の使用状況を明らかにするという目的に照らして、妥当なように選ぶべきである。以上の事は語彙調査が科学として成り立つための必要条件だと言わなくてはならない。こういう根拠がはっきりしていなければ、調査結果を他に応用する際にも、応用の有効性が保証されない。もし役に立ったとしたら、それはまぐれ当りに過ぎないか、全然データがないより増しだという程度の事かである。

注 たとえば “The term ‘word count’ denotes the determination by counting of the frequencies of particular words used in a linguistic text, or in samples from it.” (G. HERDAN, *Language as Choice and Chance*, 1956, p. 23)

## 付録 I

〔もし前者ならそれは科学ではないし、後者なら研究水準の低さのあかしである。〕

そこで以下に、語彙調査が成立する方法論的基礎を、もう少し掘り下げてみたい。その前に幾つかの基本的概念を定義する必要がある。すなわち

**単位語** 「語」と一般に呼ばれその存在が予期される単体として、実際の言語表現に実現したもの  $u$  を、**単位語**という。

単位語は、いわゆる単純語とは限らず、場合によっては複合語や語根・造語成分であってもさしつかえない。その内容的な定義は別に行えばよく、この調査では「 $\beta$  単位」と名づけて先に § 2・3 で述べたものを単位語と認めた。また計量的研究では、単位語を集合の元 (element) と考えると便利な事が多い。

**見出し語** 意味上形式上同じと見てよい元〔すなわち単位語〕から成る集合  $U$  を〔それらの単位語の〕**見出し語**という。

言語学的には、それらの単位語の集合から抽象した語形、あるいはその集合の呼び名として、「見出し語」の名称を使う方がよかるうが、集合自体をさすものと約束しても概念の混乱は起るまいから、上記のように定義した。

**使用度数** ある言語表現において認められるある見出し語  $U$  に属する元の数を、〔その言語表現での〕  $U$  の**使用度数**という。

**延べ語数** ある言語表現において認められるすべての見出し語の使用度数の和を、〔その言語表現の〕**延べ語数**という。

すなわちその言語表現で使われている単位語の総数が延べ語数である。またそれは、集合  $U$  の集合に属する元の数とも言い換えられる。

**使用率** 見出し語  $U$  についての使用度数  $f$  の、 $U$  を含む言語表現についての延べ語数  $n$  に対する、比の値  $p=f/n$  を〔その言語表現での〕  $U$  の**使用率**という。

従って  $0 \leq p \leq 1$  である。

**異なり語数** ある言語表現において認められるすべての見出し語の数を〔その言語表現の〕**異なり語数**という。

**語彙** ある言語表現において認められるすべての見出し語から成る集合を〔その言語表現の〕**語彙**という。

語彙は集合  $U$  の集合だとも言い換えられる。

なおこの報告書では、以上七つの概念は上記の意味に使った。また文脈などで自明と思われる場合には、単に「語」で「単位語」または「見出し語」をさしたこともある。

立ち返って、語彙調査で使用率が測れるための条件——語彙調査が科学的操作として意味をもつための根拠になる事柄を考えよう。それは、この付録 I の最初に述べた三つの事柄に対応して、次の三つの群の七つの事柄に帰するように思われる。

### 単位語認定の可能性

1° 任意の単位語  $u$  が同時に異なった位置を占めることがない。—— $u$  が必ず一続きのま

とまりを成し、その間に別の単位語  $u'$  が割ってははいらない。

- 2° 任意の単位語  $u_1, u_2$  が同時に同じ位置を占めることがない。  
 3° 任意の言語表現に対して、表現の意味を指定すれば、そこでの延べ語数がただ一通りに定まる。

#### 見出し語認定の可能性

- 4° 任意の単位語  $u_1$  と  $u_2$  について  $u_1 \equiv u_2$  か、 $u_1 \neq u_2$  かのどちらか一方だけが成り立つ。ここに

$u_1 \equiv u_2$  とは  $u_1 \in U$  かつ  $u_2 \in U$  のことであり、

$u_1 \neq u_2$  とは  $u_1 \in U_1, u_2 \in U_2$  で  $U_1 \cap U_2$  が空集合 となることである。

- 5° 任意の言語表現に対して、表現の意味を指定すれば、そこでの異なり語数がただ一通りに定まる。

#### 計量的操作の可能性

- 6° 使用度数、従って延べ語数には算術的な演算が施せる。  
 7° 異なり語数には集合論的な演算が施せる。

理想的な単位語認定法は少なくとも上記の 1°~3° を満たさなければならず、理想的な単位語分類法は少なくとも上記の 4°~5° を満たさなければならない。<sup>註</sup> ところで 2° については、一見そのままでは適合しないような言語現象がある。たとえば「菊五郎」「殺人を覗く男」のような二重表記、「来ぬ人をまつほの浦の」「あとしら浪と消え失せる」のような懸詞である。これらは普通の用語の習慣に意図的に逆らった所に表現価値を生じている。そしてこれらは上記 4°~5° についても難関となる。何とか解決を見つけなければ、調査の方法論的基礎をくずしてしまう。なるべく他と矛盾しない扱い方を定め、上記の七条件が操作上満たされるようにしなければならない。たとえば、二重表記は、その一方の形が本体であり他方がその意味の注記の働きを受け持つと見なせる。そこでその本体と見なせる方だけを採る、つまり上の例では「ろくだいぬ」「殺人を覗く男」の方の形を採りもう一方を捨てることに約束するというのが、一つの解決策である。また懸詞は音の連想を利用した表現である。従って連想される語形の方は無視する、つまり、「待つ」ではなく「松帆」を、「知ら(ず)」ではなく「白浪」を採ることに約束するというのが、一つの解決策である。それはちょうど、「紫」という語が文脈の中で「高貴」をさしているも、その語を色名として扱うのと同じ態度である。このような解決策を採れば、上記の例の場合も先の前提と矛盾を起さない。

そしてこれらの前提条件を根拠として認めた上で、その線に沿って行われた語彙調査が、初めて意味をもつ。ある語の使用率の大小が一往はその語の重要さの度合を測る目安になるといふ、従来暗黙のうちに認められて来た考え方も、上述のような根拠をそれとなく予期しての立言と思われる。

注 これは必要条件である。十分条件としては更に、その操作の結果が、われわれその言語を使う集団にとって不自然なものでなく、かつ国語学上も意味のあるものでなければならない。

## 付録Ⅱ この調査で採った抽出・推定法

### 1 抽出・推定の方針

この調査の標本抽出に当って考えるべき条件は、次のようなものであった。

- 1° 調査対象とした範囲の雑誌群における、個々の語の使用率を推定する。雑誌は更にその性格によって層に分け、層での使用率も求める。
- 1' 雑誌別の使用率を求めることは、調査目的に照らして余り意味があるまいから、行わない。また調査対象を通じて施した記事別ごとの使用率を求めることは意義があろうが、実際上記事分類の作業が困難な割には良い結果が得難いから、これも行わない。
- 2° 「最終」抽出単位を「語」にすることは作業の実際上出来ないから、雑誌の形態を利用して「ページ」のようなものにする。
- 3° 調査対象の延べ語数が正確には分らないから、比推定を使う。
- 4° 調査能力と考え合わせて標本の大きさは二十五万語程度とする。〔なお調査対象全体の延べ語数は約九百万と推定された。〕
- 5° 使用率の推定だけでなく、なるべく色々な言語分析に便利な方式を選ぶ。
- 6° 使用率の大きな語については推定精度も算出したいので、なるべく精度計算に手間のかからない方式を選ぶ。

既にわれわれは語彙の抽出調査を二つ経験している。一つは婦人雑誌調査で、ページを抽出単位とする層別一段抽出法を用いた〔国研報告4 §2・52 参照〕。他は、今回の調査の準備として延べ二万語の標本によりおもに方法論を検討した調査で、雑誌の号を第一次抽出単位、ページを最終抽出単位として、確率比例二段抽出法を用いた。これらを比べれば次の事が分る。同じ大きさの標本を取る時、

精度の点では一段抽出がすぐれている。

計算の手間では確率比例抽出がすぐれている。

そこで両者の利点を兼ね備えた抽出法をくふうすべきである。この観点から次の事が考えられる。

集落の大きさが等しければ、集落の確率比例抽出は等確率抽出と同じ事になる。

等大の集落の形成がランダムに行われていれば、集落抽出法による精度は平均として一段抽出法の場合と等しい。<sup>註)</sup>

ゆえに、もし最終抽出単位の random selection によって等大の集落が作れば、等確率でこういう集落を抜いた場合の平均精度は、最終単位をそれと同数だけ抜く一段抽出



付録Ⅱ

法の場合とほぼ等しい。

以上の考察の結果、すべての集落が同数のページ、従って大体同数の語を含むようにページをランダムに組み合わせ、こうして作った集落から必要数をランダムに抜き、抜かれた集落を含む本文のすべての語を調べるという方針を立てた。

2 抽出三方式の比較

上述の三方式以外にも抽出法は色々考えられるが、作業の実際とにらみ合わせれば、一往この三つの優劣を見るだけでよからう。結論を表にして示せば、

比較項目	一段抽出法	確率比例二段抽出法	等大の集落抽出法
抽出台帳の作成	すべてのページをリストする必要がある。	抽出された号だけ、ページをリストすればよい。	すべてのページをリストする必要がある。
抽出の操作	三者中最も簡単。	号の抽出がやや複雑。かつ号の本文ページ数を正確に知っていないとわからない。	ランダムに集落を形成する手間がかかる。
使用率の推定	他の二者よりやや手間がかかる。	一段抽出法よりやや手間が省ける。	一段抽出法よりやや手間が省ける。
推定精度	三者とも場合により優劣がある。		
精度計算	他の二者より手間がかかる。	比較的簡単。	比較的簡単。

表に見る通り、等大の集落抽出法はかなりすぐれた方式である。一段抽出法は集計にやや手間

注 【証明】母集団が  $M(=LM_0)$  個の元  $X_\nu$  から成っていて、その母平均が  $\bar{X} \equiv \sum_{\nu=1}^M X_\nu / M$ 、母分散が

$\sigma^2 \equiv \sum_{\nu=1}^M (X_\nu - \bar{X})^2 / M$  だとしよう。ここから  $m = IM_0$  個の元を、重複を許さず等確率で抜いた時の標

本平均を  $\bar{x} \equiv \sum_{\nu}^m x_\nu / m$  とすれば、

$$V(\bar{x}) = \frac{M-m}{M-1} \frac{\sigma^2}{m}$$

次にこの母集団から重複を許さず等確率に  $M_0$  個の元を抜いて集落とし、順次この操作を続けて  $L$  個の集落を作る。そのうちの  $l$  個を抜いて、改めて  $\bar{X}$  を推定する。この場合もちろん、母平均・母分散は前の場合と同じである。さて  $\bar{X}$  の推定量に  $\bar{x} \equiv \sum_j^L \sum_{k=1}^{M_0} X_{jk} / LM_0 = \sum_j^L \bar{X}_j / l$  を採れば

$$V(\bar{x}) = \frac{L-l}{L-1} \frac{1}{l} V(\bar{X}_j), \quad \text{ここに } V(\bar{X}_j) \equiv \frac{1}{L} \sum_{j=1}^L (X_j - \bar{X})^2$$

この  $V(\bar{X}_j)$  は、集落を作る時の元の組み合わせ方によって動く数値、すなわち変量である。従って  $V(\bar{x})$  もまた変量となる。そこでこの期待値を算出しよう。まず

$$E[V(\bar{X}_j)] = \frac{1}{L} \sum_{j=1}^L E[(X_j - \bar{X})^2] = \frac{1}{L} \sum_{j=1}^L \frac{M-M_0}{M-1} \frac{\sigma^2}{M_0} = \frac{M-M_0}{M-1} \frac{\sigma^2}{M_0}$$

$$\therefore E[V(\bar{x})] = \frac{L-l}{L-1} \frac{1}{l} E[V(\bar{X}_j)] = \frac{L-l}{L-1} \frac{M_0(L-1)}{M-1} \frac{\sigma^2}{LM_0} = \frac{M-m}{M-1} \frac{\sigma^2}{m}$$

従って  $E[V(\bar{x})] = V(\bar{x})$  を得る。

付録Ⅱ

がかかり、ことに精度計算では他の二方式より相当不利である。〔推定式自身は他と同等に簡単な形であるが、実際に計算を行う手数はかなり多い。〕集計に手間がかからない確率比例抽出法には、また別の難点がある。それは雑誌の各号の本文ページ数が正確にはつかみ難い事である。〔雑誌に打ってあるページの最終ノンブルでは正確とは言えない。もし各号実際に調べて調べるとなると、リスティングが他の方式より簡単とは言われない。〕もし本文ページ数を最終ノンブルで代用すれば、推定値にはこれに基づく片寄りが入り込み、しかもその程度は場合によっては無視出来ない事がある。それを修正する推定法を使うと、集計がすこぶる複雑になる。これらを考えると、第一の集落抽出法が有利である。ただしこの方式にも難点がない訳ではない。第一に調査対象全体にわたってページをリストするの必要があり、対象が大きい時の労力は大変なものである。第二に  $M=LM_0$  の関係を厳密に満たすような集落の大きさ  $M_0$  が定められない事の多い点である。しかし  $M_0$  がかなり大きければ、若干個の集落に生ずる高々1ページの食い違いは無視出来よう。——以上の考察の結果、今回の調査では、ランダムに形成した等大の集落を等確率で抜く方式を採用した。

3 等大の集落抽出法による使用率の推定

3・1 記号法の約束

以下に使う記号を、改めて次の表の通り約束する。なお記号  $S$  は各層にわたって取った和、つまりある量を第1層から第  $R$  層まで加え合わせることを意味する。また  $r_i (\equiv L_i/l_i)$  は第  $i$  層の抽出間隔（従って拡大乗数）であって、標本を各層に比例配分する時、これは  $r (\equiv L/l)$  に等しい。添え字  $i$  は層を、 $j$  は集落をさすものとする。従って  $ij$  は第  $i$  層の第  $j$  番目の集落を表わすことになる。

項 目	母 集 団	標 本
集落の総数	$L = \sum L_i$	$l = \sum l_i$
第 $i$ 層の集落数	$L_i$	$l_i$
第 $i$ - $j$ 集落の使用度数	$X_{ij} \quad (i=1, 2, \dots, R)$	$f_{ij} \quad (i=1, 2, \dots, R)$
第 $i$ - $j$ 集落の延べ語数	$Y_{ij} \quad (j=1, 2, \dots, L_i)$	$n_{ij} \quad (j=1, 2, \dots, l_i)$
第 $i$ 層の使用度数	$X_i = \sum_{j=1}^{L_i} X_{ij}$	$f_i = \sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}$ $x_i = r_i f_i \quad E(x_i) = X_i$
第 $i$ 層の延べ語数	$Y_i = \sum_{j=1}^{L_i} Y_{ij}$	$n_i = \sum_{j=1}^{l_i} n_{ij}$ $y_i = r_i n_i \quad E(y_i) = Y_i$
全体の使用度数	$X = \sum X_i$	$f = \sum f_i$ $x = \sum x_i = \sum r_i f_i$ [一般の場合] $= r f$ [比例配分の場合] どちらにしても $E(x) = X$
全体の延べ語数	$Y = \sum Y_i$	$n = \sum n_i$ $y = \sum y_i = \sum r_i n_i$ [一般の場合]

付録Ⅱ

		=rn [比例配分の場合] どちらにしても E(y)=Y
第 i 層の集落当り平均使用度数	$\bar{X}_i = X_i/L_i$	$\bar{x}_i = f_i/l_i$ $E(\bar{x}_i) = \bar{X}_i$
第 i 層の集落当り平均延べ語数	$\bar{Y}_i = Y_i/L_i$	$\bar{y}_i = n_i/l_i$ $E(\bar{y}_i) = \bar{Y}_i$
第 i 層の使用度数の母分散	$\sigma^2(X_{ij}) = \frac{1}{L_i} \sum_{j=1}^{L_i} (X_{ij} - \bar{X}_i)^2$	* * *
第 i 層の延べ語数の母分散	$\sigma^2(Y_{ij}) = \frac{1}{L_i} \sum_{j=1}^{L_i} (Y_{ij} - \bar{Y}_i)^2$	* * *
第 i 層の共分散	$\gamma(X_{ij}, Y_{ij}) = \frac{1}{L_i} \sum_{j=1}^{L_i} (X_{ij} - \bar{X}_i)(Y_{ij} - \bar{Y}_i)$	* * *

3・2 第 i 層での使用率の推定

母使用率  $P_i \equiv X_i/Y_i$  に対して次の推定量を採る：

$$(01) \quad p_i \equiv \frac{x_i}{y_i} = \frac{r_i f_i}{r_i n_i} = \frac{f_i}{n_i}.$$

これは片寄りのある推定量である。

そこで信頼幅をつけるためには、平均二乗誤差  $\tau^2(p_i)$  を考える。

$$(02\cdot1) \quad \tau^2(p_i) \doteq P_i^2 \left\{ \frac{V(x_i)}{X_i^2} + \frac{V(y_i)}{Y_i^2} - 2 \frac{C(x_i, y_i)}{X_i Y_i} \right\};$$

$$\begin{aligned} \text{ここに} \quad V(x_i) &= V(r_i f_i) = V(L_i \bar{x}_i) \\ &= L_i^2 \frac{L_i - l_i}{L_i - 1} \frac{\sigma^2(X_{ij})}{l_i}, \\ V(y_i) &= L_i^2 \frac{L_i - l_i}{L_i - 1} \frac{\sigma^2(Y_{ij})}{l_i}, \\ C(x_i, y_i) &= L_i^2 \frac{L_i - l_i}{L_i - 1} \frac{\gamma(X_{ij}, Y_{ij})}{l_i}. \end{aligned}$$

式 (02・1) の両辺を  $P_i^2$  で割れば、相対誤差を二乗したものとなる。すなわち

$$(02\cdot2) \quad \left\{ \frac{\tau(p_i)}{P_i} \right\}^2 \doteq \frac{V(x_i)}{X_i^2} + \frac{V(y_i)}{Y_i^2} - 2 \frac{C(x_i, y_i)}{X_i Y_i}.$$

この式の右辺の値を標本から推定して  $t^2(p_i)$  が得られたとすれば、信頼度  $\alpha$  パセントで母使用率を推定するには、式 (3) によって上限・下限が定まる区間を用いればよい。

$$(03) \quad p_i \{1 \pm k_a t(p_i)\}, \quad \text{この } k_a \text{ はたとえば水野の不等式(註) から定まる。}$$

さて  $t(p_i)$  を求めるために、まず  $s_i^2(\xi)$ ,  $s_i^2(\eta)$ ,  $c_i^2(\xi, \eta)$  を式 (04) の通りの定義する。

$$(04) \quad \begin{aligned} s_i^2(\xi) &\equiv \frac{1}{l_i - 1} \sum_{j=1}^{l_i} (f_{ij} - \bar{x}_i)^2, & s_i^2(\eta) &\equiv \frac{1}{l_i - 1} \sum_{j=1}^{l_i} (n_{ij} - \bar{y}_i)^2, \\ c_i^2(\xi, \eta) &\equiv \frac{1}{l_i - 1} \sum_{j=1}^{l_i} (f_{ij} - \bar{x}_i)(n_{ij} - \bar{y}_i). \end{aligned}$$

これらについては次の関係が成り立つ：

注 水野坦「或不等式群について(一)」『統計数理研究所講究録』5巻9号。

付録 I

$$E[s_i^2(\xi)] = \frac{L_i}{L_i - 1} \sigma^2(X_{ij}), \quad E[s_i^2(\eta)] = \frac{L_i}{L_i - 1} \sigma^2(Y_{ij}),$$

$$E[c_i(\xi, \eta)] = \frac{L_i}{L_i - 1} r(X_{ij}, Y_{ij}).$$

従って

$$\begin{aligned} \sigma^2(X_{ij}) &\sim \frac{L_i - 1}{L_i} s_i^2(\xi) = \frac{L_i - 1}{L_i} \frac{1}{l_i - 1} \left( \sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}^2 - \frac{f_i^2}{l_i} \right). \\ (05) \quad \therefore V(x_i) &\sim \frac{L_i}{l_i} \frac{L_i - l_i}{l_i - 1} \left( \sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}^2 - \frac{f_i^2}{l_i} \right) \\ &= r_i(r_i - 1) \frac{l_i}{l_i - 1} \left( \sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}^2 - \frac{f_i^2}{l_i} \right). \end{aligned}$$

他の二つについても同様。そこで  $X_i, Y_i$  の推定値として  $x_i = r_i f_i, y_i = r_i n_i$  を採れば、

$$\begin{aligned} \frac{V(x_i)}{X_i^2} &\sim \left(1 - \frac{1}{r_i}\right) \frac{l_i}{l_i - 1} \left( \frac{\sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}^2}{f_i^2} - \frac{1}{l_i} \right), \\ (06) \quad \frac{V(y_i)}{Y_i^2} &\sim \left(1 - \frac{1}{r_i}\right) \frac{l_i}{l_i - 1} \left( \frac{\sum_{j=1}^{l_i} n_{ij}^2}{n_i^2} - \frac{1}{l_i} \right), \\ \frac{C(x_i, y_i)}{X_i Y_i} &\sim \left(1 - \frac{1}{r_i}\right) \frac{l_i}{l_i - 1} \left( \frac{\sum_{j=1}^{l_i} f_{ij} n_{ij}}{f_i n_i} - \frac{1}{l_i} \right). \end{aligned}$$

さて式 (02・2) で式 (06) の左辺の形をしている所に、式 (06) の右辺を代入して得られる推定値を  $t^2(p_i)$  とすれば、

$$(07) \quad t^2(p_i) = \left(1 - \frac{1}{r_i}\right) \frac{l_i}{l_i - 1} \left( \frac{\sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}^2}{f_i^2} + \frac{\sum_{j=1}^{l_i} n_{ij}^2}{n_i^2} - \frac{\sum_{j=1}^{l_i} f_{ij} n_{ij}}{f_i n_i / 2} \right).$$

### 3・3 全体での使用率の推定 (一般の場合)

母使用率  $P \equiv X/Y$  に対して推定量

$$(08) \quad p \equiv \frac{\bar{v}}{\bar{y}} = \frac{Sx_i}{Sy_i} = \frac{Sr_i f_i}{Sr_i n_i}$$

を採り、前節と同様に

$$(09) \quad p\{1 \pm kat(p)\}$$

で上限・下限の定まる区間をもって推定する。ここに  $ka$  は式 (03) と同じもの、 $t(p)$  は相対誤差  $\tau(p)/P$  を標本値から推定したものである。

そこで

$$(10\cdot1) \quad \tau^2(p) \doteq P^2 \left\{ \frac{V(x)}{X^2} + \frac{V(y)}{Y^2} - 2 \frac{C(x, y)}{XY} \right\}.$$

ここに  $V(x) = V(Sx_i) = SV(x_i), V(y) = SV(y_i), C(x, y) = SC(x_i, y_i)$  ゆえ、

$$(10\cdot2) \quad \left\{ \frac{\tau(p)}{P} \right\}^2 \doteq \frac{SV(x_i)}{X^2} + \frac{SV(y_i)}{Y^2} - 2 \frac{SC(x_i, y_i)}{XY}.$$

付録Ⅱ

この式の右辺の分子を式 (05) およびそれに相当する式で置き換え、分母も  $x, y$  で置き換えると、

$$(11) \quad t^2(p) = Sr_i(r_i-1) \frac{l_i}{l_i-1} \left\{ \frac{\sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}^2 - \frac{f_i^2}{l_i}}{x^2} + \frac{\sum_{j=1}^{l_i} n_{ij}^2 - \frac{n_i^2}{l_i}}{y^2} - \frac{\sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}n_{ij} - \frac{f_i n_i}{l_i}}{xy/2} \right\}.$$

3・4 全体での使用率の推定 (比例配分の場合)

各層への標本の割当をその層の集落数に比例させると、式 (08), (11) に当る式は次の通り簡単化される：

$$(12) \quad p \equiv \frac{x}{y} = \frac{Srf_i}{Srn_i} = \frac{rf}{rn} = \frac{f}{n};$$

$$(13) \quad t^2(p) = \left(1 - \frac{1}{r}\right) S \frac{l_i}{l_i-1} \left\{ \frac{\sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}^2 - \frac{f_i^2}{l_i}}{f^2} + \frac{\sum_{j=1}^{l_i} n_{ij}^2 - \frac{n_i^2}{l_i}}{n^2} - \frac{\sum_{j=1}^{l_i} f_{ij}n_{ij} - \frac{f_i n_i}{l_i}}{fn/2} \right\}.$$

4 実際の抽出

実際に標本を抜くには、調査対象のすべての本文ページをリストすると共に、集落の大きさ  $M_0$  をどの程度にするかを決めなくてはならない。そのために、この抽出法の精度を一段抽出法の場合と比べてみよう。便宜上層別を施さない場合について扱えば、前節 3・32 の考え方によって

$$\tau^2(p) \equiv P^2 \frac{L}{l} \frac{L-l}{L-1} \left\{ \frac{\sigma^2(X_j)}{X^2} + \frac{\sigma^2(Y_j)}{Y^2} - 2 \frac{r(X_j Y_j)}{XY} \right\}.$$

また大きさ  $M$  ページの調査対象からランダムに  $m$  ページを抜いて  $p' \equiv \sum_{\nu}^m X_{\nu} / \sum_{\nu}^m Y_{\nu}$  で  $P$  を推定する方式、つまり一段抽出法の場合の平均二乗誤差は

$$\tau^2(p') \equiv p'^2 \frac{1}{m} \frac{M-m}{M-1} \left\{ \frac{\sigma^2(\xi)}{X^2} + \frac{\sigma^2(\eta)}{Y^2} - 2 \frac{r(\xi, \eta)}{XY} \right\};$$

ここに  $\bar{X} \equiv \sum_{\nu=1}^M X_{\nu} / M$ ,  $\bar{Y}$  も同様;  $\sigma^2(\xi) \equiv \sum_{\nu=1}^M (X_{\nu} - \bar{X})^2 / M$ ,  $\sigma^2(\eta)$ ,  $r(\xi, \eta)$  も同様。さて双方とも同じ調査対象から等しい大きさの標本を取ったとして、すなわち、 $M = LM_0$ ,  $m = LM_0$  の条件のもとに、 $\tau^2(p)$  と  $\tau^2(p')$  との大小を比べよう。比較の便のため上の二式を变形する。まず

$$\sigma^2(\xi) \equiv \frac{1}{M} \sum_{\nu=1}^M (X_{\nu} - \bar{X})^2 = \sum_{j=1}^L \sum_{k=1}^{M_0} \{X_{jk} - \bar{X}_j\} + (\bar{X}_j - \bar{X})^2$$

ただし  $\bar{X}_j \equiv \frac{1}{M_0} \sum_{k=1}^{M_0} X_{jk}$ ,

$$= \sum_{j=1}^L \frac{M_0}{M} \sum_{k=1}^{M_0} (X_{jk} - \bar{X}_j)^2 + \sum_{j=1}^L \frac{M_0}{M} (\bar{X}_j - \bar{X})^2 = \sigma_w^2(\xi) + \sigma_b^2(\xi).$$

同様に  $\sigma^2(\eta) = \sigma_w^2(\eta) + \sigma_b^2(\eta)$ ,  $r(\xi, \eta) = r_w(\xi, \eta) + r_b(\xi, \eta)$ . そこで

$$\varphi_w = \frac{\sigma_w^2(\xi)}{\bar{X}^2} + \frac{\sigma_w^2(\eta)}{\bar{Y}^2} - 2 \frac{r_w(\xi, \eta)}{\bar{X}\bar{Y}}, \quad \varphi_b = \frac{\sigma_b^2(\xi)}{\bar{X}^2} + \frac{\sigma_b^2(\eta)}{\bar{Y}^2} - 2 \frac{r_b(\xi, \eta)}{\bar{X}\bar{Y}}$$

と置けば、 $\tau^2(p')$  は

付録 II

$$(*) \quad \tau^2(p') \doteq P^2 \frac{M_0(L-l)}{M-1} \frac{\varphi_w + \varphi_b}{lM_0} = \frac{P^2}{M-1} \frac{L-l}{l} (\varphi_w + \varphi_b).$$

次に  $X = M\bar{X}$ ,  $X_j = M_0\bar{X}_j$ ,  $\sigma^2(X_j) = M_0^2\sigma^2(\bar{X}_j) = M_0^2 \sum_{j=1}^L (\bar{X}_j - \bar{X})^2 / L$  の関係に注意すれば、

$$\frac{L^2\sigma^2(X_j)}{X^2} = \frac{L^2}{M^2} \frac{M_0^2}{L} \frac{\sum_{j=1}^L (\bar{X}_j - \bar{X})^2}{\bar{X}^2} = \frac{\sum_{j=1}^L \frac{M_0}{M} (\bar{X}_j - \bar{X})^2}{\bar{X}^2} = \frac{\sigma_b^2(\xi)}{\bar{X}^2}.$$

他も同様。従って  $\tau^2(p)$  は

$$(**) \quad \tau^2(p) \doteq \frac{P^2}{L-1} \frac{L-l}{l} \varphi_b.$$

そこで式 (\*), (\*\*) から

$$\frac{\tau^2(p')}{\tau^2(p)} = \frac{L-1}{M-1} \left( \frac{\varphi_w}{\varphi_b} + 1 \right).$$

ゆえに  $\tau^2(p) < \tau^2(p')$  になる [実用上の] 条件は

$$\frac{\varphi_w}{\varphi_b} > \frac{L}{L-1} (M_0 - 1) = \frac{M(M_0 - 1)}{M - M_0};$$

または  $\frac{\varphi_w}{\varphi_b} > M_0$ , ただし  $L$  も  $M_0$  も十分大きい場合。

この条件を満たすような  $M_0$  を選べば、等大の集落抽出法は一段抽出法より高い精度となる。われわれはもちろん、出来るならばそういう大きさの集落をランダムに形成するのがよい。しかしこれには実際上三つの困難がある。第一は、推定すべき使用率がただ一つではないため、ある語について上記の条件を満たしても、他の語については必ずしも満たされない事である。これは、使用率の大きい大部分で条件を満たすような  $M_0$  を採ることにより、一往は解決される。ところで第二に、個々の語について  $\varphi_w$  や  $\varphi_b$  の値が分っていない事である。ただしわれわれは今回の調査に先立って、延べ約二万語の準備調査をした。その結果から大体的見当はつく。そこで50語を抽出して  $\varphi_w/\varphi_b$  を算出しその平均を取ったところ、 $M_0$  を10ページぐらいにすれば良さそうだとの見通しが立った。第三には、 $M = LM_0$  の関係が一般に成り立つとは言えない事である。しかも雑誌の各ページの延べ語数は相当まちまちである。そこで次の方法を採った。集落の構成要素は何もページにしなくてもよい。たとえばページの半分の面積を選ぶことも出来る。[この方が、語の出方の文脈による影響が幾分小さくなる。] その代り一集落は「1/2ページ」20個から成ると考えるのである。<sup>注)</sup> こうして構成要素を操作的に定めた上は、ページの方も与えられたままの形による必要はない。余り言葉数を含まないページ——大きな広告や図などのはいつているページ、グラビアや漫画のページなど——は適宜二ページ以上を合わせて、全ページ本文の所と延べ語数に大差がないように、操作的なページを作る。ここに採用しようとしている抽出法で大切な点は、各集落の延べ語数がほとんど等しい事であって、その期待のもとに等大の集落を作ろうとした訳である。従ってこういう「操作ページ」を

注 ページ単位にした時  $M_0=10$  で良さそうだからと言って、1/2ページ単位にした時  $M_0=20$  で同様に前記の条件を満たすかどうかは分らない。しかし手もとにそれを確かめるデータがないので、今回はこう決めた。

付録Ⅱ

適当に作ることによって  $M=LM_0$  になるようにした。

実際の手続きは以下に述べる通りである。

既に §2・2 で示したように、調査対象は雑誌の性格によって三つの層に分けてある。そこで各層ごとに本文ページを、文字の部分が占める面積  $S$  の割合が  $1 \geq S > 2/3$ ,  $2/3 \geq S \geq 1/3$ ,  $1/3 > S > 0$  の三種に分けた。その第一種のもは実際の1ページをそのまま操作ページとし、第二種は  $2/3$  に近い実際のページと  $1/3$  に近いページとをなるべく合わせ、2ページのセットを1操作ページとし、第三

種は実際の4ページを仮に1操作ページと見なして、まず概算の操作ページ数を求めた。その値は右の表の初めの欄の通りである。この値によって各層ごとの集

区 分	概算操作 ページ数	作った 実数	集落数 の割合	割り当 てた値	抽 出 集 落	抽 出 間 隔
第Ⅰ層	10316	1032	.4957	27.8	28	36.86
第Ⅱ層	4487	450	.2161	12.1	12	37.50
第Ⅲ層	5972	600	.2882	16.1	16	37.50
全 体	20775	2082	1.0000	56.0	56	37.18

落総数  $L_i$  が決められる。抽出台帳のリスティングは次のようにした。操作ページ20個をランダムに抜いて組にすれば、これは2個の集落を含む訳である。こういう組を便宜上の単位としてリストした。その方法は、同一層の雑誌の号をランダムに並べ、その順に従って、操作ページのうち第一種・第二種のを、第1番目の操作ページから第  $\mathcal{L}_i (\equiv L_i/2)$  番目の操作ページまでまずリストする。第  $(\mathcal{L}_i+1)$  番目は第  $\mathcal{L}_i$  番目の下に、第  $(\mathcal{L}_i+2)$  番目は第  $(\mathcal{L}_i-1)$  番目の下に、…、第  $2\mathcal{L}_i$  番目は第1番目の下にといい風に折り返して書き、以下同様にジグザグに進む。これが済んだら、以上のリスティングで操作ページが20個に満たなかつた組に、その分だけ第三種のを〔先に述べた換算のための4ページのセットにかかわりなく〕適宜何ページ分かで操作ページを作りつつ埋めて行く。こういう方法で、各集落の延べ語数なるべく等しくなるように、 $L_i/2$  個すなわち  $\mathcal{L}_i$  個の組を形成した。

ここから標本として  $l_i$  個の集落を抽出するには、次の手続きを用いた。

- 1°  $\mathcal{L}_i$  個からランダムに  $l_i$  個を抜く。——乱数表で1から  $2\mathcal{L}_i (\equiv L_i)$  までの範囲にある数字列を、重複しないように  $l_i$  個選び、その番号が1ないし  $\mathcal{L}_i$  なら抽出台帳のその番号の組を取り「右半」と記入する。もし  $(\mathcal{L}_i+1)$  ないし  $2\mathcal{L}_i$  ならそれから  $\mathcal{L}_i$  を引いた組を取り「左半」と記入する。
- 2° 上記の操作で抜かれた組の「右半」なり「左半」なりによって集落を決定する。その組20個の各操作ページから、次の方法で決めた部分を集める。

- i 第一種・第二種の操作ページでは、各段の行を二分してその右半部か左半部かを採る。

行数が奇数なら中央の行の字数を二分する。字数も奇数なら中央の字をどちらの部分に含めるかをトスで決める。<sup>註)</sup> そのページが  $(2g+1)$  行三段組なら、第一段が右半部  $(g+1)$  行、左半部  $g$  行、第三段が右半部  $g$  行、左半部  $(g+1)$

## 付録Ⅱ

行と認め、第二段についてだけ上の操作で決める。

標題を含む場合はその部分を第一段に入れ、相当数の行に換算して扱う。

ii 第三種の操作ページについては、実際のページを単位にして、記事の延べ語数がほぼ等量になるように二分し、その一を採る。

3° 以上の操作で確定した部分につき、そこに含まれる本文のうち、 $\beta$  単位として完全な形で現われる最初の語から、少くとも第一字目がこの部分に現われる  $\beta$  単位までの各  $\beta$  単位を、採集範囲とする。

以上の方法で採集範囲を決定した。抽出集落数等は先の表に示して置いた。

### 5 集計の方式

従来調査経験にかんがみて、今回の調査では新たに次のような集計方式を試みた。標本の集落を、等しい数の二つの部分標本にランダムに振り分けて置き、推定すべき各語については次の段階を踏む。

1° 半数を整理した結果から、各層および全体での使用率を推定する。

2° その推定値が目標精度を満たすか否かを確かめる。

3° 満たせば、その語の調査は一般にそこまでで打切る。満たさなければ、一般に残り半数を調べた上で再推定する。

なぜこういう集計方式を採ったかと言うと、どんな記事にもよく使われる少数の語は、他に比べて大きな使用率をもっていて、全標本を調べないでもかなりよい推定精度が得られるからである。もし半数の部分の調査で打ち切ってよければ、あと半分の調査が省けるから、調査能率がかなり上がる。しかもそういう語については後半まで調べても、前半で打切った場合より精度が著しく高まるという事はない。この理由で上述の方針を立てた。

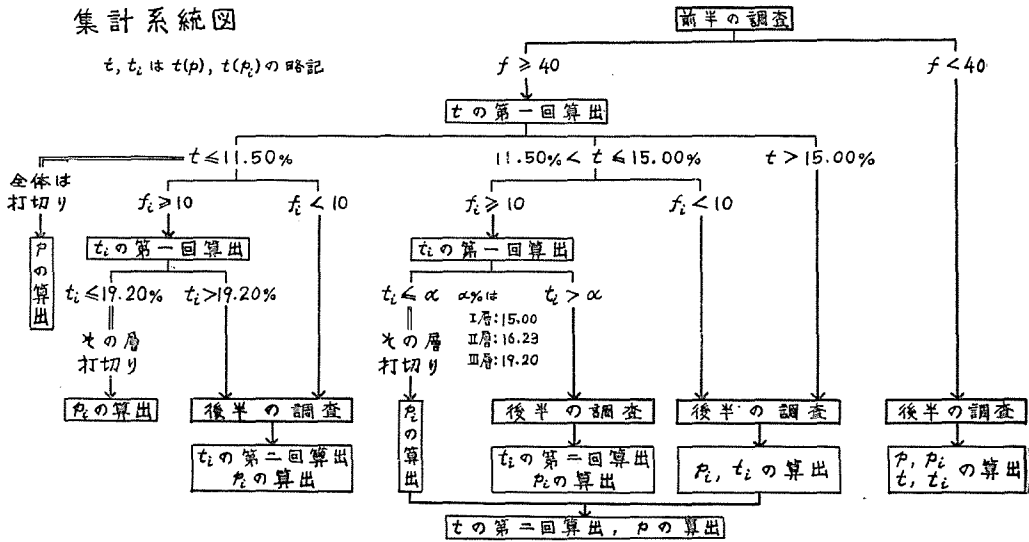
この方針によって集計する場合は、どの語がどういう集計の扱いを受けるかを決めなければならない。その手順は図示した方が分かりやすいから、次のページに図で示す。

この方式では、前半部の調査を終えた時、標本使用度数が40未満の語は後半まで調査を続け、40以上の語は精度を算出しその値によって打ち切りか否かを定める。40を境にしたのは全く経験的な理由であって、予備的に二十語ほど抜いて精度を調べた結果、40未満の語では前半で調査を打ち切ってよいものがほとんど出なかったからである。次に推定値に信頼幅を水野の不等式によってつける時、95パーセントの信頼度を持たせるには式 (03), (09) の  $h_a$  を 2.6 に取ればよい。ここで信頼幅の半分が推定値の30パーセント、40パーセント、50パーセントになるのは、相対精度がそれぞれ 11.54, 15.38, 19.23 パーセントの時である。従ってこれらよりややきつい 11.50, 15.00, 19.20 パーセントを、調査を打ち切るか否かの判定の境目とした。また  $\alpha$  については別の考え方も入れた。すなわち標本の大きさが、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ層で7:3:4の比を成すから、

注 原理はこう定めてあるが、実際上は 3° の規定によって、その字をどちらの部分に含めても本文採集範囲には影響がなく、従ってトスで決めるに及ばない場合もある。



集計系統図



最小の層である第Ⅱ層での許容限界を 19.20 パセントに定め、第Ⅲ層は  $19.20 \times \sqrt{3/4} = 16.23$  にした。第Ⅰ層について同様に  $19.20 \times \sqrt{3/7}$  を求めると 12.57 となり、これではきびし過ぎるから 15.00 を採った。また  $f_i$  を 10 を境に二分したのは、 $f_i$  がポアソン分布に従うとの仮定のもとに、変異係数が 0.3 より小さくなるような値という理由である。

以上の集計方式を採用すれば、個々の語の各層ごとの使用率推定については新たに述べるものはないが、全体での使用率推定については次の四つの場合が生じる。

- i 三層とも後半まで調べた場合、
- ii 一層だけ前半で打切った場合、
- iii 二層だけ前半で打切った場合、
- iv 三層とも前半で打切った場合。

これらについてもう少し考えよう。ここで改めて、後半まで調べる場合の抽出間隔を

$$r_{i0} = \frac{L_i}{L_{i0}} \approx \frac{L}{l_0} = r_0$$

と書く。第  $i$  層を前半で打切った場合の標本の大きさは  $l_{i0}/2$  ゆえ、この場合の抽出間隔は  $2r_{i0} \approx 2r_0$  となる。この事に注意して、全体での推定に実際に使った式を示そう。

5・1 各層での推定式

前半で打切ると否とにかかわらず、式 (01), (07), (03) によればよい。すなわち

$$(01) \quad p_i = \frac{f_i}{n_i};$$

$$(07') \quad t^2(p_i) = A^{(h)} B_i^{(h)} \left\{ \frac{\sum_j f_{ij}^2}{f_i^2} + \frac{\sum_j n_{ij}^2}{n_i^2} - \frac{\sum_j f_{ij} n_{ij}}{\frac{1}{2} f_i n_i} \right\},$$

ただし、後半まで続けた時  $h=1$ , 前半で打切った時  $h=2$  として、

付録 II

$$A^{(1)} = 1 - \frac{1}{r_0}, \quad B_i^{(1)} = \frac{l_{i0}}{l_{i0} - 1};$$

$$A^{(2)} = 1 - \frac{1}{2r_0}, \quad B_i^{(2)} = \frac{l_{i0}}{l_{i0} - 2}.$$

5・2 i か iv の場合の、全体での推定式

i の場合も iv の場合も式 (12), (13), (09) によればよい。

$$(12) \quad p = \frac{f}{n};$$

$$(13') \quad t^2(p) = A^{(k)} S_{B_i^{(k)}} \left\{ \frac{\sum_j f_{ij}^2 - \frac{hf_i^2}{l_{i0}}}{f^2} + \frac{\sum_j m_{ij}^2 - \frac{hn_i^2}{l_{i0}}}{n^2} - \frac{\sum_j f_{ij}n_{ij} - \frac{hf_in_i}{l_{i0}}}{\frac{1}{2}fn} \right\}$$

ただし、 $h, A^{(k)}, B_i^{(k)}$  は式 (07') と同じ。

5・3 ii の場合の、全体での推定式

前半で打切る層を  $\beta$ , 他の二層を一般に  $\alpha$  で表わすと、 $r_\beta/2 = r_\alpha$  ゆえ  $r_\beta \approx 2r_\alpha$  が成り立つ。そこで  $\alpha$  層 [二つある],  $\beta$  層 [一つ] の標本度数  $f_\alpha, f_\beta$  と  $n_\alpha, n_\beta$  とによって

$$\begin{aligned} x &\equiv S_{\alpha} x_i = S_{\alpha} r_0 f_\alpha + 2r_0 f_\beta \\ &= r_0 (S_{\alpha} f_\alpha + 2f_\beta) = r_0 f', \\ y &= r_0 (S_{\alpha} n_\alpha + 2n_\beta) = r_0 n'. \end{aligned}$$

ゆえに (08) 式から

$$(08 \cdot 1) \quad p = \frac{r_0 (S_{\alpha} f_\alpha + 2f_\beta)}{r_0 (S_{\alpha} n_\alpha + 2n_\beta)} = \frac{f'}{n'}.$$

また式 (11) から

$$\begin{aligned} (11 \cdot 1) \quad t^2(p) &= r_0(r_0 - 1) S_{\alpha} \frac{l_{\alpha 0}}{l_{\alpha 0} - 1} \left\{ \frac{\sum_j f_{\alpha j}^2 - \frac{f_\alpha^2}{l_{\alpha 0}}}{x^2} + \frac{\sum_j n_{\alpha j}^2 - \frac{n_\alpha^2}{l_{\alpha 0}}}{y^2} - \frac{\sum_j f_{\alpha j} n_{\alpha j} - \frac{f_\alpha n_\alpha}{l_{\alpha 0}}}{\frac{1}{2}xy} \right\} \\ &\quad + 2r_0(2r_0 - 1) \frac{l_{\beta 0}}{l_{\beta 0} - 1} \left\{ \frac{\sum_j f_{\beta j}^2 - \frac{2f_\beta^2}{l_{\beta 0}}}{x^2} + \frac{\sum_j n_{\beta j}^2 - \frac{2n_\beta^2}{l_{\beta 0}}}{y^2} - \frac{\sum_j f_{\beta j} n_{\beta j} - \frac{2f_\beta n_\beta}{l_{\beta 0}}}{\frac{1}{2}xy} \right\} \\ &= A^{(1)} S_{\alpha} B_{\alpha}^{(1)} \left\{ \frac{\sum_j f_{\alpha j}^2 - \frac{f_\alpha^2}{l_{\alpha 0}}}{f'^2} + \frac{\sum_j n_{\alpha j}^2 - \frac{n_\alpha^2}{l_{\alpha 0}}}{n'^2} - \frac{\sum_j f_{\alpha j} n_{\alpha j} - \frac{f_\alpha n_\alpha}{l_{\alpha 0}}}{\frac{1}{2}n'f'} \right\} \\ &\quad + (A^{(2)} + 3) B_{\beta}^{(2)} \left\{ \frac{\sum_j f_{\beta j}^2 - \frac{2f_\beta^2}{l_{\beta 0}}}{f'^2} + \frac{\sum_j n_{\beta j}^2 - \frac{2n_\beta^2}{l_{\beta 0}}}{n'^2} - \frac{\sum_j f_{\beta j} n_{\beta j} - \frac{2f_\beta n_\beta}{l_{\beta 0}}}{\frac{1}{2}f'^2 n'^2} \right\} \end{aligned}$$

以上の二つの式と式 (09) とから推定すればよい。

5・4 iii の場合の、全体での推定式

前半で打切る層を一般に  $\beta$ , 他の層を  $\alpha$  で表わすと、ii の場合と同様に

付録Ⅱ、Ⅲ

$$\begin{aligned} x &\equiv Sx_i = r_0 f_a + S 2r_0 f_\beta \\ &= r_0 (f_a + 2S f_\beta) = r_0 f'' , \\ y &= r_0 (n_a + 2S n_\beta) = r_0 n'' . \end{aligned}$$

ゆえに式 (08) から

$$(08 \cdot 2) \quad p = \frac{r_0 (f_a + 2S f_\beta)}{r_0 (n_a + 2S n_\beta)} = \frac{f''}{n''} .$$

また式 (11) から

$$(11 \cdot 2) \quad t^2(p) = A^{(1)} B_a^{(1)} \left\{ \frac{\sum_j f_{a_j}^2 - \frac{f_a^2}{l_{a0}}}{f''^2} + \frac{\sum_j n_{a_j}^2 - \frac{n_a^2}{l_{a0}}}{n''^2} - \frac{\sum_j f_{a_j} n_{a_j} - \frac{f_a n_a}{l_{a0}}}{\frac{1}{2} f'' n''} \right\} \\ + (A^{(2)} + 3) S B_\beta^{(2)} \left\{ \frac{\sum_j f_{\beta_j}^2 - \frac{2f_\beta^2}{l_{\beta 0}}}{f''^2} + \frac{\sum_j n_{\beta_j}^2 - \frac{2n_\beta^2}{l_{\beta 0}}}{n''^2} - \frac{\sum_j f_{\beta_j} n_{\beta_j} - \frac{2f_\beta n_\beta}{l_{\beta 0}}}{\frac{1}{2} f'' n''} \right\} .$$

以上の二つの式と式 (09) とから推定すればよい。

### 付録Ⅲ 同じ語か異なる語かの線型判別函数による決定

ある単位語にどんな見出し語の形を与えて整理して行くかは、単位語の認定法と共に、語彙調査で重大な問題である。それはもちろん、付録Ⅰに  $4^\circ, 5^\circ, 7^\circ$  として述べた条件を満たすように定める必要があるが、事柄の性質上通則では律しかねる場合も多い。「マネキン/マヌカン」「ただ(一つ)/たった(一つ)」「併せて(次の点にも触れよう)/ (この点も)併せて(考えよう)」「さっぱり(する)/さっぱり(分らない)」などの類で、あるものは見出し語形の立て方を規定すれば解決しようが、それだけでは何とも扱い難いことがある。いわゆる同音異義語の疑いが差しはさめる場合である。それ以外の場合は他の適当な規準で決めるとして——事実、この調査でもそういう規準を設けた訳だが——、以下には、それでもなお決めにくい「同じ(見出し)語の意味の違いにとどまるか、それとも同音異義語か」の見分け方を述べる。それは、今度の調査で採用した一つの操作的解決策である。

#### 1 解決法のアイデア

日本語彙がすべてで  $L$  個の見出し語  $U_1, U_2, \dots, U_L$  から成るとして、任意の単位語  $u$  がそのうちの  $U_i$  に属するという判定が、常に出来れば幸である。しかし「 $u$  が  $U_i$  に属し  $U_j$  には属しない」ことを直接には立証しかねる場合が多いから、調査の際に苦しむのである。そこで間接に判定する方法はあるまいか。

今四つの単位語  $a, a', b, b'$  があり、 $a$  と  $a'$  とが見出し語  $A$  を、 $b$  と  $b'$  とが  $B$  をもつとしよう。この時  $A$  に属する単位語と  $B$  に属する単位語との間に、全く意味の似寄りがな

くても、 $(a, a')$ ,  $(b, b')$  がそれぞれ同じ見出し語  $A, B$  に属せしめられる点では何らかの似た所——たとえば対語が  $a, a'$  共に  $c$ ;  $b, b'$  共に  $d$  であるような、つまり対語共有というような、共通の性質が認められることも多い。こうした言語的性質が  $R$  個選べたとする。さて問題になる単位語  $u_0, u_1$  の対で、先の  $R$  個の性質の第  $i$  番目が、共に同様かそうではないかを調べ、その結果を点数  $x_i$  で表わす。次に

$$y' \equiv \sum_{i=1}^R \lambda_i' x_i = \lambda_1' x_1 + \lambda_2' x_2 + \cdots + \lambda_R' x_R$$

の係数  $\lambda_i'$  を適当に定めて、この式により対  $(u_0, u_1)$  についての  $y'$  の値を計算する。もしその  $y'$  が一定の値  $(-\lambda_0')$  以上なら  $u_0$  と  $u_1$  とは同じ語、そうでなければ異なる語と判定する。これと全く同じ事ながら、判定の境界値を 0 にするため

$$z' \equiv \lambda_0' + \lambda_1' x_1 + \lambda_2' x_2 + \cdots + \lambda_R' x_R$$

を作り、更にこの式の両辺を  $\lambda_1' (\neq 0)$  で割って

$$(*) \quad z \equiv \lambda_0 + x_1 + \lambda_2 x_2 + \cdots + \lambda_R x_R$$

とし、これによって  $z \geq 0$  なら同じ語  $z < 0$  なら異なる語と判定する。以上は線型判別函数法を利用した見分け方である。

語彙調査の実際には  $u_0$  を分類するのに、既に立てられている若干個の見出し語  $U_1, U_2, \dots$  に属せしめるか、別に  $U_0$  を立てるかという形で、決定を迫られる。この場合は、先の  $u_1$  としてそれぞれ  $U_1, U_2, \dots$  に属する単位語を取って来て、上記の方法を繰り返し適用して、どれに入れるかまたは新しく見出し語を立てるかを決めて行く訳である。

なお式 (\*) がなぜこうした判別力をもつか、また  $\lambda_i$  をどういう方法で決めるかは、統計理論の問題ゆえ、ここでは省く。<sup>註)</sup>

## 2 この調査で使った判別函数

### 2・1 判別の手続き

後述の規準 I～IV に照らして点数化した結果を

$$(**) \quad z = 0.066 + x_1 + 0.555x_2 + 0.423x_3 + 0.199x_4$$

に代入して得た値により、式 (\*) の下の所で述べた方法で決定する。

**規準 I** (触れ合い) i) 意味し方の共通観点の有無, ii) 指された概念・事物のカテゴリーの異同を調べ、下記の点を与える。i) には +2, 0, -2 の一つを, ii) には +1, 0, -1 の一つを与え、その和を  $x_1$  とする。

+2: 共通観点がある。

+1: 同じ order か直接の包摂関係かで同じ category に属する。

0: 判定不能。

-1: category が違う; 直接にはつながらぬ。

注 たとえば P.G. HOEL, *Introduction to the Mathematical Statistics*, 1946 (田口玄一訳, 昭 26), Ⅲを見よ。

付録Ⅲ

-2: 観点が全く違う。

**規準Ⅱ** (漢字表記) その意味を表わすのに使っている漢字が同じか否か。「もし漢字で書けば」という態度で考える。慣用のある当て字は認めるが、辞書などでして意味注記用に使ったようなものは採らない。

- +2: 全く同じ。 {A}, {A} とか {A, B}, {A, B} とか。  
 +1: 一部同じ。 {A, B}, {A}  
 0: 共に漢字では書かない。 {・}, {・}  
 -2: 全く違う。 {A}, {B} とか {A, B}, {C} とか {A}, {・} とか。

**規準Ⅲ** (アクセント型) アクセントの型が同じか否か。一方が特定の語にしかつかない時は、その形で考えた後に共通部分を抽象せよ。例: 「ハ<sup>タ</sup>シテそうか/使命をハ<sup>タ</sup>シテ」から共に「ハ<sup>タ</sup>シ」。

- +2: 全く同じ。  
 +1: 一部に同じ型あり。 {A, B}, {A} 等。  
 0: 判定不能。  
 -2: 全く違う。

**規準Ⅳ** (類語・対語) それぞれの類語・対語が同じか否か。ただし一般に出自の同じ語の範囲で考え(切符〜チケットは不可), なるべく形がそろうのを使う(有情〜無生物は不可)。手掛りに使う語または語群ごとに下記の点を与え, その和をもって  $x_i$  とする。

- +1: 両方に使える。 {A~X} {B~X}  
 0: 判定不能……適当な語が共に見当たらない場合を含む。  
 -1: 片方にしか使えない。 {A~X}, {B~Y} とか {A~X}, {B~・} とか。

2・2 判別例

判別の手続きを五つの実例によって示そう。まず点数化の結果を掲げ, そのあとで, これらの対を一括して判別する。

【例1】 A「失態を激しくセメた」とB「馬を激しくセメた」との《セメル》。

- I i: 共に, 他に対し積極的に働き掛け力を加えるという観点。 ∴+2  
 ii: 共に, 心的関係における対他行為。 ∴+1  
 II 漢字で書けば, 共に「責」。 ∴+2  
 III 共に「セメル」。 ∴+2  
 IV 類語: Aは「トガメル」Bはそうでない。 ∴-1  
 対語: Aは「カバウ」Bはそうでない。 ∴-1

【例2】 A「スタンドをつける」とB「セーターをスタンドに着せて御覧」との《スタンド》。

- I i: 共に, 立っているものという観点。 ∴+2  
 ii: 共に, 用具一支持具。 ∴+1

付録Ⅲ

- Ⅱ 共に漢字で書かない慣わし。  $\therefore 0$
- Ⅲ 共に「 $\overline{\text{スタン}}\text{下}$ 」。  $\therefore +2$
- Ⅳ 類語も対語も共に適当なものがない。  $\therefore 0$

【例3】 A「思想は相当ミギだ」とB「ミギお知らせします」との《ミギ》。

- I i : Aは中心的なものに対し, Bは今の位置に対し, 共に, 問題  
ものの位置が特定の側にあるという観点。  $\therefore +2$
- ii : Aは行為主体の属性, Bは関係一位置。  $\therefore -1$
- Ⅱ 共に「右」  $\therefore +2$
- Ⅲ Aは「 $\overline{\text{ミギ}}$ 」 Bは「 $\overline{\text{ミギ}}$ 」。  $\therefore -2$
- Ⅳ 類語: 共に適当なものがない。  $\therefore 0$
- 対語: Aは「ヒダリ」 Bにはない。  $\therefore -1$

【例4】 A「スイた肉を焼く」とB「のりをスク仕事」との《スキ・ッ》。

- I i : AもBも薄くする点では似るが, 判定保留。  $\therefore 0$
- ii : Aは変形作業, Bは完成作業。  $\therefore -1$
- Ⅱ Aには「剥」が当てられ, Bには「漉/抄」。  $\therefore -2$
- Ⅲ 共に「 $\overline{\text{スク}}$ 」。  $\therefore +2$
- Ⅳ 類語: Aは「ソグ」 Bには適当なものがない。  $\therefore -1$
- 対語: 共に適当なものがない。  $\therefore 0$

【例5】 A「モットモすぐれた人物」とB「彼はすぐれた人物だ。モットモ短所も多い」との《モットモ》。

- I i : Aはある群での程度の上限に注意が向いているが, Bでは程  
度に無関係。  $\therefore -2$
- ii : Aは量的限定, Bは論理的関係一接続条件。  $\therefore -1$
- Ⅱ Aは「最/尤」 Bは「尤」。  $\therefore +1$
- Ⅲ Aは「 $\overline{\text{モットモ}}$ 」 Bは「 $\overline{\text{モットモ}}/\overline{\text{モットモ}}$ 」。  $\therefore +1$
- Ⅳ 類語: Bには「タダシ」があるが, Aには当てはまらない。  $\therefore -1$  (次ページへ)

	$\lambda_i$	例 1		例 2		例 3		例 4		例 5	
		$x_i$	$\lambda_i x_i$	$x_i$	$\lambda_i x_i$	$x_i$	$\lambda_i x_i$	$x_i$	$\lambda_i x_i$	$x_i$	$\lambda_i x_i$
規準 I	.066 1	3	3.000	3	3.000	1	1.000	-1	-1.000	-3	-3.000
Ⅱ	.555	2	1.110	0	.000	2	1.110	-2	-1.110	1	.555
Ⅲ	.423	2	.846	2	.846	-2	-.846	2	.846	1	.423
Ⅳ	.199	-2	-.398	0	.000	-1	-.199	-1	-.199	-1	-.199
$z$ 決定		4.624 同じ		3.912 同じ		1.131 同じ		-1.397 異なる		-2.155 異なる	

対語：共に適当なものがない。

∴ 0

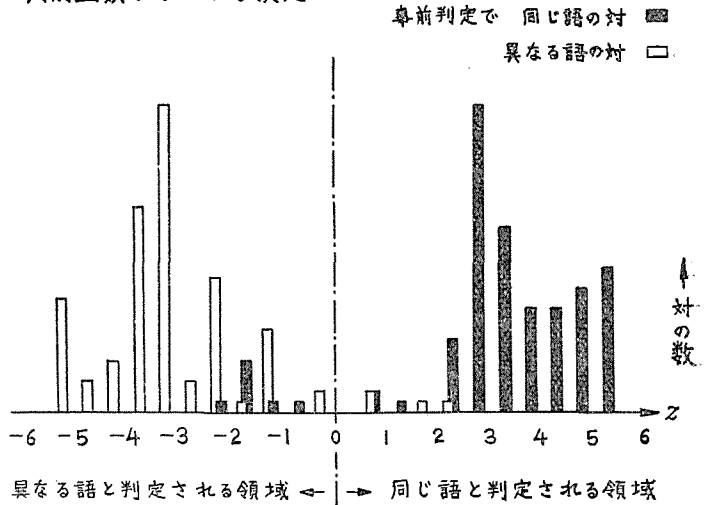
以上の結果に立って  $z$  を計算し、同じ語と認めるか否かを定める。それは前のページの表にまとめて示した。

2・3 この判別函数の効率

この判別函数式(\*\*)の係数を定めるには、後述の手順で選んだ単位語の対のうち、書きこぼ研究室の所員五名が同じ語か異なる語かを事前に判定して、一致した結果を得た約四百五十対からランダムに抜いた二百対をデータにしている。そこでこの二百対につき、 $z$ の値による決定と所員五名の一致した事前判定との合う率をもって、式(\*\*)の効率すなわち成功率と見なせば、同じ語の群に対して92パーセント、異なる語の群に対して96パーセント、全体では94パーセントであった。このデータでの判別結果を下の図で示そう。 $z$ の値は0から左右0.5刻みにまとめた。中心線の反対側に飛び出しているのが、事前判定と合わなかった対である。

この決定法は、専門家の学術的な勘を一往客観化したものと言える。同じ語か否かの判定に影響する因子はもちろんここで使った四規準における六つの因子だけではない。しかしこの方法でも、成功率は94パーセントにのぼった。かつその作り方からして、初めから全く直観なり勘なりによるよりも客観的であって、妥当

判別函数(\*\*)による決定



性の点でも劣らない。ただしこの判別函数式(\*\*)の適用に当っては、なお注意すべき事がある。すなわち

- i 単位語  $a, b, c$  から作った三つの対  $(a, b), (b, c), (a, c)$  において
  - 1)  $z(a, b) \geq 0, z(b, c) \geq 0$  でありながら  $z(a, c) < 0$ ,
  - 2)  $z(a, b) < 0, z(b, c) < 0$  でありながら  $z(a, c) \geq 0$

にならないとは限らない。この場合には  $a, b, c$  にどう見出し語を与えるか。ただし  $z(a, b)$  は対  $(a, b)$  について計算した  $z$  の値を意味する。他も同様。こういう場合の実例をあげると、 $a$  「判をオス」、 $b$  「念をオス」、 $c$  「舟のろをオス」の《オシ・ス》について

$$z(a, b) = +2.381, z(b, c) = +2.182 \text{ に反し } z(a, c) = -1.818$$

が得られた。ここで後述 iii の事情も考えに入れなくてはならないけれども、そういう事がなかったにしろ、上掲のような結果が出ることはあり得る。これはこの方式に固有のまづい点である。それを除くには、差し当り別の判別方式が実用化に耐える状態にないから、それを更に

### 付録Ⅲ

処置する方法を定めるべきである。今回は次の通り扱った。見出し語形を等しくする〔つまり同音異義の疑いのある〕もう一つの単位語  $d$  を追加して、 $z(a, d)$ ,  $z(b, d)$ ,  $z(c, d)$  が 1) の場合、共に負でなければ、 $a \sim d$  を同じ見出し語に属せしめる、すなわち同じ語と見なす。そうでなければこれらの  $z$  の値を勘案して、なるべく無理がないように二つ以上の見出し語にそれぞれを分類する——ここで再び主観的判定が加わるが、現状ではやむを得ない。また 2) に対しても同様な方針で臨む。

ii データとした二百対が必ずしも現代日本語彙からのランダム標本とは言い切れないから、式(\*\*)の  $\lambda_i$  の値には片寄りがあるかも知れない。

iii 各規準での判定は語の異同の総合的判定よりも客観的かつ容易に行えるはずであるが、なお判定者による測定誤差——与える点数の不一致があり得る。

iv 各規準での点数を全くアプリアリに決めたが、このように属性的なもので、しかも正負二方向を取る場合には、0の位置の定め方にも問題があろう。

iv については optimum な点数化の方法を考えてみたが、今のところ良い案が得られていない。そうした、方式の根本まで批判すると、

v この課題解決のための判別函数式として、果して線型式でよいか。

これらの問題点があっても、実際に成功率94パーセントをあげたのだから、この見分け方が語彙調査の実施上実用になると言ってさしつかえない。

### 3 判別函数を作るまでの経過

見出し語の識別が問題になりそうなものを辞書から捨い、色々なケースが出そう事に注意して、二十の形をまず選んだ。その意味を分類して、各形ごとに分類された項目を表にして記述した。その項目の、形を同じくするものうち、どれとどれとが同じ語または異り語と認められるかを、所員五名が独立に判定した。五名が一致して同じまたは異なると判定した「意味の対」のうち、同じ語の群、異なる語の群それぞれからランダムに百対ずつを抜いた。なお、五名が共にでたらめな判定を下したとして、しかも判定結果が一致する危険率は 0.03 強で、きわめて小さい。従って五名が一致した対についての結論はかなり確かなものと見られる。

一方、判別に使う言語的性質を考えてみた。初めには次の十一規準をあげ、各規準ごとに積極的に「しかり」と認められる場合 1 点、そうでない場合 0 点を与える方法で点数化した。

規準 1 (語源) 違う出自か。または時代をさかのぼれば形に違いが出るか。〔ただし省略形の復元によって形が区別されるものを除外する。〕

規準 2 (省略形) 省略しない形くずれない形が違うか。

規準 3 (変遷) 意味の変遷の経路がたどれるか。

規準 4 (触れ合い) 指されるものに内容上のつながりがあるか。

規準 5 (同系列語) 同じカテゴリーに属し一つの意味系列をなす語が排反するか。

規準 6 (伴う語) 等しい格で伴い得る語の概念のカテゴリーに違いがあるか。



### 付録Ⅲ

規準7（承接形式） 他の語を受けまたは他の語に続く時の型に違いがあるか。〔活用の型の違いも含む。〕

規準8（文法機能） 同じ文法機能をもつか。

規準9（派生形） 作り得る派生形で、対のそれぞれの意味と対応するものに違いがあるか。

規準10（アクセント） アクセントの型に違いがあるか。

規準11（漢字） その意味を表わす漢字が〔少くとも一つは〕同じか。

これらのうち規準 3, 4, 8, 11 は、その対を合わせる方に、他は分ける方に積極的に働くものと言える。さて試験的に、所員の一名の事前判定の結果作った同じ語の群と異なる語の群とを、この規準で点数化し、規準ごとに各群の平均値を求め、群の平均値に有意差があるか否かを検定した。規準6と8とは有意差が認められず、従って判別力の弱い規準と考えられた。そこでこれらを除く九規準を使って判別函数を試作したところ、その効率は87パーセント程度で、まだ思わしい結果ではなかった。事前判定と一致しなかった対また規準そのものに更に検討を加えたところ、規準に十分明確でないものがある事、ごく限られた対にしか適用出来ない規準もある事、 $\lambda_i$ の値が0に近くて余り役立ちそうもないとか、分ける力をもつはずなのに  $\lambda_i$  が正になるとかした規準もある事、更に、合わせる規準と分ける規準との数がつり合っていない事など、不備な点に気づいた。

こうした検討を繰り返して規準を次第に改めた結果、最後に立てられたものが、先に述べた四規準である。これに照らして、所員五名の判定が一致した対から選んで置いた二百対を、点数化した。何点を与えるかに疑問のある場合は、合議によって決めた。これをデータにして式(\*\*)を定めた訳である。

#### 4 付記

既に述べて来た通り、判別函数式(\*\*)はわれわれの目的に対して相当に効率がよい。従って調査の遂行のためには、この式についてこれ以上述べる所はないが、それとは別に言語的性質の面からいささかの分析を試みて置こう。

われわれはいわゆる同音異義か否かの決定に、先の2・1にあげた四規準——言語上の性質の四つの面を使った。さてこれらの間の相関関係はどうであろうか。それぞれに与えられた点数によって、まず〔単〕相関係数を出すと、

	規準 I	II	III	IV	
右の表の通りとなった。規準 $i$ と規準 $j$ と					
の間の相関係数 $r_{ij}$ の絶対値が大きければ、	規準 I	1	.543	.316	.355
この二つの言語的性質は縁が深いと言える。	II	.543	1	.156	.232
たとえば、規準 I（触れ合い）と規準 II（漢	III	.316	.156	1	.136
字）との相関係数は0.543で、他より絶対値	IV	.355	.232	.136	1

が大きい。この結果はわれわれの直観と合致

### 付録Ⅲ

する。しかしよく考えると、 $|r_{ij}|$ が大きいだけでは、規準  $i, j$  の間に直接深い関係があるとは言いきれない。もし別に規準  $k$  があって、 $(i, k), (j, k)$  には直接の関係があり、 $i$  と  $j$  とは  $k$  を介してだけ関係する時、 $|r_{ik}|, |r_{jk}|$  が大きければ  $|r_{ij}|$  も大きくなることもある。この場合には  $k$  の影響を取り除いて  $(i, j)$  の相関を考えなければならず、そういう目安になるものに偏相関係数がある。そこで今の場合もこれを算出してみよう。〔ただし各規準で取り得る範囲は相当限られており、また回帰は必ずしも線型ではなからうから、偏相関係数の値の解釈は、ある程度大まかにならざるを得ないが。〕ここに記号  $r_{ij.k}$  は、規準  $k$  と  $i$  との影響を取り除いた  $(i, j)$  の相関の係数である。計算の結果次の値が得られた。

$$\begin{array}{lll} r_{12.34} = 0.495 & & \\ r_{13.24} = .262 & r_{23.14} = -0.046 & \\ r_{14.23} = .257 & r_{24.13} = .045 & r_{34.12} = 0.028 \end{array}$$

これで見ると、規準Ⅰだけは他の三規準のどれとも、かなり関係が深い。この事は規準Ⅰの内容からして当然であろう。次にⅠ以外の三規準相互の間の関係は余り深くないと考えられる。規準Ⅱ（漢字）とⅢ（アクセント）の間では偏相関係数が負の値となったが、絶対値が小さくて、これらに逆相関を認めるほどの事はない。ともかくこの三規準は言語的性質の、かなり違った面を扱っていると言える。

このように見て来ると、語彙調査とは離れるが、以上述べた方法を利用し、もっと多くの言語的性質を使って更に徹底した調査を行えば、どんな言語的性質の間には深い関係があり、どの性質とどの性質とは縁が薄いかというような事、また同語意識の形成に寄与する言語的性質として、どれは強くどれは弱いかというような事が、次第に明らかになって行くであろう。

立ち返ってわれわれの用途に当てるための判別規準として、この四つで一往よいか、また不適當なものがなかったかを、最後に一言しよう。試みに更に語の承接形式・派生語形の異同という規準、語史的観点に立つ規準を追加して、新たな判別函数を作ってみたが、成功率は式(\*\*)よりもかえって低かった。この事だけから断定は出来ないが、よほどよい規準を加えないと効率さはさして高まるまい。また四規準中では、規準Ⅰの内容が他の規準よりも主観的色彩の強いものである。かつ他の三規準との相関も割合に高いので、これを省いたらどうなるか、つまり規準Ⅰは他の三規準である程度代用出来るのではないか。それを見るため規準Ⅰと他の三規準との間の重相関係数を求めたところ、0.581であった。従って規準Ⅱ、Ⅲ、Ⅳが規準Ⅰの代役をする割合は、約三分の一程度と見積られ、規準Ⅰをむだだとして捨てることは出来ない。

意味の研究は今日までのところ、客観的には行い難いとされて来た。しかしたとえここに扱ったような方法を発展させれば、幾分かずつでも客観化出来るのではあるまいか。また客観的操作が出来なければ、すなわち同じ語か否かを主観だけによって決めるのでは、語彙調査の基礎はくずれてしまうのである。

# 索引

- 凡例 1 この索引には、前編・後編を通じて（目次から容易に検索されるもの以外の）おもな事項や人名のしるしてあるページを示した。見出し通りの語句が使ってなくても、その事柄が扱ってあれば、取り上げた。
- 2 見出しの排列は、現代かなづかいによる五十音順とし、ローマ字などで始まる項目はワ行の後に置いた。  
なお小見出しの部分の排列は、便宜によって、五十音順でない所もある。

- 3 前編のページは、数字の前に\*をつけて示した。脚注にある事を示すには、数字の後にnを添えた。また定義など大切な記述のある場所は、イタリック数字にした。
- 4 →は「矢印の次にあげる項目を見よ、参照せよ」の意である。
- 5 同じ見出しについての記述が同じページに二箇所以上あっても、特に断ることはしなかった。従って、求める項目が見つかった時も、その前後に注意せたい。

<b>ア行</b>	
後部分	87, 88
一段抽出法 →抽出法	
意味 なお→同じ語、異なる語語の～	47, 48
～の研究	115
～の分類	45
同じ語	*2 ; 19, 20, 21—23, 109, 115
	なお→見し出語
<b>カ行</b>	
確率比例二段抽出法 →抽出法	
かけことば	20, 96
漢語 なお→結合力、結合形式	
一字の～の派生動詞	80
観測値の重み	30, 31, 42
慣用句	46
企画の際の諸条件	1—3, 97—98
記号別	9
基本語彙	1, 21, 39, 45
居体言	87n, 93
計算誤差 →誤差	
形容動詞の扱い方	*3 ; 46
計量的操作	2, 94, 96
結合	10, 78
なお→結合力、結合形式	
～の相手になる語の種類	87
語の内部における～	92
結合形式	79, 87
なお→結合力	
一字の漢語の～	87—89
二字の漢語の～	95—91
和語名詞の～	91—92
和語名詞内部の～	92—93

結合力	83	なお→結合形式	
一字の漢語の～	84		
二字の漢語の～	85		
感動詞の～	86		
形容詞の～	86		
コソアド語の～	86		
固有名詞の～	86		
数詞の～	86		
接続詞の～	86		
副詞の～	86		
洋語名詞の～	85		
連体詞の～	86		
和語動詞の～	86		
和語名詞の～	85		
語	95		
～の意味	48		
～の結合 →結合			
語彙	95		
～の豊かさ	32, 39		
～共通量	32	なお→語彙量	
語彙量	26	なお→異なり語数	
～の推定結果	31		
～の推定法	29—31		
～の推定法の根拠	32—37		
合成語	48		
語源単位	10		
語構成	78		
～要素	79, 89		
		なお→前部分、後部分	
語構造	78		
誤差			
計算～	*7		
測定～	30, 42, 113		
抽出～	*5 ; 30, 42		
		なお→相対誤差、使用率推定値の精度	
五十音順排列	*7		
コソアド語	80, 82		

異なり語数	95
異なる語	20, 23, 109
なお→見出し語	
固有名詞 →名詞	
混種語 →名詞	
<b>サ行</b>	
採集カード	24
最小二乗法	30
Deming 流の～	31, 42
雑誌別	1, 8—9
雑誌の分類	*1 ; 9
指示語(=コソアド語)	*6
実施の経過	4—5
指定カード	24
射影函数量	41
～による使用率分布の近似の結果	43—44
集計	24, 105—106
集計単位	2, 20, 24
～の規定	19—24, 25
なお→見出し語	
集落	3, 24, 97, 103, 104
等大の～の作り方	104
～抽出法 →抽出法	
使用順位	*5—*6
使用度数	*1, *4 ; 95
	なお→使用率、標本使用度数
情報理論	40, 44
使用率	*4—*5 ; 50, 95
～の推定法	2, 100—102
～推定値の精度	*5 ; 2, 100—102
～推定値の精度計算	2, 4, 24, 106—108
～の分布函数を求める意義	38—39
～の分布に関する諸説	39—

41	なお→射影函数型	
指令カード	24—25	
職業分類		
昭和25年国勢調査での～	50n	
助詞・助動詞の処置	2, 10	
数詞	80, 82	
精度	→使用率推定値の精度(計算), 誤差	
整理票	24	
線型判別函数	23, 109	
この調査で使った～とそ の効率	109—112	
総合雑誌		
～を対象とした理由	1	
～の定義	9	
～の編集方針	8	
～の執筆者層	7	
～の読者層	6—7	
～の表記法	7—8	
～の表現のむずかしさ	8	
操作上のページ	103—104	
相対誤差・相対精度	*5; 101, 105	なお→誤差, 精度
層分け	9	
測定	94	
～誤差	→誤差	
夕行		
『体系商品辞典』	50n	
代表形	*3, 21	
田中久直	50n	
単位語	19, 21, 95, 108, 112—113	なお→調査単位
～認定	21, 95—96	
単独	11, 78	
抽出誤差	→誤差	
抽出台帳	9, 104	
抽出法	2, 97, 102—105	
一段～	97, 98—99, 102, 103	
確率比例二段～	97, 98—99	
等大の集落～	97, 98—99, 102, 103	
調査項目	3	
調査対象の範囲	2, 3	
調査単位	2	なお→単位語
～の規定	10—19, 25	
文章を～に区切った実例	19	
調査方式	3—4	
土居光知	46	
同音異義語	20, 108, 114 (次の段へ)	

～か否かの判別例	110—112	
動詞	46, 80	なお→結合力
和語～	80, 82	
読書調査	3n	
度数	→使用度数, 標本使用度数	
ナ行		
二重表記	20, 96	
『日本語基本語彙』	46, 49, 50n	
『日本昆虫図鑑』	50n	
『日本植物図鑑』	50n	
『日本動物図鑑』	50n	
延べ語数	95	
ハ行		
譬喩的用法	47, 96	
標本使用度数	*1, *2, *7; 24, 40, 107	
標本の大きさ	104	
標本の前半部	24, 48	
	79, 105—106	
品詞別	46, 49n, 80	
～分布	81	
『婦人雑誌の用語』(国研報告4)	*1, *4; 1, 10n, 41n, 45, 49n	
付属語	81	
付属要素	16—18	
文体論	39	
分布函数	38	
分類語彙表	45	
～の分類目	*6, *10; 46	
～の分類番号	45—47, 49	
～に使った符号	49	
分類番号・分類目	→分類語彙表	
変量	38	
母集団の大きさ	104	
翻訳機械	39	
マ行		
前部分	87, 88	
松下大三郎	88n	
水野の不等式	100, 105	
見出し語	20, 95, 108, 112—113	なお→集計単位
～認定	96, 109—112, 112	
～形の立て方	*2—*4; 108	
名詞	46, 80	なお→結合力, 結合形式, 居体言(次の段へ)

和語～	80, 82
洋語～	80, 83
混種語～	80
固有～	80

### ヤ, ラ, ワ行

山田孝雄	88n
洋語	→名詞
リスティング	104
リプリント=カード	4, 42
類義語	
～集	46
～目録	46, 49n

和語 → 動詞, 名詞

### その他

α単位	2, 10, 46
β単位	*1; 3, 46, 49n
	なお→調査単位の規定
Bally, Ch.	49n
Condon, E. V.	39, 40n
Deming	→最小二乗法
Dornseiff, F.	49n, 50n
Gini の法則	44
Guiraud, P.	26, 32n, 34n, 39
Hallig, R.	49n
Herdan, G.	32n, 42n, 44, 94n
K-特性値	32n
Lorenz 曲線	44
Mandelbrot, B.	40
Pareto の法則	44
Poisson 分布	106
Roget, P. M.	46, 49n
Shannon, C. E.	39
Tchebychev の不等式	36
vocabulary-occurrence duality	42n, 44
Wartburg, W.	49n, 50n
word count	19, 21, 44, 94
Yule, G. U.	32n
Zipf, G. K.	39, 40n, 41
5-, 50-の意味	*4—*5
「」( * ) の意味	49

—終—

—国立国語研究所刊行書—

昭和24年度	国立国語研究所年報	1
昭和25年度	国立国語研究所年報	2
昭和26年度	国立国語研究所年報	3
昭和27年度	国立国語研究所年報	4
昭和28年度	国立国語研究所年報	5
昭和29年度	国立国語研究所年報	6
昭和30年度	国立国語研究所年報	7
昭和31年度	国立国語研究所年報	8

国立国語研究所報告1	八丈島の言語調査	
国立国語研究所報告2	言語生活の実態 —白河市および付近の農村における—	(秀英出版刊) Y 300.00
国立国語研究所報告3	現代語の助詞・助動詞 —用法と実例—	
国立国語研究所報告4	婦人雑誌の用語 —現代語の語彙調査—	
国立国語研究所報告5	地域社会の言語生活 —福岡における実態調査—	(秀英出版刊) Y 600.00
国立国語研究所報告6	少年と新聞 —小学生・中学生の新聞への接近と理解—	
国立国語研究所報告7	入門期の言語能力	
国立国語研究所報告8	談話語の実態	
国立国語研究所報告9	読みの実験的研究 —音読にあらわれた読みあやまりの分析—	
国立国語研究所報告10	低学年の読み書き能力	
国立国語研究所報告11	敬語と敬語意識	
国立国語研究所報告12	総合雑誌の用語 (前編) —現代語の語彙調査—	

国立国語研究所資料集1	国語関係刊行書目 (昭和17年~24年)	
国立国語研究所資料集2	語彙調査 —現代新聞用語の一例—	
国立国語研究所資料集3	送り仮名法資料集	(秀英出版刊) Y 300.00
国立国語研究所資料集4	明治以降国語学関係刊行書目	

国立国語研究所 日本新聞協会 共著	高校生と新聞	(秀英出版刊) Y 280.00
国立国語研究所 日本新聞協会 共著	青年とマス・コミュニケーション	(金沢書店刊) Y 280.00
国立国語研究所編	国語年鑑 (昭和29年版)	(秀英出版刊) Y 450.00
国立国語研究所編	国語年鑑 (昭和30年版)	(秀英出版刊) Y 600.00
国立国語研究所編	国語年鑑 (昭和31年版)	(秀英出版刊) Y 450.00
国立国語研究所編	国語年鑑 (昭和32年版)	(秀英出版刊) Y 480.00
国立国語研究所編	国語年鑑 (昭和33年版)	(近刊)

昭和33年2月

国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋1-1

電話九段(33)代表4295

UDC 413:495.6 (06)

NDC 814

RESEARCH ON VOCABULARY  
IN CULTURAL REVIEWS

(Part II — Method & Analysis)

CONTENTS

Foreword

1. General Outline

Purpose — Planning — Administration

2. Method

Collecting Information from Editors of Cultural Reviews — Stratification of Cultural Reviews — Definition of the Unit for Operation — Steps in Our Work

3. Statistical Structure of Vocabulary

Estimation of the Amount of Vocabulary — An Approach to the Distribution Function of Relative Frequencies

4. Semantic Structure of Vocabulary

General Description — Word Table Classified from the Point of Semantics — List of Classification Items

5. Word-construction

Stages of Combination of Word Components — Construction Patterns

Appendix I Foundation of Word Count and Definitions of Some Fundamental Concepts

Appendix II Sampling Plan and Counting Program in Our Survey

Appendix III Statistical Procedure for Discriminating Same Words or Different Words

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

KANDA-HITOTUBASI, TIYODA, TOKYO

1958